

雨にも種を。(リライト
版)

re=tdwa

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

FF8の世界にトリップした青年のお話。※以前Arcadia様に投稿、その後ブログでアップしていた小説のリライト版です。主に加筆修正しております。※完結しました。

最終話	29	28	27	26	25	24	23
312	301	291	281	272	263	255	244

暑い。むしろ熱い。

どうしようもない熱気に包まれ、顔を流れる汗を袖で拭う。

少しだけクリアになった視界。対象までの距離は20メートルほど。

ブリザガの残量は残り40ほど。

これが足りなくなる前に、なんとか終わればいいのだが。

そう思いながら、更にブリザガを唱え、打ち続ける。

炎が届かぬように作り出した氷の壁からさらにその向こう。

炎の魔神イフリート。Seed試験の前課題。

ローレベルG・Fとはいえ、俺には流石に荷が重く感じる。

バラムガーデンすぐそばの炎の洞窟に入り。

ローレベルG・Fである炎の魔神、イフリートを取得する。

本来なら、何の苦もなくやり遂げてしまうのであろう課題である。

それこそ普通の生徒だったなら。

Seed 試験を受けるような生徒だったならば、楽だったろうに。だけど、その甘えは俺には許されないものだった。

「ブリザガ！ブリザガ！」

この日のために用意した氷属性の上級擬似魔法を連発する。

魔法は得意だ。格闘や剣術、他の事に比べたら。

それでも、魔神の熱気に中々冷気は打ち勝つまで至らない。

イフリートが苛立ち始めて、まとう熱気が増している。

振り払うかのように起こす熱風を氷の壁で避け。

さらにブリザガを繰り返す。幾重に。幾重に。力尽きるまで。

右手につけたブレスレットが熱を吸って、熱いほど。

だけど今コレを外してしまえば、ここに立つ事すら叶わない。

このジャンクション・マシンが、最低限の力を俺にくれている。

100個用意したブリザガが無くなる頃。

漸くイフリートの熱気を打ち崩し、炎の魔神の力が尽きる。

ブレスレットを通して伝わる炎が、課題の成功を教えてくれる。

「よくやったわね」

俺に声をかけたのは指導教官であるキステイス先生だ。

俺の一つ年上である18歳だが、その容貌は大人びたものである。

いつも冷静な彼女の声が、今は呆れたような響きを持っていた。

「直接勝てるとは思わないけど、これだけやればいけますよ」

俺が今回とつたのは、大量の氷魔法を使った物量作戦だ。

氷の壁でバリケードを作り、そこからブリザガで速攻をかける。

それだけ準備しないといけない理由が、俺にはあつた。

「じゃあ早めにここを出るとしましょう」

先生もどうやら暑さには耐えきれないようだ。

微かに顔を顰めながら試験の終了を促す。

そんな先生に、俺は苦笑しながら確認の意をこめて聞く。

「はい。走りますけどいいですか？」

「また、全部逃げるのね？」

当ったり前ですよ、と俺は無駄に胸を張って答えた。

気が付いたのは12歳と少しの頃だった。

両親を、幼い頃に亡くしてしまったらしい“俺”は。

生まれ故郷のティンバーを離れ、ガルバディアに連れられて。

ガルバディアのそこそこ大きな孤児院で育てられていた。

そこは決して悪い待遇の場所ではなく。

子供たちはそこそこの生活を送っていたが、経営が厳しくなり。

頭角を現し始めたガーデンに取り込まれることになった、らしい。

——らしい、というのはその時に俺の記憶が始まるからである。

俺が目覚めたとき、そこはバラムガーデンの医務室だった。

ありきたりな公立学校の保健室のような外見。

戸惑う俺に、周りの誰も最初は違和感を抱かなかった。

聞くところによると。

孤児院を離れ、バラムガーデンに向かう途中の列車に。

モンスターが襲撃し、孤児院の子供は食われてしまったらしい。

その中で偶然一人だけ生き残ったらしい。俺は、

救出されたのち、予定通りにガーデンに引き取られたそうだ。

だから、誰も俺が戸惑っていることに、不思議に思わなかった。

混乱や記憶の欠如は、惨状を見たことによるショック。

そう診断されるのも無理はなく。

そして、それ以上に俺にとつてはありがたい勘違いだった。

俺には孤児院の記憶や、シオンという名前の記憶なんてなかった。

それはそうだ。俺はここで目覚めるまで、そんな名前じゃなかった。

日本に住む、普通の大学生として過ごしてきたのだ。

日常のちよつとした出来事に一喜一憂し。

バイトをし、学問を行い、そして事故や病気とは縁がなく。

非常に地味な学生として20年間を過ごしてきたその俺に。

鏡に映る中学生ぐらいの子供や、孤児院の生活。

そして、子どもたちが食い荒らされる凄惨な光景のような。

そんなものの、記憶があるはずもなかったのである。

幸い、ガーデンは不幸な環境の孤児たちも受け入れていた。

日常生活の常識や、その他一般常識の特別授業もあった。

俺はそれらを、まず一から受けさせてもらえることになった。

そして、やがては。

一般生徒の受ける基礎知識講義と戦闘技術講義を受けてもらう。

心配することはない、と担当の先生からも安心するよう言われた。

そんな説明を受ける中、当の本人である俺は混乱していた。

ここはいったいどこなのか。

バラムガーデンってFF8にあったあの。

そんなことより、俺は一体どうなったのか。

その時の俺には、何をどうすればいいのかすら判らなかつた。

恐らく顔を真つ青にしていただろう俺を見て、周りは心配をしたのか。

身体に大事をとって、3日程医務室に泊まることになった。

俺の混乱し、考え込む姿。それを大人は見守ってくれた。

俺じゃない“俺”が経験した惨状に思いを馳せているのだろう。

どうやら、そんな勘違いをしてきているようだった。

特に医務室のカドワキ先生は、本当によくしてくれた。

その視線に憐れみが混じっているのが気になるけれど、仕方ない。

俺は確かに、憐れむべき子どもにしか見えないのだろう。

けれど、その間に、俺は只管今後どうするかを考えていた。

この場所がバラムガーデンであることは、周りから確認し。

そして、魔法があることも、驚きを隠しながらも、見知つた。

結果的に気付けたのは、ただ一点。

この世界が少なくともFF8の世界に似ているということだ。

同じとは、口が裂けても言いたくはなかったけれど。

ガルバディア。エスタ。ウインヒル。ドール。

Seedという傭兵、魔女の存在。魔法の存在。地形、地名。

強いて言うなら違いは、俺がいるということだろう。

この世界に何故来たのかという疑問はある。

しかし、考えても答えの出ないものだ。と早々に諦めるに至った。

これが夢ならば、寝れば覚めると思ったけれど、違った。

目が覚めるとそこはやっぱり医務室。

これは夢かもしれないが直ぐに醒めるものではないと知らされた。

ならば、ある程度は現実として受け止めるしかないだろう。

そうなる。と今の現状を受け止めるしかない。

受け止めるべき現状は、FF8に良く似た世界にいるということ。

ならば。そう。何も知らないよりはマシではないのだろうか。

FF8という魔女の物語だ。

イデアからリノアへ受け継がれた魔女の力。

それを目指して未来から来た、ラスボスのアルティミシア。

最後にいたるまでには色々な抗争があることを俺は知っている。

ガルバディア軍がドールに侵攻。ティンバーを占領。

魔女イデアによるガルバディアの洗脳。ガーデンへのミサイル攻撃。
ガーデン同士の戦闘。月の涙・ルナティックパンドラ。

そう、この世界は決して平和な世界ではない。

俺が一人、ここにいる理由も考えればそれも当然のことである。

俺以外の子どもは、既に食い荒らされているのだ。

この世界にはモンスターが居て、そして人と人の争いがある。

俺は焦った。

非常に焦った。

俺は戦争に巻き込まれるのはどうしても嫌だった。

人の生き死ににも、未来にも、何にも関わりたくはない。

それはどうしても生臭くて、俺には我慢ができそうになかった。

そう、それにもう一つ。俺が巻き込まれたくないのに理由が一つ。

このゲームは。

この世界は、俺が何もしなくてもHAPPY ENDに終わるのだ。

ならば、俺は何をしなくてもいいだろう。逃げ続けてもいいだろう。

ガーデンで自分の身を守る程度の力だけ付けて、

物語に突入する前にガーデンを降りてウインヒルあたりに逃げ込もう。

そうすれば、きっとこの覚めない夢もいつかは覚めてくれるはず。

そう決めた俺は、割と前向きに思えた。

ドール実地試験に向かう潜水艦の中、俺は不安と戦っていた。関るつもりはなかった本編。

持つつもりなどかけらもなかった武器。

感じることもなんて僅かにもないだろうと思つてた痛み。

これからはそれと向き合つていかなければならないのだ。

この、ハンデ付きの身体一つを武器に、スコールたちと一緒に。今から、それが始まるということに、俺は怖がっていた。

医務室を卒業してすぐ。

まだ余り人がいないガーデンには沢山の空き部屋があつた。

実際には入る予定だった人数が来なかつたせいかも知れない。

そうなった子どもたちを思えば、胸糞が悪い気もする。

だが、実際にその子たちを知ってるわけでもなく。

自分も危なかったというのも含めて、現実味は薄かった。

とにかく、個室に案内された俺。

それは、ありがたいのかどうなのか、微妙な所だったけど。

記憶喪失の俺に対して、ガーデンの人たちは優しくかった。

元々孤児だった人が多いこと。

同い年の生徒が多いことも含めて、みんなが優しくしてくれた。

そうなれば、流石に少しは緊張感も和らいでくる。

寝ても覚めない夢の中、日常に俺は慣れて行くのだった。

勿論、慣れたいかといわれれば、それはまた別の話だったけど。

……帰りたいという感情は、胸を何処までも蝕んでいた。

だけど、それはきつと叶わない夢になるんだろうな、と。

目の前の現実慣れていく度に、俺は常々と実感していた。

世界の移動なんて、それこそこの世界でも夢物語だった。

ありえるとすれば、魔女の力とか。

そういうレベルの話であって、現実味はまるでなかった。

調べれば調べるほどに、無茶という現実のみが目の前にある。

諦めにかかった俺は、それなりに目の前の現実を生きていく。

歴史や地理、数学や科学といった基礎学問。

魔術理論や魔術実践、アイテム論に戦術論、武術などの戦闘技術。

12歳までの子どもで構成される幼等部。

15歳までの子どもで構成される初等部。

基礎単位を取り終えた学生で構成される専門部。

俺は12歳という年齢上、初等部に配属されることになった。

同学年の子どもたちと、基礎学問と戦闘技術を身に着けていく。

もちろんそれと並行して一般常識の授業を受けることにもなった。

しかし、これでも一度は大学生になった精神だ。

世界が変われど基礎学問は大きく変わりようもない。

上から数えた方が何倍も速い成績で終わらせていけた。

心配で、かつやりたくもなかった戦闘も。

基礎魔術理論とアイテム論はもともとのゲーム知識で好成绩を取った。

ゲーム脳とは、誠に恐ろしいものであると思いつきながら。

しかし、バラムガーデンは兵士養成機関だった。

一番重要視されるのは直接戦闘技能である。

それこそ、武器の取り扱いから、戦闘時の立ち回りまで。

直接戦闘技能は、初等部では1年時に基礎的な体術。

2年時にそれぞれの得意とする武器と銃器の基本的な扱い方。

それを終えたら、訓練場で実際にモンスター相手に戦闘を行っていく。

俺は、元々そんなに運動神経が良い方ではなかった。

運動にそこまで興味がある方ではなく、見るだけの人間だったし。

授業で悪目立ちしない程度にできれば良かったからだ。

特に、ここでやるものは、人や物を傷つけるための技術である。

身体を動かすのは気持ちがいいが、積極的にやろうとは思えなかった。

結果として俺の武術講義の成績は平均を少し下回るものだった。

少しで済んだのは、単純な理屈。

みんながseedになろうと努力しているわけではないからだ。

俺と似たような、冷めた学生は何処にでもいるという話である。

最低限、自らの身が守ればそれでいい。

そんな感じの冷めた学生によって平均は着実に下がっていた。

結果としてだが、俺は問題視されない程度の成績となった。

他のクラスに原作組がいることには、授業が始まってから気付いた。

思えば、今がいつかということのを全く意識していなかった。

それでは、原作知識があっても片手落ちにもほどがある話だった。

キステイスとサイファーは13歳。スコールとゼルが12歳。

つまり原作のスタートからは恐らく、大体5年前。

勿論、この世界が原作通りであれば、という前提であるけれど。

ならば、俺の目標もある程度決まってくる。

俺の目標は、5年後のseed試験が始まるよりも少し前に。

ガーデンを抜けて安全そうなウインヒルに逃亡することになった。

「適正が、ない?」

「みたいですねえ」

15歳になり、初等部3年になると実践的な授業が増えて行った。

基礎を埋め尽くし、後は個人で専門分野に特化していくためである。

その共通する最後の授業の一つ、G・F論で初めて躰くことになった。

G・F。ガーディアン・フォース。いわゆる所の精霊とかである。

これを伴って行うジャンクション、身体強化がSeedの強みそのものである。

それが、俺には適正がないというのが、明らかになったのだ。ジャंकシオンがなければ、Seedであろうと普通の人間と変わらない。たかが戦闘訓練を受けた学生如きに負けるほどこの世界は甘くない。普通のモンスターにさえ、軍隊を作つてようやく戦えるほどなのだ。その問題をジャंकシオンは解決してくれる。

ただの個人を、ドラゴンとも殴りあえる程に強化してくれる。頭の一部の領域を奪い、記憶を消失させることを代償として。

その記憶の消失と引換の力こそが、Seedが必要とされる理由である。この世界の戦闘技術や軍隊は、モンスターを相手のものだ。

人と物を集めた結果、2つの大国ガルバディアとエスタが作られ。

それ以外の街は、モンスターが少ない辺境に作られることになった。

そう、この世界の軍隊はモンスターからの自衛のために作られた。

大量の人と物を守るべき場所に広範囲に設置して、安全を維持し続ける。そうなる資金は異常なほどに消耗を続けるのである。

そして大量の人と物を使う時点で、攻撃行動は非常に取りづらくなる。

例えば山や谷間などにモンスターが大量発生したとき。

軍隊が戦うにはそこまで集団と装備を持っていかなければならないのだ。

不可能ではないが、現実的ではない。

そんな人間の状況を覆すのが、個人を強化可能なジャンクションである。ジャンクションがあれば、人間は人間以上の力を得ることが出来る。

だが、その記憶の喪失というのが、軍隊における問題点である。

元より軍事政権となりやすいこの世界の軍隊である。

記憶の消失の代わりに絶大な力を得られる方法があればどうなるか。

軍事クーデターを引き起こすような爆弾を身内には持ちたくない。

しかし現実的に、軍隊だけでは出来ることに限界がある。

そこで名乗りを上げたのが、魔女イデアとシド学園長である。

イデアとシドは、魔女を倒す騎士としてSeedを作る必要があった。

それは物語の最後にして最初、詰まるところ、エンディングにおいて。

魔女イデアがseedを知った時から始まった、絶対の流れである。

それから、イデアはseedを作り出すためにガーデンを作り始め。

オーナーであるノグの力を借り、ガルバディアを中心に資金を集めた。

そして3つのガーデンがこの世界に作られたのである。

ガルバディアにとっては外部組織というのも都合がよかった。

資金の投資で魔女とガーデンに恩を売り、支配することが出来る。

維持費用は必要なく、依頼費という形で渡すだけになるのだ。

依頼費は高額であるが、維持費用に比べたら大したものではない。

それになんと彼らは孤児を引き取り兵士として育てるといふ。

記憶障害などの全ての問題を、ガーデンが全て引き受けてくれるのだ。

ガルバディアにとってはこれ以上ない程の条件であった。

とにかく。

Seedはジャンクションによって強化された身体で戦うものである。

体力や筋力だけでなく、魔力や毒などへの耐性にも及ぶ強化。

魔女イデアとオダイン博士が作ったジャンクションの力は絶大だ。

精神にジャンクションしたG・Fと擬似魔法をつなげること。

それにより直接強化された肉体は、兵器よりも強力な近接戦闘を可能にする。

彼らは派遣された場所で、身一つでモンスターを殲滅することが出来る。

そのために必要なジャンクションが、俺には出来ないらしい。

ジャンクションに殆どといつていいほど、適正がないらしいのだ。

適正がないというと語弊がある。

ブレスレットを通せばジャンクションそのものは出来なくはない。

しかし、その強化値が平均の強化値よりも圧倒的に低い。

精神と身体の不調が原因であるようだ。先生は首を傾げ。

それに心当たりがある俺は、先生を記憶喪失のせいですと誤魔化し。俺は更に戦闘を行うことへの危機感をつのらせていった。

3

ガーデンに入ってから2年間。

俺は一生懸命に勉強し、身を守る手段を身につけて行つた。

ジャンクシヨンは出来なくても、出来ることはあると信じて。

近接戦闘能力は余り適性がなかった。

しかし、それでも一般人相手に身を守ることぐらいならできる。

モンスター相手にも、時間を稼ぐことぐらいなら問題はなかった。

選択した武器は、バトルロッド、要するところに杖である。

刃物を使うのは怖かつたし、扱いの難しいのは選びようがなかった。

軽さと扱いやすさを理由に、竜の骨を削つた杖を使うことにした。

近接戦闘に対して、魔法には少なくない適正があるようだった。

魔法はジャンクシヨンマシーンに付けるストックストーンに入っており、

使う時には意識を向けながら術式を起動、放つといったものである。

この過程には、術式の記憶やイメージの構成が必要とされており。

現代でそれなりにゲーマーをしていた俺には向いているものであった。元々の魔力も高く、魔法系の授業ではかなり高い順位を維持し続けた。そして今回ジャンクションに適性がないと言われた。

ジャンクションに適性がないことはそこまで珍しいものではない。むしろ完全に使えるものの方が少ないといった感じらしい。

各能力間やG・Fの相性があったり、個人でばらつきがあるようだ。しかし大抵は60%程の強化が出来るらしく。

30%もない俺は、普通の人間に比べて、大分見劣りすることになる。

近接戦闘は本格的に向いていないな、と僅かならずがっかりした。

魔法に関しては元の魔力の高さがあって、悪いものではないらしい。

発動スピード、命中、威力、魔法向きのseedと同等の実力はあるそうだ。

もちろん実際に戦ったら近接戦闘で瞬殺されるだけである。

しかし、だからといって何の工夫もしないことは趣味じゃなかった。

この世界には、魔女の使う魔法と擬似魔法以外にもまだ道はある。

それは、人間が個々の才能で使う「魔術」というものだった。

簡単に言えば、キステイス・トゥリープの使う青魔法である。

擬似魔法が簡単かつ強力なだけで、技術さえあれば特殊なことが出来る。

その中でも、青魔法はモンスターを使うものを再現しているだけだ。俺は、ジャンクシオンをどうにかできないかを考えているうちに。

G・Fとの適合率が低いからこそ、その自分との隙間に気がついた。

その隙間を探っている内に、幾つかの技術を身につけることが出来た。

隙間を探るということは、嫌でもG・Fの存在を知覚すること。

元より魔術に適正がある身体だったようで、それが魔術の感覚を磨いた。

身に着けたのは、擬似的なテレパスとクレヤボヤンスの亜種だった。

詰まるところ、G・Fが持っている知覚能力を同期化しただけだ。

周辺の探査とG・Fをジャンクシオンしている相手への念話。

それが、ジャンクシオンの代償として十分なのかは、判らなかつたが。

そうこうしている内に、俺には一つの仇名がついた。

基礎学問と魔法授業に杖を使用した自衛技能、そして「魔術」の習得。

俺は、魔術師のシオンとからかうように言われるようになった。

G・Fが、ジャンクシオンが使えないのであれば。

もう、ガーデンで学べることも、そう多くはないだろうと思ひ始めた。

早めにガーデンから抜け出すか、そう思っているとお腹がなった。

人生2回目の15歳はなかなか健啖なものであった。

食堂にでもいくか、と歩いていると、前方方向に人だかりがある。食堂に繋がる通路の途中で何か騒ぎが起きているようであった。

食堂に繋がる渡り廊下の入り口程に、その騒ぎの原因があった。

ザワザワしたギャラリーを野次馬根性丸出しで覗いてみると。

そこには、同年代ぐらいの派手な外見の少年たちがいた。

「何を黙りこんでるんだよ！」

「そっだもんよ！」

騒ぎの中心、3人の内仲間らしい2人組がもう1人に詰め寄っていた。

「イジメか?」と思ったが、先程の口調や声を考えると大体の予想がついた。

流石に、だもんよという語尾の人間は、そこまで多くはいなかった。

大方、サイファーと雷神が校則破りの生徒に詰め寄っているのだろう。

成績はよく、責任感と正義感も強い彼らが風紀委員なのはある種適任だ。

気が荒いのは、如何とも騒がしいなどは思うけれども。

さて、何をやらかしたのかねともう一人に目をやる。

そこには、無愛想な少年が不服そうに口を噤んでおり、下を向いていた。

スコールだ。何ともいえない感情に、思わず俺は息を呑む。彼もまた非常に優秀な学生であることを、俺は聞いていた。

基礎学問も戦闘技術も全く粗がなく、満遍なくかなりの成績をとり。特に近接戦闘では、学年の上位数人に該当するだろう。

別のクラスで、俺が接触をしようとしなかったから全く接点はない。

しかしこの三人が揃っているとは何があったのか、少しじやない興味があった。野次馬の中に見知った顔はいないかと見回すと、同じクラスの生徒がいた。

「ねえ何があったの?」

「ああ、シオンか」

「うん、スコールが何かやったの?」

近づいて声を掛けると、同い年の少年は小さく振り返りまた戻る。

どうも落ち着いている様子から、彼が状況を知ってるらしい。

「食堂でブリザド使ったんだよ」

そりやまた。普通に校則違反だけど。

往來で刃物振り回す程度には危ないことをしたらしいが。

「訓練場か練習室以外の魔法使用は禁止ってやつ?」

それをサイファーが見ててってこと?」

「そうそう」

「でも理由が何かあつてでしょ?」

「なんで判る?」

なんでつて。スコールの内面を知ってるからとは答えにくい。

少しだけ考えながら、当たり障りのなさそうな返答を口に出す。

「だつてスコール無駄なことしない人でしょ」

「お前スコールと知り合いだっけ?」

「いや違うけど。」

有名人じゃん彼」

有名人ではあるのだ。無口でむちやくちや強い奴とは。

その返答に納得いったのか、「まあな」と少年は頷いた。

「んで何があつたの?」

「アソコみろよ」

そういつてクラスメイトが指す先を追つて見る。

そこには氷漬けになつた花瓶が床に落ちていた。

近くには小さなテーブルがあり。

落ちてゐる花瓶はいつもあそこに置いてあつたものである気がした。

つてことはー？

「花瓶が落ちそうになって、割れないようにしたってこと？」

「鋭いな。ついでにその近くに猫がいたってこともあつたら完璧だ」
うっわ。

「猫が破片踏まないようになってか」

「そういうこと」

なんつーか。無口で心優しいってこのことかしらと。

理由は判ったが、その間にサイファアの問い詰めは激化していた。

今にもこの場で戦いが始まりだしそんな感じである。

——だというのにスコールはまだ無言を保っていた。

冷たい容貌からは彼が考えていることは予想もつかない、が。

彼の思考をゲームでたどったことのある俺には大体の予想が付いた。

スコールは本編でも人に説明するのが苦手だった。

見た目が冷たく、口数が少なくてクールに見える。

しかし、それは自己主張が苦手という一面にも原因があつた。

今のスコールもどうやら言いたいことはあるけど。

それが纏まらないから黙っているように俺には思えた。

もしそうなら、不器用だなと思う。

だけどそれをみんなが勘違いして、スコールに更なる重荷を課す。

不幸なのはスコールがそれに対応出来るまでの優秀さがあることだ。

それが積み重なって更に勘違いされていく、という本編を思い出す。

何だか、可哀想に思えてきた。

いや、と頭を振る。今更何をと思い直す。俺が口を出すことじゃない。

——思春期の繊細な頃に年上の理解者がいること。

現代日本ではむしろ常識過ぎる精神の成長を促進させる条件だ。

いやいや、と頭を再度振る。俺に関係あることではない。

——だがスコールにはそんな人は存在しなかった。

孤児として育ち、理解者であったエルオーネやイデアは居なくなり。

彼は段々と一人になって、追い詰められていった。

だが彼には戦闘能力者としての優れた才能があった。

精神を投げ出し、身体と技術の成長に力を注いだ彼を周りは評価した。

精神の孤独をわかってあげられる人は居ないまま。

彼には理解者がいなかった。

彼には全てを受け入れてくれる人がいなかった。

彼には彼の成長を促し喜んでくれる人などいなかった。

いやいやいや、と頭を振る。丸で俺がそうなりたいみたいじゃないか。そんな積もりはない。そんな積もりは全くないが。

……でも、俺は、そんな彼が少しだけ可哀想に思えてきてしまった。なんだよそれ。

まるでスコールが魔女を倒すためだけに生まれたみたいじゃないか。

レインは、エルオーネは、イデアはそんなの望んでない。

可哀想じゃねえか。

今のスコールは自分が言いたいことも伝えられないただの子供だ。

きつと後2年たつても何も変わらない。

本編が始まって、リノアに出会いスコールは少しづつ変わっていった。

言葉にするのが苦手なのは変わらずとも、行動で表現するようになった。

だから、今俺が何かをする必要はない。俺じゃなくてもかまわない。

駄目だ。イライラしてきた。

シドは何してるんだ。スコールを成長させられるのは学園長だけだろう？

立場的に、あの人しかスコールに手出しをすることは出来なかった。

いや、きつと何もしないのだろうか。

そうじゃなければ今のスコールもゲームのスコールも理解できない。

出来ても、しない。それがあの人の難しい立場における選択なのだろう。

騒ぎを聞きつけたのか誰かが通報したのか、教員がやってきた。

ざわついていていた野次馬も、今では少し離れた場所で静かにしている。

気がつけば、人の層の一番前に。俺は立っていた。

俺は騒ぎの中心人物3人に目を向けた。

いつそ判りやすい程の大声で騒ぎたてるサイファーと雷神。

ふてぶてしい程の仏頂面で無言を続けるスコール。

原因はスコールに求められ、彼は言い返したりしないのだろう。

——ああ、もう駄目だ。いらいらする。

俺は、一歩前に出た。最前列から一歩前に出た俺に人目が集まる。

口を開く。話す内容は決まっていた。君の思っていることだ。

俺は、選んだ。

どうしても、あの可哀想な少年を助けてやりたくなくなってしまったのだ。

たとえばそれが自らを危険に投げ込むことになろうとも。

キステイス・トウリープの見解

不思議な子だ、とキステイス・トウリープは考えていた。

評価だけなら一点を除いて最優秀。

始めて受け持った生徒の一人、シオン・グレイルはそう評価される。

彼は今、Seed実地試験の会場、ドールに向かう高速艇に同乗していた。

彼は、非常に地味な生徒だった。

普通Seedになるほどの実力者なら、目立つ要素を持ち合わせている。

それは、ある種の功名心というか、目立ちたがりなのかもしれない。

しかし、シオン・グレイルにはそういった要素がなかった。

むしろ地味としか表現しようのない顔立ちと小柄な体型。

seed試験の資格を持つていることすら、私にも疑問に思えてしまう。

地味で大人しい少年。それが彼の外見から受ける印象である。

だがそれは彼の能力をあらわすものではなかった。

魔術・G・Fに関する卓越した技能。

戦術論、補給論、情報論、戦場指揮、その他多岐に渡る技能保持者。

彼の資格と成績だけを見るならば。

最年少で seed になり最年少で教員になった私と、大きくは変わらない。

なるほど、魔術師と渾名されるだけはある生徒だと思う。

だが彼は seed にはならないだろうといわれていた。

彼には欠点がある。

ジャンクシヨンの身体能力強化の恩恵を、殆ど受けることが出来ない。

そのために、単純な意味での戦闘への適性がない。

seed の存在価値であるジャンクシヨンは非常に強力な武器だ。

若造に過ぎない私たちが戦場で本職の兵士を圧倒することを可能にする。

彼にはそれが使えない。

それは非常に大きな欠点だ。

Seed とは、少数先鋭にして戦場を荒らしまわるもの。

どれだけ他の能力に優れていたとしても、彼では本質を満たせない。

それでも彼はここにいます。

seed 試験を受けるのに必須の単位は取得済み。

筆記試験は余裕の合格、事前課題も方法はともあれ条件は満たしていた。

しかし、これから受ける実地試験は近接戦闘も含んだものである。ドール市街地の奪還。

それと現職の seed が戦う間の後方維持を行うことが主な任務となる。彼がどうやって点数を稼ごうとするのか。

どんな魔術を使つて、彼は Seed になつてみせるのか。

そのことは、ガーデンの人間の注目を少なからず集めていた。

とはいうものの、それは私が彼を特別な人間と思う理由ではない。

私にとっての彼はその特異な才能の持ち主ではなく。

むしろ、彼の交友関係に特異性を見出していたのだ。

彼の交友関係はそんなに広いものではない。

初等部におけるクラスメイトの内、彼に似たような大人しい男の子たち。

それと同じ専門授業を受ける人と若干の交流があるくらいだ。

別に誰とも接点がないというわけでもなければ。

特定の誰かと特記すべき程の深い仲というわけでもない。

しかし彼の側からではなく、別の生徒から考えるとそれは注目に値する。

スコール・レオンハート。シオンと同じく私の受け持った生徒である。

戦闘能力において並みの Seed を圧倒する近接戦闘技能を所持する彼。

今回の試験に参加し、そして間違いなく合格するだろうと期待されていた。彼は非常に優秀な生徒だ。

戦闘指揮官として必要十分の知識と高い戦闘技術を持っている。

合格すれば、間違いなく最強の一角となる Seed となるだろう。

その外見も、華やかではないが特異なものだ。

長身で鋭い眼差しをして、人を引き寄せない雰囲気。

それを持ち合わせた彼は、能力も合わせて孤高の存在とされていた。

私は学生だった頃から1つ下の優等生だった彼の噂を聞いていた。

何しろ彼は目立つ存在だったから、噂は広範囲に広まっていたのだ。

このガーデンでは、優秀である人間はすぐに評判になる。

その噂の中には彼の交友関係も含まれていた。

私が初等部を卒業し専門部に入った頃。

人を引き寄せなかった彼が気を許す存在が現れたという噂が流れた。

興味が湧いてそれが誰かというのを人伝いに調べてみた。

直ぐに答えは出た。相手もまた、名の知られた人間だったからだ。

当時の私は、魔術師としての評判しか知らなかったが。

どうやらその彼と仲良くしているらしかった。

聞けば、ちよつとした諍いを魔術師が解決したというのだ。

いいことではないか、と。

スクールに縁があるわけではなかったが、何故だか安心をした。

親しくする相手が出来たなら、彼も少しは心が安らぐだろう、と。

その年に私はSeedになった。

幾つかの任務を受ける中で、実戦に向いていないということが判った。

ならばと受けた教員試験に合格し、初めて受け持った授業にスクールはいた。

無愛想な少年だった。無口で鋭い視線を教壇で語る私に向けてくる。

何か問題があるのか、つまらない授業だと思っっているのか？

それとも、まさか理解が出来ない箇所があるとか？

そう思つて彼に質問を投げかけるとあっさり答えが帰ってくる。

優等生という噂が本当であることを確認しただけだった。

授業をした期間で確認出来たのは二つのこと。

その無愛想が、彼にとっての普通ということ。

彼は孤高の人ではなく、人と関わるのが苦手ということだった。

そして今年。

私が担当教員として指導することになった8人の中に彼らはいた。

授業と同じように無愛想なスコールと、隣に座る小柄な少年。

最初はただ偶然隣に座っているのかと思ったが。

地味な少年の名前を確認したとき、彼が噂の魔術師であることを知った。

あの地味な少年が、まさかスコールと仲がいい？

どうも想像が出来ないままに、最初の顔合わせを終えると。

シオンが、スコールに話しかけているのを見て驚いた。

あの無愛想なスコールと会話を成り立たせる相手がいるだなんて！

スコールはシオンの話に戻事をするぐらいだったが、その表情だ。

嫌がって面倒な素振りは見せず、あまつさえ微笑むかのように振舞う。

あの子はスコールにとって特別なのだ。

それが当然の事実であると周りの生徒は驚いていたりはしなかった。

その時から私にとってシオン・グレイルは不思議な存在になった。

バラムガードンseed実地試験D班班長。それが今回の俺の役割だ。

筆記試験と事前課題に続く、Seed試験の最終段階。

実際の任務に参加し、適切な行動をとれるかどうかを判定する実地試験。戦闘行動や任務貢献を総合評価して、合否が判定されることになる。

今回の任務はドール奪還。

72時間前、ドール公国が、通告なしでガルバディア軍に占領を受けた。対モンスターに特化した自衛力しかもたないドール軍は撤退。

突然の事態に対応出来ず、現在ドール山間部で抗戦が続いている。

ガルバディア圏ではあるが規定違反の為にドール公国議会が反発。

そして、今回のSeedへの依頼に至る。

Seedに依頼されたのはドール市街地の奪還。

ガルバディア軍は僅かな戦力をドール市街地に残しており。

殆どを、山間部に向けてドール軍の無力化を図っている。

今回の作戦では、がら空きの市街地の奪還を優先。

その後、山間部のガルバディア軍をドール軍と排撃し、撃退。最終的には、市街地経由で追い出すことが全体の目的である。

この任務においてseed予備生の役割はシンプル。

ドール市街地を電撃作戦により解放すること。

その後seedが戻ってくるガルバディア軍の撃退をする間、

市街地の安全維持と前線への情報伝達を行うことである。

ま、その通りになるかどうかは原作のみぞつてことである。

今回の任務はseedにおいても珍しい対人戦闘を含んだ依頼である。

実地試験として相応しいものであるかには俺としては疑問だが。

難易度は適当なものであるとガーデン上層部は判断したらしい。

現役seedは9人。

候補生は12人で4班。

それに試験を担当する教官としてキステイス先生が参加している。

任務についての説明が全体に対して行われ。

その後は部屋を別れ、各班で戦力などの確認が行われることになった。

「じゃあ手短かに自己紹介して戦力確認をしようか」

案内された小さな部屋でD班の3人が顔をつきあわせている。

D班の担当は、ドール市街地南部の解放だ。

また上陸地点と他の班の担当場所の中心であるため、伝令も担当。

戦闘は比較的穏やかと予想されるが、何せ足手まといがいるのだ。

それを踏まえて考えていく必要がある、が。

どうやら、学園長には、俺を受からせる積もりがあるらしいね。

メンバーをちらりと見て、俺は最初に口を開いた。

「まずは俺からいこう」

シオン・グレイル。

バラムガーデンの専門部。seed試験は今回が初めて。

戦闘能力には欠けるが、その他色々な技能には自信がある。

そこまで言ったところで。

事前に配られたそれぞれの能力評価シートから目を離し。

茶髪の癖つ毛の少女が口を開いた。：初顔だが、初顔ではない。

「戦闘能力は確かに低いみたいだね」

「ああ。だからみんなに頼ることになる」

「うん、でも」

少女はチラリと能力評価シートに目をやった。

「魔術、ね。念話と探索とあるけど？」

「説明させてもらう」

俺は来るだろうと思っていた質問に、用意していた答えを返す。

「G・Fによる知覚能力の強化と通信の能力だ。」

半径100メートル程の範囲で何が起こっているかが見られる」

「精度は？」

「何人いるか、どこに何があるか判るぐらいだね。」

上空にカメラがあつて、それを覗いているぐらいの精度だ」

そう思ってもらえば、面倒臭さも判るだろうか。

それなりに集中力が必要であるし、何よりほぼ俺が無力になる。

その代わりに、こういう作戦ではある意味絶大な武器になりうる。

「範囲を広げたりは？」

「射程なら300メートルまで出来なくもない。」

その射程で20メートルぐらいの範囲を調べるのが精一杯だ。

精度もかなり落ちる。

G・Fの反応を調べるだけなら大体3kmぐらいまでなら大丈夫」

G・Fの反応だけなら、という限定は付くがね。

それでもSeedがどう分布しているのかは、それで見れば判る。

もつと言えば、どのG・Fかも属性パターンからは判るけど。

「狙撃に気付くのは無理なんだね」

「その通りだ」

頷く俺に、茶髪の少女は小さく頷いた。

もう1人の黒髪の女生徒がこの部屋に入って初めて口を聞いた。

「通信は？」

「使うG・Fと同じものをジャンクションした人間にだけ。

ただ、距離が離れると成功しにくい」

「成功しにくい、とは」

繰り返してくる黒髪に、頷く。

「これはジャンクションを利用していてね。

君たちにも先に体感してもらおうと思っっている」

二人が頷いたのを確認して、集中を始める。

二人にシヴァの波動があることを確認、ジャンクションに介入。

流石に、Seed候補は適合率がかなり高いが、隙間もある。

隙間から、自分のシヴァと二人のシヴァと同期化する。

同時に知覚能力を、俺の魔力でブーストさせて適合を図る。

若干のノイズがあるが、接続を確認して。——聞こえる？

「何か頭の中がザワザワしてる」

「私も」

「それが念話だよ。」

G・Fの適合率の隙間を利用して、介入してる」

だからこそ、俺に使える技術なワケであるけど。

ザワザワしてる時にシヴァを通して俺を意識してみたい。

そういつて、俺はもう一度念話を試みる。

聞こえる？

そう呼びかけながら2人を見ると、うなづき返してくれた。

「今のが念話だ。」

最初のザワザワの強さや通信の感度は距離に左右される」

「受信側が気付ける限界は？」

「2 kmはない。」

そこまで離れば、待ち構えていて漸く気づけるぐらいの強さになる「だから、あんまり使い勝手はよくないけれど。」

この任務自体にはそこそこ適合してるし、悪くはないと思う。

伝令役もするのだし、絶対に必要になるから。

「難しいね」

「使いようによってはかなり便利じゃない?」

「実用は、教官のキステイス先生やB班のスコールぐらいだと思う。」

二人は訓練で受信をしながらいるから」

「作戦本部に連絡が出来るってことね」

俺の紹介はこれぐらいだ。

「じゃあ次は私ですね」

黒髪の女生徒が姿勢を正して自己紹介を始めた。

「私はマイア・カステル、バラムガーデン専門部所属。」

私もseed試験は初めてで、対人の実戦も初めて。

前線に立つつもりだから、フォローをお願いします」

能力評価シートに目をやると、成る程穴のない見事な数字が並んでいる。

特に戦闘技能はなかなか高いバランスで纏まっついていて信頼ができる。

「武器は剣とあるけど？」

「ええ、片手剣で突きを中心にしています」

「対複数だと？」

フェンシングなら複数は苦手なんじゃないのかね。

若干意地悪い感じだが、聞かれることも想定してるだろう。

「魔術を含めてスピードで攪乱しつつ数を削ります」

「後衛はどうするの？」

今度は茶髪の少女から。

「状態異常をバラまくことで対応したいです」

「……成る程ね」

微妙に希望的観測つついか。他のメンバーのフォロー頼りかな。

ま、普通に考えて一人で戦うわけではないので、別にいいけど。

俺こそ、人のこと言えた話じゃないし。

「特に問題はなさそうだね」

「私に移っていいかな？」

「どうぞで」

そして、本命である茶髪の癖っ毛少女である。

この子が、学園長が俺を受からせる積もりだと思つた要因。

見たことのある、初対面の美少女が、その形のいい口を開いた。

「セルフイ・テイルミット。

トラビアガーデンから試験を受けにきました。

戦闘は近接も魔術も行けませんが、ヌンチャクなので対複数は苦手です」

そう。セルフイである。なんと原作組からの参戦であつた。

「トラビアガーデンから！

優秀ですよのね」

「seed試験はバラムガーデンだけですしね」

「それにしても凄い成績ね」

シートに並ぶのはスコール並みの数字だ。

ジャンクシオン適性が97%とほぼ限界値でバラつきは2%以内。

座学も戦闘もかなりの成績をとっているようだ。

そう、彼女に限らず原作の仲間キャラは非常に優秀なのである。

ガーデン生徒の中に於いても学問も戦闘もかなりの適性をもっていた。

殆どありえないような数字が並ぶ程度には、彼らは強いのだ。

現在3つのガーデンで5000人超の生徒を抱え。

しかし、その中でSeedは僅か32名。100分の1よりも低い割合。その中でスコールの一行はトップになる実力を保持していたのだった。

「戦力は比較的控えめだけどかなりバランスのいいパーティーみたいね」

「そうだね」

市街地で掃討戦をする上で、各個撃破に向いてるっていうのは利点だよ」

比較的、というところで俺をちらりと見るのはご愛嬌。

ま、確かに俺は戦闘向きではないからね。

その代わりに、今から別のことで活躍させてもらおうとしますか。

「基本的には俺が索敵、

マイアが突入セルフイが援護と警戒といったところかな」

「了解よ」

「了解だよ」

打ち合わせは順調に終わった。

さて、原作どおりに話が進むのなら、俺もやれることがある。

準備は万端、残りは出たとこ勝負ってことで。頑張りましょう。

試験は打ち合わせ通りに進行していった。

俺による索敵は電撃作戦の武器として悪くない働きをした。

マイアの突入は練られたタイミングで行われ。

セルフィの援護はガルバディア兵士の反撃を潰した。

30分すると、ほぼ被害ゼロで担当箇所解放は終了した。

ほぼ無傷であるのは、作戦と相手を逃がすだけの余裕があったからだ。

殺生は怨恨が問題になるため、ガーデンでは対人の殺生を極力禁じている。

「これで後は安全維持だね」

「それと撤退時や緊急時の伝令ですね」

「じゃあ周囲の索敵を続けるから、狙撃への警戒よろしく」

「了解」

「任せてください」

このガルバディア軍によるドール侵攻。

それは魔女イデアによって洗脳された大統領が引き起こしたものだ。

目的は、原作知識からすると、ドール山間部にある電波塔の修理。

電波障害によって使えないと判断された電波塔だが、

ガルバディアはなんらかの方法によってそれを利用可能に出来る。

頼りない原作知識だが、それでも恐らくは外れてないだろう。

原作では、電波塔が目標と気づいたサイファーが任務を無視して突撃。

これによる命令違反を理由にサイファーはseed試験に落ちてしまう。

それが、今後のサイファーの暴走を招いてしまうわけで。

もしそれを阻害したなら、どうなるだろうか。

暴走でも任務無視でもなければ、一体どう評価されることになるのか。

一応、俺にもサイファーを気にかける余裕はなくなるわけではない。

じゃあ俺はどうするか。直接どうにかすることは出来ない。

だけど、もしかしたら少しだけ手を出せるかもしれない。

ま、せめて俺とスコールが納得いくようになればいいってね。

「シオン」

「ん、何？」

「セルフィさん」

「セルフイでいいよ」

「了解」

……気づいたらセルフイが近くにきていた。

「念話について聞いてみたいなと思って」

「いいけど警戒は？」

「さつきマイアが哨戒中にA班から敵司令部が撤退したって」

「成程」

A班は街の入り口担当だ。

「ね、話聞かせてよ。あれって君にしか使えないの？」

あれみんなが使えたら便利だと思っただけよ」

「いや、みんな使おうとしたら使えるはずだよ」

「じゃあどうして」

むう。難しい話になるから、あんまり説明したくないけど。

俺の特異体質を使った技能ではあるけど、模倣は無理じゃない。

ただ、他の人だと再現性が低いつてだけなんだけど。

誤魔化す理由もないから、とりあえず説明することにした。

「二重接続って知ってる？」

「……G・Fのジャンクションの失敗例だっけ」

お、よく知ってるな。

その通り、と俺は頷いて、言葉を選びながら説明を始める。

「そう。」

一つのジャンクションマシーンで。

一つのG・Fを同時にジャンクションしたときに起こる現象」

「記憶の混乱や意識の混濁が起こるんだよね」

さすが、話が早い。

「流石だね。」

それであってるよ」

「それと関係があるの?」

「そのものなんだよ」

チラリと彼女の顔を見ると、続けてという表情でうなづいた。

「記憶の混乱は二重接続で相手の精神まで入ってしまうから。」

相手の精神まで入らずに繋がれたら、俺と同じことが出来る」

「……適合率の問題ってこと?」

適性率が2人を合わせて100%を超えなければ?と聞いてくる。

俺はうなづきながら、さらに続けた。

「適合率は意識して下げることが出来るから」

「接続のランクを調節すればできそうだね」

「そう。」

だけどその為にはジャンクシヨンの恩恵を受けにくくなる」

「あえてする必要はないってこと？」

あえてする理由がこの程度のものならね。

なんては態々口にはしないけど、言外に潜ませながら。

「それに体験してもらったけどさ。」

一回は繋いだことがないと、実践では無理だからね。

中々実用的ではないってことで」

「なるほどね」

使うのが難しくデメリットがある。

だから使えるのが君だけなんだ、とセルフイは笑って言った。

ま、俺はデメリットを元々ハンデとして持つてるだけだけだ。

「これぐらいしないと、Seedになるのは無理そうだったからね」

「受かるといいね」

「お互いにね」

俺たちは笑った。

話が終わって十分ほどすると、俺の待っていた出来事が起こった。

スコールたちの反応が山間部へと移動を始めたのだ。

G・F反応を確認することで、俺はスコールたちの位置を確認していた。

「マイア、セルフイ！」

B班が持ち場を離れて山間部へ移動を始めた。

連絡を取ってみるが、念の為に伝令の準備をしてくれ」

「B班が？」

いいですわ、了解しました」

「了解だよ」

2人の了承を得ると、俺はスコールのシヴァに意識を合わせる。

さて、スコールが俺に気づいてくれるかどうかは運次第。

この距離だと相手次第、俺にはスコールを信じるしかなかった。

サイファーが山間部へと走り出す。

総合司令官の命令違反ではあるが、班長の命令は絶対だ。ゼル・デインには彼の命令にしたがう義務があつた。

畜生。

なんでこんなやつが班長なんだよ。

せめてスコールが班長ならもつと落ち着きがあつただらうに。

そう思つて、隣を走るスコールを見る。

その彼は、額に手を当てながら集中しているようだった。

まさか、このタイミングで体調が悪いかいわねえよな？

「どうしたんだスコール」

「シオンの通信を待つている」

「シオン……念話つてやつか！

でもあれつてあつちからしか出来ないんじゃないか？」

ああ、と頷くスコールに俺は苛立つ。

そんな都合のいい話があると思つた俺が間違いだつた。

舌打ちしたいのを我慢して、じゃあどうして、と小さく音にする。

「あいつなら」

俺の疑問にスコールはためらうかの様に一度口ごもると、

「あいつなら俺たちの異変に気づくはずだ」

「……そうかよ」

スコールの断言を受けて、俺は否定できる材料は持ってなかった。

むしろそうなるならその方がいい。確実に、事態は好転するはずだった。

出来るならば、総合司令官に今の状況を伝えてほしかった。

「——ル」

……スコール！」

「シオン！」

繋がった！思わずガッツポーズをしてしまう。

「スコール！聞こえているか？」

「ああ。大丈夫だ」

「B班が移動しているのを感知した。

何が起こったんだ？」

なんて、俺は大体知ってるんだけど。

そんなことは尾首にも出さず、俺は心配そうな声を作る。

「山間部の端にある電波塔に敵が資材を運んでいるのを確認した。

サイファーがそれを敵行動の阻害を目的に襲撃を提案した」

「止められそうか？」

「無理だろう」

判りきった返事が返ってくる。

ならば、この後は俺のシナリオ通りに動いてもらうだけである。

何とか出来るなら、なんとかしたい。これは俺の本心だ。

「判った。」

総合司令官に連絡を取る。

再度通信をする可能性があるから注意していてくれ」

「頼む」

そう言つて通信を終える。

この状況なら、俺がどうにか手を打てないこともない。

既にこれからどうするかは、ここに来る前から考え済みである！

「連絡が取れた！

B班は山間部端にある電波塔が敵目的地だと確認。

敵行動阻害の為に班長が襲撃を計画したらしい」

「敵目的地……。」

「わかったよ。それで、どうするの班長？」

「司令官に連絡を取るなら私が走りますが？」

「頼む」

セルファイと見比べて、彼女でもいいと判断。

俺は直ぐに頷いた。

「了解。行つてまいります！」

「じゃあ私は警戒を代わりにするね」

マイアは司令官の居る、上陸地点へと走りだした。

残った俺たちは、警戒を続行。

マイアの連絡とB班の無事を待つことしか出来なかった。

——そう時間が経たないうちに、変化が起こった。

探査の中にマイアが入りこみ、だんだんと近づいてきた。

こちらからも近寄つて、走りこんできた彼女の報告を聞く。

「伝令よ！」

「何があつたんだ？」

俺もここで何が起こるのか、細かく知つてる訳じゃない。

スコールがどうしたかは知っていても、それ以外は知らないのだ。昔にプレイしたつきりだから、覚えてすら居ない。

そんな俺に、マイアは息継ぎしながら報告をする。

「ドール政府がガルバディアとの交渉に成功し、依頼が終了。

それにより seed と交戦するガルバディア軍本隊が撤退を開始。

以上、任務は終了し、1900に撤退開始を司令官が発令しました！」

「この班に何か任務は？」

「seed本隊とB班にこれを伝達することです。

A班は撤退完了・C班はA班が伝えに行きました」

ん。

元のシナリオ通り、セルファイがB班に合流することは変化なし。

後は俺がここにいることだけで、さてどうするものか。

「了解。

マイアはこのまま seed 本隊に伝令を。

俺とセルファイはB班に伝令をする」

「了解、まいります！」

再度マイアが走りだす。セルファイは俺を見ると。

「どうするの?」

「ここからじゃ通信が届かない。」

もう少し近づいて試し、駄目ならセルフイにお願いする」

「私に?」

「俺だと移動が間に合わない」

言つて走り出す。

それを後発ながらもあつという間に並んだセルフイは。

「確かに遅いね」

と悪気なさそうに笑いながら言った。

第25期seed試験合格者発表

A班

ニーダ・ウエイン

B班

サイファー・アルマシー

スコール・レオンハート
ゼル・デイン

C班

該当者なし

D班

シオン・グレイル
セルフィ・テイルミット

以上6名をseedと認定する。

司令官による撤退命令の発令が行われたのちに。

命令どおりに、それぞれの班で伝令と撤退が行われた。

暴走した敵機動兵器に追われながら、ではあるが。

上陸地点と街の入り口付近の担当であったA班は最初に撤退完了。

その後班長ニーダによるC班への伝令が実行された。その彼は無事合格。

判断の冷静さと総合的な能力、粗のない任務態度を評価された。

その他構成員二人。因みに雷神と風神である。

緊張感を失いガルバディア軍の奇襲を受け、戦場にて戦闘不能。

合格基準を満たしていないと判断され不合格となった。

ニーダの伝令を受けた市街地中央部担当のC班。

撤退時に敵機動兵器との戦闘を回避するために民家に逃走。

その民家は戦闘被害を受け、半壊している。

最重要とされる撤退行動中に民間人に被害を出したこと。

戦力的に撃破が容易であったのに、逃走するなどの行動に疑問。

seedの行動基準を大幅に外れた行動に、班全員が不合格とされた。D班マイア・カステルはガルバディア軍と交戦中のseed本隊に伝令。本隊の指示に従い撤退を行うが、機動兵器に開いていたバーに避難。撤退直前までそこに居たのをC班と同様に評価され、不合格となった。

そしてB班とD班である。

電波塔において敵行動の妨害をしていたB班に。

俺は山間部に入る直前で通信に成功した。

ギリギリ、距離がそこで足りていたらしいのは幸運だった。

「スコール！」

「シオンか」

「聞こえているんだな?!」

「大丈夫だ」

年齢と違って落ち着いた声が、俺の心をほっとさせる。

実際の年齢では、間違いなく俺の方が年上なのだけでも。

そういうのではなく、彼の声は、人を安心させる力がある。

「良かった。」

伝令だ。ガルバディア軍との交戦を中止し撤退行動に移れ。

司令官が撤退命令を出した。1900に撤退を行う。

繰り返す、1900までに撤退せよ」

「了解した。1900までに撤退する」

「撤退に援護は必要か？」

勿論、俺は状況を知っていて聞いている。

「現在敵機動兵器に襲われている。

援護を頼めるならお願いしたい」

「了解。

D班よりセルフイ・テイルミットを派遣する」

「助かる」

これは、原作通りの話にもっていくために。

セルフイには、スクールとゼルと仲良くしてもらわないと。

「通信を切るが構わないか？」

「ああ」

「そうか。無事を祈る」

「感謝する」

走りながら、通信をしていた俺の肩が軽く叩かれる。

隣を走るセルフィが指示を、と強い視線で訴えてきた。

「B班に撤退命令を伝達した。」

B班は現在電波塔で敵機動兵器と交戦中。

撤退を行うが、援護が欲しいとのことだ。

お願いできるか？」

「了解。」

場所はこの先に向かえばいいんだよね？」

記憶の中ではここから先は一本道。

それに、電波塔はここからも見えていた。

「ああ。ここからは一本道だ。」

交戦中というし、迷うこともすれ違うこともないだろう」

「判った。いつてくるよ

班長は？」

「このまま撤退する。」

スコールたちを頼む」

「任せて」

橋を渡って電波塔へ。

速度を上げて向かうセルフィを見送ると、俺は反転。

市街地を通りぬけて、上陸地点へと走った。

市街地の掃討は完了しているし、撤退も始まっている。

なので、これ以上襲われる可能性も低いだろう。

一人でも大丈夫だと思える程に静かな市街地をただ駆け抜けた。

かくして、俺は撤退完了。

B班は機動兵器に苦戦していたが、セルフィの援護を受けて撤退に成功。サイファー、ゼル、スコール、セルフィの4人は無事に撤退完了した。

彼らが引き連れてきた機動兵器は半壊になりながらも追跡、

その後浜に来た所で、高速艇に搭載されていた重火器によって殲滅。

ギリギリになってマイアも無事に、撤退完了した。

セルフィと俺は無事に合格。

市街地の掃討戦及び、その後の伝令が非常に高い評価を受け合格。

特にセルフィは今回で一番高い評価を受けていた。

そしてB班である。

掃討戦は無駄のない戦闘が行われ、それは最高の評価を受けた。

問題となったのは司令官の命令を無視して電波塔に襲撃を行ったこと。

その襲撃によってガルバディア政府との交渉が加速。

任務終了へ貢献したという一面もあり、結果的には良好である。

その上で考慮されたのが俺による通信である。

事後とはいえ、司令官の判断を確認したD班の仲介。

これを、どう判断するかによって評価が変わるといふ展開になった。

俺の通信したのが班長サイファアの判断かそうでなかったか、である。

俺は当然通信が偶然ではないこと。

サイファアの指示によりスコールが受信体勢に入っていたことを主張した。

これは勿論、真つ赤な嘘ではあるのだけれど、ばれようがない。

何故ならば、俺の意図をスコールは受け入れるだろうし。

サイファア自身が否定しても、サイファアの言うことに信憑性は薄い。

ガーデン上層部も反抗期だと受け止めて、俺の主張を真実だと扱った。

それによってB班の問題はただ一点に集中される。

「司令官の判断より先に行動したこと」だけが、問題視された。

これに関しては、現場指揮官であるサイファアの判断が優先。それはそこまで問題ではなく、seed試験の合否を決めるライン上。ギリギリではあるが、十分に合格の領域にあった。

よってB班は3名とも合格。

班長サイファア・アルマシーの問題行動も不問とされた。

代わりに3か月分戦闘行動や戦闘指揮などの講義を受けなおしが決定。その間はseedではなく学生として扱われることになった。

その夜。

seed認定。パーティーが大広間で行われることになった。

認定。パーティーといえども、実際にはそんなに大したものではない。

最初に短い認定式が行われたら、後は挨拶回りと社交ダンスをする程度。主賓であることには間違いがないが、特別な何かがあるわけではない。

特に俺みたいに地味な学生で有ったりすると、

俺と同じようにちよつとした御馳走と友達の祝福で終わるわけで。

挨拶回りは始まった直後に回ってきた。

社交ダンスに誘うようなそんな関係の知り合いはいない。

そうなるもそれこそ食べることしかやることはなくなってしまう。

スコールは余りパーティーに興味なさそうに壁で背を向け。

ワインを片手にしかめつ面をしていた。どうやら苦いらしい。

一緒に居ようと誘ったが「人ごみは苦手だ」と言われたので諦めた。

それに彼にはここで出会うはずの人がいる。

その時だけ俺が離れているというのも至難の業であるかもしれない。

スコールが楽しめていないのは、ちよつと残念な気がするけれども。

曲が変わった。

eyes on meの三拍子アレンジが流れ始めた。

ダンスホールに目をやると、そこには一組のカップルが目立ちまくっていた。

まあ上手くいったのならいや、と親友の晴れ舞台から目を逸らす。

そういうえば、この曲だから彼女はスコールを誘ったのかな？

そんなことを、ローストビーフをとりわけながら俺は思った。

お母さんの歌だしね。

もしかしたら異性の好みもお母さんに似てるのかな。

これから色々あるけど、2人には幸せになつてほしいな。

俺はこれからの、長い長い戦いのことを思い、夜空に目をやる。
「あ、流れ星」

seed 試験、認定パーティがあつた次の日の朝。

俺は任務に就くようにと、早朝から呼び出しが掛つた。

それも制服ではなく、私服で来るようにとの指示である。

制服ではないということは、潜入任務か、それとも。

さてはてと思ひながらも、動きやすい服に着替えていく。

それこそ、この世界に来る前に着ていたような服である。

元より、潜入任務の類は割りと得意なつもりである。

何せ、他の人に比べると、全然目立たない類の見た目であるのだ。

人並みの顔に人並みの背丈。嘘言つた、若干低い背丈だ。

この世界は、全体的に男性の身長が高いというか。

日本の平均よりも多分、数センチは平均が高いのではないか。

数センチで済めばいいぐらいにでかいサイファーとかいるし。

なんだよもう、とよく判らない恨みを抱きながら私服に着替え。

バトルロッドとブレスレットを付けて集合場所の学園前に向かう。すると、そこにはスクールとゼル、セルフィの3人がいた。

もしやと思って聞いてみると、任務があつて呼び出されたらしい。ということは、俺はこのまま本編の流れに入っていくのだろうか。ありえないとは思つてなかったが、実際そうなると驚きもする。

森のフクロウの依頼は、それ程高額で引き受けてないはず。

安い依頼料の任務で、新人3人だけだろうと思つていたのだが。

どうやらそうでもないらしいのは、この面子を見れば判る。

俺の予定は、ガーデンで出来ることをしていくだった。

まあ、予定とは違つても、付いていけるのならそれも悪くない。

出来ることは、きつとそれなりに沢山あると踏んでいる。

依頼人の暴走の抑止や逃走経路の確保。

付いていくことによって、被害を減らせる可能性がある。

特にミサイルの発射を防止できる可能性があることは大きい。

ただ、微妙に納得がいかないのは、学園長である。

学園長が俺をこのメンバーに入れるのは、少し考えにくい。

このメンバーはアイデアの家の子どもたちを集めたパーティなのだ。

俺を含めることに何の意味があるのか、疑問である。

まさか何か役割があるのだろうか、なんて考えにも行き着き。

そんな風にただ考えていると、いつの間にか学園長が来ていた。

そして、学園長からの任務の説明が行われた。

ティンバーに行き、ある組織のサポートをすること。

組織構成員に連絡を取り、それ以降は組織の指示に従うこと。

スコールが班長を務め、残りはそのサポートをすること。

「あの……それだけですか？」

「それだけ、とは？」

静かに聞いていた俺から出た質問に、首を傾げて答える学園長。

これでわざとじやなかったら凄いやれなんだけれども。

しかし、取りあえず依頼の詳細は確認しておきたい所だ。

もし、俺が思っているのと違えば、余りにも肩透かしである。

ある意味、その方が世界は平和なままなのかもしれないけども。

とにかく、俺は聞きたいことをそのまま口にして問いかける。

「任務期間や依頼者の詳細、任務内容は？」

「依頼者に直接聞いてください」

は？冗談でしょ。俺は耳を疑った。

「なぜですか？」

「私が言う必要がありますか？」

「あります」

学園長は何一つ表情を変えずに視線だけこちらに向けてくる。

「任務期間、内容が判らなければ適切な装備が用意できません」

「ティンバーに行つてからでいいでしょう」

「ティンバーはガルバディアの占領下にあります」

「裏市場との交渉は学んでいるはずですが？」

「なんだこの人。」

態とやつてるんだよね？流石に本気の訳はないだろうし。

だとしても、意図が全く掴めない。何が目的なんだろうか。

「わざわざ裏で交渉せずにすむならその方がいいはずですよ」

「占領下に火器を持ちこむのは無理ですよ」

むっ。確かにそれはそうなんだけども。

潜入任務なら潜入任務とはつきりいつて欲しいだけなんだが。

思わず、食い下がる。絶対に何か意図があるはずである。

「それは依頼者によつては、協力を受けてなら出来ます」

「依頼者の手を煩わせるのですか？」

「任務内容によつては当然の帰結では？」

「依頼者はSeedを望んでいます。兵士を望んでいません」

この場合のSeedは、万能の先鋭集団、という意味、だよねえ。

わざわざ兵士を望んでないって言うことは。

色々考えて、自分たちで行動してきてくださいってこと？

……ちやうか。ちやうな。

これそこまで意味ないわ。ただ“次”のは失敗してもいいだけで。

むしろ、失敗した方が展開としては都合がいいってだけだ。

これが、森のフクロウの依頼だとしたら目標は大統領の暗殺。

でも大統領自体は操られてるだけで、それ程価値はない。

本命は、カーウエイ大佐が依頼した魔女アイデア討伐なんだから。

大統領の暗殺に成功したら、魔女は別のターゲットを見つける。

その中でも、カーウエイ大佐は名前が上がつてくる人だろう。

軍部の実力者で、そこそこ以上に人望を集めている人なのだ。

失敗させることが前提ならば。当然俺たちは逃げ出す訳である。

そこで伝令を出して、新たな任務を与えてつとところか。

現在の時点では情報を与えたくはないと判断した方がいいのかな。

「seedは工作員ではありません」

「出来るように訓練を受けてきたのでは？」

「万全を期すように訓練してきたのでは？」

やっぱり、何があっても喋る気がないようにだ。

俺としては、表面上だけの言い合いではあるのだが。

ゼルとセルファイがそわそわしているのがちよつと申し訳なくなる。

「あの、シオン？」

「学園長もおっしゃってくれてもいいじゃないですか」

と思った矢先に。

セルファイとゼルが耐えきれなくなったのか口を挟んできた。

二人に言われたからか、学園長は微妙な顔をして口を開いた。

「……いいでしょう。」

依頼者はティンバー解放組織『森のフクロウ』。

依頼はティンバーの解放。期間は解放されるまで」

「長すぎます」

「ある程度の判断を許可します」

やっぱりその任務か。

つてことは、失敗前提つてことで進めた方がいいんだよなあ。

あんまり、そういうの得意ではないんだけども。

「任務の打ち切り等はこつちで判断しても？」

「それには答えかねますが、依頼者が居なくなれば依頼は終了しますね」

「……成程」

思っていた以上にやっかいな人であるというか。

いざとなつたら依頼者の放置は別に構わないということか。

ま、流石にそういうつもりは一切ないが。酷すぎるし。

依頼者はヒロインこと、リノア・ハーティリー。

ガルバディア軍大佐。フューリー・カーウェイの一人娘である。

ガルバディアは現在開発独裁をつづけており。

大統領ビンザー・デリングによる軍事政治が行われている。

その中でカーウェイ大佐は軍の最高の権力を握った人物である。

大事のためには、というつもりもないだろうけども。

学園長の中ではリノアのこととはそれ程重要ではないのだろう。

精々、途中で逃げさせればいいぐらいにしか思っていないのでは。

ところがどっこい、彼女はバリバリのヒロインなのである。

最後まで、リノア・ハーティリーは戦い続けるわけで。

途中で投げ出すだろうという学園長の想定は間違いないんだけども。

それを今の俺が知っているのは、まあ、おかしいわけで。

「もういいでしょう。」

あまり遅くなつては依頼者に迷惑が掛ります」

「そう、ですね」

「スクール、指揮をお願いします」

「判りました。学園長」

頷いたスクールに、学園長は両手で握手をしながら言った。

「あなたが無事に戻ってくることを期待していますよ」

学園長は内心を全く感じさせない微笑みで、俺たちを見送った。

初任務を受けてから、シオンがイライラしている。

俺の勘違いかと思っていたが、実はそうでなかったらしい。

どうやら、ゼルとセルフィも同様の感想を抱いていたのだ。

「あのシオンが学園長や女の子に嘯みついてるんだぜ？」

「私もそこまで彼のこと知っているわけではないけどさ。」

「なんか焦ってるよね？」

ゼルとセルフィもシオンの行動には違和感を抱いていたらしい。

確かに疑問な点や不可解な点、納得のいかない場所は幾つもあった。

だが作戦としては一応実行可能。危険度も高いものではなかった。

「スコール、一回話聞いてきてみてよ」

セルフィが俺が聞き耳を立てていたことに気づいていたらしい。

話の延長線で俺にそんなことを言ってきた。

「……どうして俺なんだ」

「シオンと一番仲いいだろ」

「そうそう。」

お互いに信頼してるっていうか、そんな感じあるし」

一番仲の良い、信頼している、か。

確かに俺にとっては、唯一といっていいほど関係性がある相手だ。

面倒臭くない距離を自分から保ち、言いたいことを理解してくれる。

複雑だと、投げやりになってしまいう俺にとっては、ほぼ唯一の。

友達と比べていいのかは判らないが、そういう存在、だと思う。

シオンが焦っているということは、理由があるのだろう。

複雑で面倒なことだが、シオンに思うことがあるなら聞いておきたい。

初任務の緊張だけだとしても、その解消ぐらいはしてもいいだろう。

「——行ってくる」

「おう」

「期待して待ってるよ」

俺の背に、2人はそんな言葉を投げかけてきた。

バラムガーデンを出発した俺たちは、大陸横断鉄道に乗った。大体17時間程の行程になるだろうか、決して短くない時間だ。丸一日仕事なものだから、俺たちは仮眠をとる必要があった。とはいっても、スコールたちは仮眠を取るまでもなく。

ソファに座ってすぐにスコールたちは意識を失った。

エルオーネによって、過去のラグナたちに接続させられたのだ。念の為、彼らの手元のジャンクションマシーンを見る。

G・Fとの適合率が100%と、ありえない数字となっていた。やはり、彼らの意識は身体にないということが窺えた。

だからといって何をするでもない。危険ではないのだ。時間さえ経ってしまえばこの身体に戻ってくる。

俺は3人の身体をベッドに横たえようと、俺も寝ることにした。

俺が目覚ましてから1時間ほどして、3人も目覚めてきた。

「何が起こったか、判るか？」

「ん」

異常事態だ、とは三人も思っただらしく。

事情を聞いてきた彼らに、ジャンクションの異常を伝える。

すると、G・Fの専門家としての俺に質問をしてきた。

「100%つてあり得ないのか？」

「普通はないんじゃないかな……」

普通は、ない。ジャンクシヨンの仕組みからして、そうだ。

ジャンクシヨンは、G・Fを頭の、記憶容量にセツトすること。

その上で、個々人との魔力パターンとの適合を行う。

まず、記憶容量自体が綺麗に開いているという前提がある。

それは、まあ殆どの人が記憶の消失でクリアすることが出来る。

しかしその後の魔力パターンとの適合は、かなりの難事だ。

G・Fっていうのは、詰まるところ精霊とかその類である。

そういうのと魔力パターンを適合させるといふことは。

強いて言えば、どこまでそれに身を任せられるかといふこと。

人間としてアイデンティティが確立されているほど、出来ない。

或いは、幼少期からそういうものに慣れ親しんでいるか。

アイデアの家の子どもたちは、慣れ親しんでいるつてことだろうけど。

それにしても100%は異常な出来事である。

人間である以上は、身を任すにしても限界があるものである。

それこそ、自分自身が魔女の適性でもなければきつと無理な話だ。

「じゃあ、さっきの私たちには魔女の適正があったの？」

「まあ、なくもないだろうけど。」

でも実際には無理だと思うけどね」

「だよねえ」

実際には、他の誰かにジャンクションされて。

自分の意識が完全になかったというのが事実なんだけども。

そこらへんは今の俺が知っていていい話ではないしね。

取りあえず、ガーデンに戻った際には身体検査。

そういう方針で、現状身体に大きな変化がないことを確認し。

スコールたちは一旦納得してくれたようであった。

ティンバーについて、森のフクロウと連絡が取る。

森のフクロウ自体は、昔からある組織だけあって有名だ。

昔には、ガルバディア軍によって排斥作戦もあったほどである。

しかし、現在の主要メンバー、というか。

メンバーは現在三人だけ。そういう組織の実情なわけである。

そのことに、スコールたち3人は言葉を失ったようだった。

俺は知っていたから特に何も反応しなかったが。

最高に杜撰な作戦と組織にちよつとだけ文句をつけることにした。

彼らの作戦は非常に大胆なものである。

大統領の誘拐をするのに、大統領の乗る列車を走行中にすり替える。

そのままアジト列車に接続し、誘拐するというものだ。

先頭車両と前後の護衛車両、そして大統領の車両。

4つで構成された列車を、切り替えポイントを使いながら切り離し。

ダミーの大統領車両と、本物を入れ替え誘拐をする。

正直作戦自体にちよつと無理がある気がするが。

それはともかく実行上の問題点に文句をつける。

伝えたことは主に3つ。

簡単に情報を得れたということはダミー情報の可能性があること。

任務中に気づかれた場合の撤退手段が確保されていないということ。

まあ、ここまでなら失敗前提で動くのだし構わないのだが。

むしろ、もし大統領の誘拐に成功した場合が問題である。

テインバーの独立を認めさせても実行させない恐れがある。

いつまで誘拐したままでいるのか、という問題もある。

誘拐し、どうやってティンバー独立を認めさせるのか。

命でも、拷問でもするか？しかしその命令をどうやって出させる。

誘拐した大統領に要求だけでも、ティンバー独立には繋がらない。

恐らくは偽者の大統領だから、考えなくてもいいのだが。

もしも本体だった場合の方が問題になってくるわけである。

纏めると危険だらけということ淡淡々と挙げてみる。

これで聞き入られなくても聞き入れてもどっちでもいいのだが。

強いて言うなら、俺の役割的な分析業務を行ったわけである。

まあ、多分聞き入られはしないだろうとは思っていたが。

結局、作戦はリノア・ハーティリーにSeedなんだから！と強硬された。

判っていてもイラツとするが、依頼者に当たる程のことでもない。

取りあえず、失敗するだろうけど、初任務スタートである。

その、大統領誘拐作戦実行まで1時間。

スコールたちとの事前打ち合わせは終了していた。

今回の任務は潜入任務であるが、移動が激しいため念話は使えない。

動きも電車の音も大きいだろうからね。使える要素が少ない。

更に、走行中の列車に進入である。

非常に身体能力が必要とされることになる訳で。

必然的に、俺は失敗した際の逃走経路を確保する役割についた。その逃走経路に関しても、俺は楽をさせてもらった。

流石にテインバー内の情報は森のフクロウが詳しいのである。

地図と警備情報で、比較的安全な経路を見つかる程度であった。だが、落ち着かない。

森のフクロウのアジトの中で、俺は少しだけイライラしていた。

何せ、失敗すると判っている任務に3人を送り込むのだ。

この任務は恐らく、失敗する運命にある。

どれだけ完璧な行動をしても、原作通り大統領が影武者であれば。

その時点で、作戦を始めただけで失敗である。

失敗すると判っている任務に仲間を向かわせること。

任務に自分が直接参加することなく、安全地帯に居ること。

そのどちらも俺の苛立ちを加速させる。ムカムカである。

一応、この作戦について嫌疑はかけたけども。

どっちにしても俺も割りと乗り気であるので何とも言いがたい。

原作通りに進めることも、知識を活かす上では必要なのだ。

今後のことを考えたらこの作戦を行わないのもマイナスである。決行されることも強ち悪いこととは言いつれない。

ただ、俺は軍人には向いていないのだなど再確認する思いである。

「シオン」

突然の呼び声に振り向くと、無表情のスコールがそこにいた。いや、元々表情は薄い方だから、特に何ともないんだけど。

しかし、彼が声を掛けてきたからには何かあったのだろうか。

「スコールか。」

何かあったの？」

「いや」

問いかけると、目を逸らして口ごもる。

……作戦に関する事務的トークではないのだろうか。

他事を考えるとは、スコールにしては珍しいことである。

「何か、心配事？」

「……ああ」

スコールが俺に相談とは珍しい。

いつもなら、面倒だ、で押し切ってしまうというのに。

任務前だからであろうか。スコールも緊張しているのかな。

「言つてよ。」

俺に出来ることならするつもりだけど？」

少し気分を持ちなおし、スコールの悩みを聞くことにした。

「お前が」

「……俺？」

「お前が。」

何か焦っているみたいだから」

予想していなかった方向から来た。

いや、まさか。あのスコールが俺のことを心配である。

心配に思うだけならともかく、態々口にだしてまで、だ。

「俺が、焦っている？」

「ああ

……違うのか？」

ん。違うのかと聞かれたら。

「こや。」

「違わないこともないけど」

「任務に関してか」

「まあ、そうだね」

大まかに言えば、それであっている。

失敗をするのを判っていて、3人を送り込むことに、とか。

それに納得しきれない俺に苛立ちを隠せないだとか。

「後方支援のことなら気にしない方がいい。

元々seedはスリーマンセルだ。

戦力的にも十分以上の構成だ」

「……うん」

「それとも作戦に関して何かあるのか？」

スコールにしては、本当に鋭い。

いや、スコールは元々頭はいいのだ。それは判っている。

ただ人を思い図ることや、説明には慣れていないだけで。

これはある程度正直に喋るべきだろう。

「——この任務は失敗する可能性が高いと思っっている」

「前提条件か？」

「ダミー情報だろうね、ってことなんだけど。」

「ああ」

「確信が？」

「いや、ない。」

「だけど」

言葉を切って、少しだけ意思を固める。

俺が言っている言葉に信憑性を増す為に、少しだけ嘘をつこう。

俺が知っていないはずのことを知っているという嘘を。

『森のフクロウ』は意外と有名だ。

内部の実力はともかく、組織網に関してはティンバーで随一と聞く。

「それと」

「それと？」

「ガルバディア政府幹部の娘が居ると聞いている」

「……リノアか？」

うん、と俺はわざとらしく頷いて見せた。

目を見開くスコールは、半信半疑といったところだろうか。

「可能性は高い。」

一般人が seed 認定パーティに入れるはずがないだろう」
「そう、だな」

まあ学生の振りして紛れ込むとかなら、俺はやるけど。

「彼女が敵という確率は相当低いだろうが、

彼女の存在がガルバディアに知られていないはずがない」

「偽情報ということか」

「絶対ではないけど」

スコールは腕を組んで考え始めた。

一応、この時点で推測できてもおかしくない情報を出し切ったはずだ。

俺が苛立っている理由づけとしては十分だろう。

「そうだな、確かにありうる話だ。」

失敗の可能性が高いという前提で動くことにする」

「リノアさんには気づかれないうちにね。」

彼女の立場で失敗したということも気づかれるわけにはいかない」

そこらへんの気遣いも、忘れないように。

特にスコールには、リノア・ハーティリーの王子様のままで。

「了解した。」

作戦失敗の責任は敵の策略にあるということだな」

「それで頼むよ」

スコールはうなづく、車室に帰ろうとした。

その小さくて大きな背中に、俺は感謝の言葉を投げかける。

「ありがとう、スコール。」

お陰で楽になった」

「……班員の精神安定も、班長の仕事だ」

「うん。ありがとう」

照れ隠しが上手いのか下手なのか。

慣れてしまうと簡単に本心が読み取れるのも、なんだか微笑ましい。

スコールはこちらを振り返ることなく去ってしまった。

はあ。実際ダメー情報なら、難易度も危険度も高いものではない。

行つて帰つてくるだけならば、あの3人ならば簡単な話だろう。

心配することでもなかったかなと、作戦後のことに集中することにした。

俺とスコールの予定通り、大統領誘拐作戦は失敗した。

護衛も護衛車両も大した数は居なかったらしく。

スコールたちは、あっさりとアジトまで逃げ帰ってきた。

街の常駐部隊も、俺たちを追撃する余裕はないらしい。

偽者を襲撃されたぐらいでは、追撃もしないということか。

それとも、本隊の受け入れに必死になっているかは微妙だが。

「危険すぎます」

「どうして?!」

そして今。

森のフクロウ幹部ワッツが手に入れてきた新情報。

放送局に大統領が居るとのことに、即興で立てられた誘拐作戦。

それを俺は即座に否定、却下、とにかく実行に移さないと伝えた。

どうしてって聞かれると、それは原作知識なだけだ。

この誘拐作戦 part 2 で、ガーデンが大統領に目の敵にされる訳で。

まあそうでなくても、魔女イデアがガーデンを狙うだろうけど。

とにかく、この作戦が元でミサイル発射に繋がるのである。

確かゼルの迂闊な発言が元で、ガーデンの一味とバレるのだったか。

とはいえ、原作知識という言葉は理由にはならないわけであり。

どちらにしても、この短期間で二回目の誘拐作戦はない。

それをこちらのリノアさんに説明しないといけないのだけでも。

果たして納得してもらえるものかどうか。俺の技量次第かね。

「理由はいくつかありますが……。」

先ほどとは違つて今回は多くの護衛がついているのでしよう?」

「間違いないです」

んー。やっぱりそうなるよね。

「そこから、こつちこそ本物の可能性は高くなります。」

しかし作戦としてはその中に突入し、人質に取るしかない」

ティンバー独立の方法として、誘拐つてのはともかくとして。

人質として運用しようと思うと、結構難しいものである。

そも、トップを人質に取るとかはあんまり有効だとは思えない。

いくらSeedと言えど、何の準備もなしに突撃は出来ない。

それも人一人を連れて帰つてきて、その後の展望もないというのに。

そう言つた俺に、リノア・ハーティリーは悔しそうにする。

「……でもー」

なんとかなるかも知れないじゃない!」

「なんとかなるかも知れないで班員を危険に晒せません。」

事前に判っている決死の任務に送り込むわけにはいきません」

これって普通に考えて、決死の任務だからね。

流石にそれをそのまま了承するのは、俺としてはありえない。

スコールだったら、なんだかんだで引き受けてしまうのだろうけど。

「でも seed なんです!?!」

最高の傭兵 seed はどんな任務でも成功するんですよ?!」

「どんな任務でも成功しますよ。」

適切な準備と作戦をういますから。今回はそれが出来ていません」

「……seed の癖に臆病なのね」

「もちろんです。」

俺は仲間たちが死ぬなんて了承できませんからね」

臆病と煽られても、それがどうしたって話である。

俺の役目は元々そういうものだし、むしろ褒め言葉であるだろう。

というか、それ以外にもまだ理由はあるしね。

「仮に誘拐が成功したとして。」

それは恐らくティンバーの解放には繋がりませんか?」

「どういふことよ」

答えはシンプル。意味がないからである。

「ティンバーの独立。言うだけなら短いですよね。」

でも条件が結構厳しいのは、想像が付くことだと思います」

最低でも、ガルバディアの常駐軍のお引き取りは必須。

経済的な独立、自治機能と自衛機能の復活。さてそれはどうする。

軍の撤退だけなら大統領の命令一つでなんとかなるだろうが。

「誘拐に成功したところで、軍の一時撤退をさせることが限度。」

恐らく次は更なる戦力で侵略してきますね」

「じゃあ、誘拐じゃなくて殺してしまえば」

「それこそまさかです。」

軍の報復でティンバーが地図から消えるかもしれませんね」

作戦が失敗しても同じことである。

実行犯を探すためにティンバー全体を鎮圧するだけに終わるだろう。

これは、原作を考えなくても直ぐに想像できることである。

「……どうしようも、ないの?」

「残念ですが実行は不可能でしょうね」

リノア・ハーティリーがこれ以上なく不服そうにしている。

だからといって危険な任務はスコールたちにさせるわけには行かない。

そう強く意思をこめて見つめると、リノアさんは目を逸らした。

「なんか、私、勘違いしてた」

「え？」

「seedが来てくれたら、何もかもうまく行くと思ってた。

でもそんなに簡単じゃないよね」

リノアさんの絞り出したような声。

リノアさんはそこまで言うのと、後ろへと振り向いた。

「みんなは雇われただけだもんね。

仲間ってわけにはいかないよね」

「リノア……」

「えっと、作戦は中止します。

一度解散しましょう。いいよね、ソーン？」

わざとらしく明るい声

「………いこのかよっ」

「うん。」

仕方ないじゃない。

確かに、無理を言っているのは私たちなんだもん」

「リノア」

「ごめん、私、ちょっと休む」

スコールに掛けられた声に、返事もしないまま。

そう言っただけで振り返らないまま、彼女は専用の客室に向かった。残されたのはseedと森のフクロウの2人の計6人。

残された室内は、どうしようもない空気が漂っていた。

それをつくり出したのは、俺なんだけど、なんともまあ。

悪いことしたなあというの、思うんだけどね。

ため息をついたら、思っていた以上に部屋に響いた。

集中する視線。少し気恥ずかしい思いをしながら、首を振る。

その視線の中から、俺を見るスコールに呼びかけた。

「スコール」

「代案があるのか」

ま、そりゃあんだだけ色々言ったからにはね。

明確な代案って訳じゃないけど、次やることは明確である。

やれることとやれないことはつきりさせとこうつてことで。

「ないけど、偵察ぐらいなら出来るでしょ」

「敵の総数と目標でいいか」

それぐらいしか、今の俺たちにはやれないもんねえ。

それ以上調べるとなると、もつと時間が掛かってしまう訳で。

まあ、その総数もたいしたことはないとおもうんだけどさ。

だって、この後、実際にサイファーが単独で進入できるのだ。

その混乱の最中を突いてとはいえ、スコールたちも着いていける。

ならば、その護衛の質も量も、大したことはないと思われる。

「他に出来るならお願いするけど」

「いや、無理だな」

「でしよ」

とはいえ、これは想像にしか過ぎないからね。

実際に確かめてもらわないと、実際の数はわかりようがない。

「ちよつと待て！」

作戦はしないんじゃないのかよ！」

スコールに偵察を依頼する中。

森のフクロウのリーダーであるソーンさんが割り込んできた。

「ああ、作戦はしない、情報が足りないからな。」

「だが情報を集めれば何とかなるかもしれないだろう」

「ならそういえば良かったじゃないか！」

「勘違いしたのは彼女だろう」

「スコール」

今にも口論を始めそうな二人をおしとどめる。

この段階でリノアさんにSeedの限界を理解してもらい。

スコールに悪印象を抱かせないために、俺が代理でやったけど。

流石にこれ以上の口論を引き起こすつもりはない。今のところは。

「放送がいつから始まるか判らない。」

割り込めそうならいいけど、基本は偵察だけで戻ってきてね」

「ああ」

「それと、森のフクロウの誰かに案内を頼みたいのですが」

と、ソーンさんではなく、もう一人の森のフクロウに目を向ける。

割り込めるなら、本当に割り込んでも別に構わないのだ。

その方が、今後の予定も立てやすくなるわけではあるので。

というか、サイファーが乱入するのなら乱入しないわけに行かない。

サイファーとキステイスが来るのなら、キステイスは助けないと。

そのためには、少なくとも放送局の近くに待機だけはしてもらいたい。

「それなら俺が行くっす」

「ワッツさん、よろしくお願いします」

促したとおりに、ワッツさんが引き受けてくれる。

流石に、この状況でソーンさんに任せることは出来ないし。

あれだけ好き勝手言つといて、人に任せるとか無理である。

「でも、だからってあんな言い方は……」

部屋の片隅でソーンさんが唸っている。

罪悪感に残るけど、命をかける実行班の身を守るのは俺の仕事だ。

そこだけは譲るわけにはいかない。それが俺の線引きである。

リノア専用特別乗客室への扉は、ただ静かにしまっていた。

原作では、少し流れが違った。

seedへの期待を裏切られるのは、誘拐作戦の直前であった。

大量の護衛に怖気づいたリノアが作戦変更を提案、スコールと口論。

それで作戦を中止、解散を宣言している時に、放送は始まった。

そこに現れるのが、ガーデンを脱走したサイファーだ。

リノアが依頼したと聞いて、乱入。大統領を人質に取ろうとする。

それは成功し、大統領にガンブレードを突きつけるまで至る。

サイファアを追いかけてきたキステイスが更に乱入。

それと、放送を見たスコールたちが詰めかける。

その中でゼルがガーデンと口走り、ガーデンの一味だと知れてしまう。

混乱した場に魔女イデアが現れて、大統領とサイファアを連れ姿を消す。

その後、サイファアは、魔女の騎士という言葉に憧れて。

そのまま魔女イデアの騎士として、俺たちと敵対をすることになる。

それが本編のシナリオだ。

だが、この現実にはそれがそのまま上手く行くとは限らない。

サイファアは謹慎中ではあるが *seed* になり、来るかどうかは判らない。

少なくとも、原作よりもサイファアとは良好な関係であるはずだ。

更に、サイファアが乱入したとしても、キステイスが来るとは限らない。

もしかしたら、本編よりも冷静に場を収めるかもしれない。

ゼルが余計なことを口走らないかも知れないし、未来はわからないのだ。

だからこそその偵察だ。

彼らが来るというのなら、キステイスを助ける必要がある。

サイファアは、ここで助けるのは無理というものだろう。

彼にとって、魔女の騎士というのは夢そのものであるはずだ。

だから、どこまで何を引き換えにするかは、俺には判らない。原作ではガーデンを引き換えに、その夢を叶えようとしたが。

中途半端に交友関係がある以上、もしかしたらこつちを優先するかも。そういう風に思ってしまうぐらいには、仲良くしてきた積もりだ。

彼だつて、スコールと同じく頼れる人が居ない子どもだったのだから。どちらにせよ、来るか来ないかはまだこの段階では判らない。

来ないのなら無理に乱入するのではなく。

ただ放送を見て、危険だとスコールたちに判断してもらえばいい。

その後は、状況の変化により任務は一時停止。

ガルバディアガーデンに移動という流れを提案すること。

そうすれば、俺の知っている流れと大きく変わらないでも済むはずだ。

俺にとって怖いのは、必要以上に流れを変えてしまうこと。

シナリオには、大きな変化を生み出す必要は、ないのである。

この世界は俺が居なくてもHAPPY ENDに終わる世界なのだから。

リノア・ハーティリーの逃走

目が覚めたら外がなんだか騒がしい。

何があったんだろうか。もしかしてここがバレちやったのかな。アジトがバレちやったなら、森のフクロウの一大危機じゃない。でもSeedがいるんだもん。

たとえ、私が望んだものとは違っていても、スコールたちは強い。きつと私たち全員を逃がしてくれるんだろうと素直に思えた。

そんな風に現実逃避していると、部屋の扉が控え目に叩かれた。

一瞬、風のざわめきかと思うような弱さで、少しだけ戸惑った。

小さく「だれ？」と問いかけると、一拍おいてから扉が開かれた。

——入って来たのはシオンだった。

Seedの中では、戦闘向きじゃないという男の子。大人しそうな子だ。

男の子としては小柄なその姿も、Seedであるということもびつくりだ。

私が知っているSeedとは、ずっと違ってた。

もっと大きくて、もっと強くて、もっと頼りがいがあった。

乱暴で、ガサツで、でもどこか優しく、そんな人。

私はシオンが苦手だ。

さつきみたいに、淡々と作戦の不備を指摘してきたり。

まるで私たちのやっていることが無意味のよう。

そんな冷たい見透かすような視線を送ってくるのがたまにある。

私の知っているあの人とは、全然違っていて、冷たい。

そういえば、私はさつき彼に怒られたばかりなのだ。

怒られて、逃げ出して。私は泣き疲れて眠ってしまったのだ。

そのことを思い出し、罰が悪くて思わず掛け布団を引き寄せる。

「な、なんのよう?」

ドモってしまった。恥ずかしい。

「敵襲だよ。アジトがばれたみたいだ」

「……みんなは?」

本当に、アジトがばれちゃったんだ。

これから私たちはどうなってしまうんだろうか。

「森のフクロウは撤退を始めた。」

Seedは今偵察中だから」

「偵察?どこへ」

「放送局。」

逃げながら説明するから早く」

寝起きの頭では理解が追い付かなかつた。

それでも、彼が私を助けてくれようとしているのは判った。

苦手ではあるけど、助けてくれるのを抵抗する必要はない。

服はそのままだったから着替える必要はなかつた。

武器とアンジェロを連れていけば、私の準備は終わりだった。

チャクラムシューターをセットしながら、私は彼に聞く。

「どこに逃げるの?」

「スコールたちと合流する」

スコールたちとつてことは、別の場所にいるってことよね。

「どこにいるの?」

「判るから大丈夫だよ」

そういつて彼は振り向いて、アジトを出て行こうとする。

それを追いかけて、小走りで走ろうとすると、直ぐに追いついた。

彼は、適合率が低いという風に話を聞いていた。

私も、ジャンクシオンはよく使ってる。

家から持ち出してきたジャンクシオンマシンを付けているのだ。

だから、私には簡単に追い付けてしまう速度だった。

でも、私はそれを不思議と、頼れないとは思わなかった。

彼には警備の流れもスコールたちの位置も判ってしまうらしい。

迷わず知らない路地に入って行ってしまふ彼の後ろ姿を追いながら。

その小さな背中が、決して優しくないものだとは思わなかった。

逃走の途中、駅前の大通りで騒ぎが起こった。

何が起こったんだろう。少し前を走るシオンに聞いてみる。

するとシオンは、少し複雑そうな顔をしながら、私の質問に答えた。

「どうやら放送が開始したらしいな」

「放送？」

「大統領の目的が一体何か、確認してみないかい？」

そういつて彼は大通りに入って行ってしまふ。

人通りの多いところについて、大丈夫なのか。

捕まったりしないのかなと思いつながらも付いていくことにした。

街頭テレビには、大統領と、それに剣を突き付けている男の人がいた。大柄な人。凄いかっこつけたようなコートと剣が、妙に似合ってた。

その人がまるで大統領を人質に取ったかのような振る舞いをしていた。

「サイフアーか」

「サイフアー……っつて!」

あれ、もしかしてサイフアーなの?!

まさか。何で?

いつかSeedにはなってみせるといつていたけれど、本当に?

シオンが知っているということは、本物、なのよね?

「知り合いかい?」

「うん、前助けてもらったの」

サイフアーは大統領を人質に何かを要求しているらしく。

護衛がそれを救おうと、そして若い女の人が仲裁するように叫んでいた。

ただ、街頭テレビから大分離れたこの場所じゃ、よく聞こえない。

そしてそのまま放送が途切れてしまった。設備が駄目になったらしい。

「困ったな。」

「何も判らなかつた」

「あれ大統領が人質に取られてたのよね？」

Seedもガルバディアに何か要求があるの？」

「取りあえず、聞いてみる。」

「この目の前の少年だったら、何かを知っていそうな気がした。」

「サイファーのことも、どうやら詳しい素振りを見せてるし。」

「いや、ないはずだ。」

「恐らくは彼の独自行動だろう」

「……どうするの？」

「彼は少し自信なさそうに、」

「そうだね。」

「スコールが偵察をしてるから、混乱に乗じて侵入するかもしれない」

「誘拐作戦はしないんじゃないの？」

「私は、それで散々泣いていたというのに。」

「実行はね。偵察は危険ではないし、やってもらってる」

「そう、なんだ」

「さつきはそれを伝えそびれたからね。

悪かったよ」

そういつて、彼はそっぽを向いてしまった。

「……やつてくれてたんだ」

「そういうことだね。さ、行こうか」

そういつて、彼は人ごみから離れて大通りを西に向かった。ちよつとだけ、彼が苦手じゃなくなった私。

少し後ろではなくて、今度は右隣を走つていくことにした。

「スコール！無事か？」

「ああ」

私たちが放送局近くにある出版社前の広場に着くと。

放送局から逃げてきたらしいスコールたちがいた。

なぜか知らないけど、テレビに映っていた女の人まで居る。

「追われてるのか？」

「いや。」

「だが隠れる必要はあるだろう」

「リノアさん！」

「ここらへんで隠れられそうな場所はある？」

シオンは、突然私に話を振って来た。

驚いたけど、ここら辺には森のフクロウがいることを伝えた。

案内をお願いしてくるシオンに、私はうなづくことで承を示した。

逃げ込んだ先のおうち。

お世話になってるおばさんのお家で、私たちは説明を聞いた。

サイファーは、なんと私の為に来てくれていたらしい。

スコールたちは、あの後、偵察で放送局に忍び込んだらしい。

そして放送が始まると、サイファーが乱入、大統領を人質にとった。

彼は、私に来てくれるのだと思い込んでいたらしかった。

サイファーは私から依頼があったときいてきていたらしく。

若い女の人、キステイスはそれを追いかけてきていたらしい。

画面越しのティンバー班への支援要請に対し、スコールたちは乱入。

混乱した場の中で、ゼルがガーデンのSeedであるとバラしてしまった。

どうするべきかをスコールたちが悩んでいる間に。

魔女が突然現れて、サイファーと大統領を連れ帰ってしまった。

「いきなり魔女が？」

「どうやらガルバディアと手を組んでいたらしいわ」

「そんな口ぶりだったぜ」

とにかく、大統領誘拐作戦は失敗。サイファーが逆に誘拐されて。

ティンバーから軍が撤退後、ガルバディアガーデンに向かうことになった。私にも異論はなく、護衛を受けるということに同意をしたのだった。

テインバーからは列車で脱出した。

切符は森のフクロウが用意してくれて、なんとか助かった。

いや、最悪徒歩で脱出も出来なくはなかったんだけどね。

その場合足手まといになるのは俺だからね。

歩くことにならなくて、本当に助かったというのが本音だ。

森のフクロウには感謝しても足りない。それでもないか。

ガルバディアガーデン最寄りの駅について、そこからは徒歩。

途中の森でジャンクション事件も発生。

今度はスコール、キステイス、セルフィの3人が倒れた。

流石に、今度はみんなも不安がっていた。

何が不安って、任務中に起きないかどうかでことである。

ただ、その割りに4人全員はそれ程心配していなかった。

それは、もしかしたら、犯人の記憶がどこに残っているからか。

エルオーネの記憶が、僅かながらでも痕跡を残しているのだろうか。とにかく、部外者のリノアさんの方が心配をするほどだった。心配していたスコールとリノアの言い争いは起きなかった。リノアが落ち込んでいること。

スコールが不器用ながらも、多少の気遣いを見せること。どちらも上手くといつてはアレだろうが、働いたらしい。

気分を持ちなおしたリノアを見て、安心そうな顔をした辺り。意外と彼もリノアのこと気がなっているのだろう。

実は、案外とお互いに一目ぼれだったりするのだろうか。

ガルバディアガーデンではキステイス先生が説明に行った。

案内された部屋の中で、残った5人は微妙な感情で席に着く。

特に、目立って微妙な顔をしているのはゼルだろうか。

「ゼル」

「……なんだよ」

声を掛けても、無然とした表情であることは変わらない。

「多分、心配いらなと思うよ。」

「君が思っていることにはならない」

「根拠は」

じろりと睨み付けるような視線が、俺に向けられる。

ゼルが心配してるのは、バラムガーデンのことであるだろう。だとしたら、恐らく、どうあがいても心配は要らないはずだ。

「現状でバラムガーデンを潰す理由にはならないからね」

「どういう意味だ？」

強いて言うなら、そのまんまの意味である。

ジャンクシオン技術をまともに使えるのはガーデンだけ。

それも、バラム・ガーデンだけなのである。

後の二つのガーデンはジャンクシオン訓練をしていない。

それは原作からして同じこと、この世界においても同じである。

魔女イデア視点ならともかく、大統領視点ではまだ早い。

「まだ、Seedは利用価値があるから」

魔女イデアなら、ガーデンを即座に潰そうとするだろうが。

大統領はまだ必要としているはずだ。だからこそ。

まだ、完全に権力を奪いとつてない現状では、まだ早い。

どこまで説明するか、と更に口を開けようとしたとき。

キステイス先生は戻って、二つのことについて説明を始めた。

丁度俺たちが話していた、サイファーについてを含めて。

大統領誘拐は、実行犯の単独行動。

ガーデンを批判はせず、犯人の処断はガルバディア法に基づき行う。

俺が知っている通り、そして知らずとも予想する通りの結論だ。

まあ妥当な判断だろう。

恩を売りつつ、ガーデンを潰さなくてすむ選択として、正しい。

原作知識がなくても妥当だと思う。魔女の意図は別として。

それを聞いて落ち込んだりノアさんがちよつとだけ愚痴り。

色々とスコールがトラウマを刺激されそうになったり。

ガーデンから来た風神と雷神の2人が新たな依頼を持ってきたりした。

今度の任務はバラム・ガルバディアガーデンの協力任務だ。

ガルバディアの平和使節として任命された魔女イデアを暗殺すること。

今度こそ、学園長の本命の依頼である。Seedの存在意義でもある。

依頼者はフューリー・カーウエイガルバディア軍大佐。

方法は狙撃手による遠距離からの狙撃。

ガルバディア・ガーデンからアーヴァイン・キニアスが派遣される。

今度は作戦の精密度も準備期間もかなり高い水準のものである。それでも失敗を逃れ得ないのは、ほぼ確定している。

魔女イデアの力の前には、たかが一発の銃弾など無意味であるのだ。だからこそ俺はこの作戦の後を考える必要があると確信していた。

ガーデンからは、更に列車でガルバディアに移動した。

今度も、歩かなくてすんでありがたい。俺の身体能力は低いから。そして依頼者に接触しようとするが、屋敷の門番に止められた。

能力の確認を要求され、名も無き王の墓に行くことになり。

今回は探索であるために俺も同行した。

こういうときぐらいは仕事をしないと何の為にいるか判らない。

リノアの名前を出して即座に通ることも可能だろうけれど。

能力の確認を取れるだけの時間的余裕があることを考慮したのだ。

信頼を獲得するために時間を費やしても問題がないと判断した。

門番にもらった地図と俺の知覚能力で、調査は直ぐに終了した。

Seedが5人。ガルバディアガーデン最高の狙撃手。魔女の素質を持った少女。

戦力としては俺の護衛分を考えても非常に充実しているのである。深部まで調査して、新たなG・Fを得ることにまで成功した。

早く終わったのは、事前にレビテトを使っていたのも原因だろう。

地属性のパターンがする、と嘯いておいて正解だった。

そして、依頼者との接触到に成功。

リノアさんが大佐の娘であると明かされ、若干不穏当になるもの。

とりあえず、俺たちは作戦の説明を受けることになった。

作戦の大まかな内容は次のようになる。

まず実行はガルバディアと魔女の協定を祝ったセレモニーの日だ。

その日には、魔女イデアも参加するパレードが行われる。

そのパレード開始前に、2チームに分かれたSeedが指定位置に移動する。

凱旋門チームはセレモニー前に凱旋門に潜入。

狙撃チームはセレモニーが終了するまで大統領官邸前に待機。

セレモニー後のパレードが本番だ。

パレードで大統領官邸の正門は開かれ、パレードが出発することになる。

狙撃チームはライフルが隠された時計部屋に侵入、時間まで待機。

パレードは街中を回り、2000に凱旋門を通り過ぎる。

その時に凱旋門チームが制御盤を操作し、鉄格子を下す。

同時に時計部屋は、狙撃チームと魔女の間には障害物がなくなる。

既に、ガルバディアガーデンと大佐の間で協議が持たれていた結果。

足りていなかったのは実行主となる *seed* だけであつたようだ。

作戦は丁寧に練られたものであり、狙撃までは成功するだろう。

狙撃が成功し、魔女が死んだらそれでよし。

死ななかつたら *seed* による強襲で直接撃破を目指すことになる。

その場合、主に戦闘に参加するのは狙撃チームになるだろう。

この任務だけを考えるのなら問題はない。ないのだが。

ここからは原作知識を考えると変な行動は出来ない。

リノアさんの暴走は避けるべきだし、凱旋門チームの任務放棄もよくない。

結果に問題はなくとも、今後には支障がでそうなものは避けるべきだ。

さて、どうやって今後に影響ないように、色々誘導するかだが。

それを考えるには、まずはこれからの未来を考える必要があるだろう。

まず、暗殺は失敗する。これは全部が上手くいっても変更なしだ。

スコール、ゼル、セルフィ、キステイスは捕まることになる。

D地区收容所に送られ、リノアさん、アーヴァインの救出を受ける。

スコールは拷問を受け。サイファーが無事であることを知り。

脱出に成功した全員は、ミサイル発射阻止と避難に向け行動する。

しかし、ミサイルは発射され、ガーデン同士の戦争に移行する。

バラムガーデンは助かるものの、トラビアガーデンは崩壊する。

知っているのに、千人単位の死者を出させるわけにはいかない。

その為には魔女暗殺か、ミサイル発射を阻止する必要があるだろう。

どちらがより簡単かときかれると、悩むところだけけれど。

前者は無理だ。いくらなんでも、方法がない。

原作と違って俺が居るが、だからといって戦力は変わらない。

戦力的に無理だし、また、殺害していいものかも微妙である。

下手をすると、今、リノアに継承が行われることになるのだ。

それは、あんまりよろしくない。どうなるか想像がつかなくなる。

どうなるか予想もつかない選択肢だが、そもそも取りようがない。

そうなるその後者だ。

ガルバディアにおいてミサイル基地と呼ばれるものは2つある。

ただ片方は12年前に新しいほうが出来て以来、整備をしていない。

そうなれば、新しい方だけを襲撃し、破壊すればいい。

どう考えてもこちらの方が正しい一手だし、予想もしやすい。発射されるより前に、襲撃に成功すればいいだけだからだ。

その為にはSeed 4人の内、1人は捕まらない必要があるだろう。潜入が出来、戦闘もこなせないと、実行は不可能であるからだ。

その上、救出の為の人材を考えると、最低でも二人は必要になる。

俺は暗殺失敗時に、凱旋門にいる6人の内。

どの組み合わせでもいいから、3人は助けないといけない。

どうやってそれを行うか。そして自分の身をどうやって守るか。

それに、どうやってミサイルのことを知ったというべきか。

そんなことを俺が知るタイミングを、どこかで作らなくては。

正直に言うと、本気で俺の手には余るレベルの難題である。

だからこそ、俺は気付かなかった。気付かない振りをしていた。

スコールが捕まれば、サイファーから拷問を受けることになることに。

……そんな現実味のないことが、現実になろうとすることに。

俺はどうしても、真っ向からは現実を見ることができなかつた。

1
2

「俺とアーヴアイン・キニアスが狙撃チームとして行動する。

凱旋門チームはキステイスが指揮、残りはゼル、セルフィに頼む」

おおっと、予想外でも何でもないけど俺が入ってないね。

予想外でも何でもないけど、入ってないとびっくりするよね。

別に傷ついたりはいしなくても。ホントだよ？嘘じゃないよ。

「その割り当てだと、俺は通信担当でいいのかな」

「ああ。」

凱旋門前の通りで待機し、定期的に双方に連絡を取れ」

「了解」

これで、最低でも俺の安全は確保できたわけで。

後はどうやって残り3人を保護するか、なんだけども……。

一番簡単そうなのは、やっぱり、リノアさんかなあ……。

「やっー！」

「きゃっ」

大佐に実行を任されたスコールが、狙い通りの割り当てをする中。

何かを持ったリノアさんが部屋に飛び込んできた。

その拍子に、扉の前にいたキステイス先生にぶつかっている。

「あ、キステイスごめん」

「どうしたのリノア？」

「あの男に閉じ込められてたんだけど、ようやく出れたの！」

父親をあの男呼ばわりするリノア。ちよつと回りを見て欲しい。

孤児が多いSeed組が、少しだけ苦い思いをしているのが見て取れる。

まあ、俺にはそれを指摘する時間も趣味もないんだけども。

「スコール」

「なんだシオン」

「リノアを俺の護衛につけていいか」

「……戦力としては十分か」

何より、俺よりは遙かに戦闘向きな訳だしね。

どっちがお守りかって言うと、俺の方がお荷物な訳である。

もう一つ、リノアさんが居た方がいい理由もあるし、ね。

「ああ。」

それに作戦終了後にティンバーに戻るならその方が都合がいい」

「決まりだな」

スコールがリノアに向かって告げる。

「あんたも協力してほしい」

「え……いいの？」

「人手が足りていない。任務はシオンの護衛だ。」

シオンの指示に従い、凱旋門前で警戒をしてくれ」

へへっ任務か、とちよつと嬉しそうにしているリノア。

部屋に入った時に落としたオダインバングルはもうどうでもいいらしい。

ありがたいというか、なんとというか。とにかくそれならそれでいい。

「リノアさん。」

頼めるかい？」

「うん、もちろん！」

私も協力する気だったんだから！」

「それはよかった」

そしてスコールをチラリと見ると、スコールは頷いた。

もう、戻れない、ね。怯む心をぎゅっと絞りだして俺も頷く。

「時間がない、始めるぞ」

「了解」

「了解だぜ」

「同じく」

「了解よ」

「了解だよ」

「頑張ろうねー！」

スコール、アーヴアインの狙撃班。

キステイス、ゼル、セルフィの凱旋門班。

そして、俺とリノアさんのそれぞれが指定場所に向かっていった。

魔女暗殺作戦の、失敗の始まりであった。

リノアがきよろきよろとする中。

俺はスコールとアーヴアインが指定位置についてたことを確認した。

距離的には、十分知覚できる範囲である。念話も届く。

任務は順調だ。

キステイスたちはリノアに謝ることがないから、持ち場を離れない。焦ったリノアさんが、大統領官邸に突入もしない。

「ねえ、リノアさん。お願いがあるんだ」

「な、なに、シオン」

……やっぱり嫌われてるのかね。さっきはそうでもなかったけど。

結局こうやって二人きりになると、どうやら脅えられている。

話しかけただけでドモられると、流石にちよつと後悔もする。

「あの、さ。」

もし狙撃が失敗したら、コレを使つて欲しい」

「これ……魔法石?」

そういいながら、今まで集めてきたフレアストーンを渡す。

「フレアストーンだ。」

もしもの時には、凱旋門の鉄格子を破壊して欲しい」

「――！」

それって」

「みんなを逃げさせる為、つてね」

俺よりも、リノアさんの方が魔力が高いことは既に確認済み。

だから、彼女なら鉄格子も壊せるだろうし、混乱も起こせるだろう。

ならば後は、一人でも多く、逃げ出せるようにするだけだ。

「私でいいの？」

「リノアさんだから頼むんだよ」

いや、本当に。俺は多分バステばら撒きで忙しくなるから。

ああ、そうだ。後でジャンクシオンも魔力型にしてもらおう。

最大威力でなければ、折角のフレアも無駄遣いになってしまう。

そう思っている俺に、リノアさんはじつと見てきた。

「ね。そういえばさ」

「何か問題があったかい？」

そうじゃなくて、とリノアさんはマジメな目で俺を見る。

「リノア、でいいよ」

「……リノアさん？」

「違うよ、リノア。」

君だけ、シオンだけ私をさん付けで呼ぶの」

……ああ、そういうことか。

俺のさん付けに、何だか疎外感を感じていたって言うわけか。

それは悪いことをした。依頼者だからと線引きしてただけなんだが。

「……そっか。」

じゃあ、リノア。もし失敗したら、頼むよ」

「任せてよ、シオン。」

……ふつつまるで私もSeedみたいだなあ」

混乱に乗じて、一人でも多く助けだしたい。

そしてミサイル発射を阻止する。

それが俺の、物語に關ると決めた時からの目標の一つだった。

時間が進む。時計の針は止まってくれない。

凱旋チームが機械室に入ったのを確認し、念話を試みる。

対象はキステイス先生。恐らく、直ぐに気付いてくれるはず。

「先生」

「シオンね」

ほら、無事に繋がった。

「異常は？」

「ないわ、後は時間を待つだけよ。」

「そっちは？」

「何も無い。」

ああでも、一応だけど失敗時には鉄格子をリノアがこじ開けるから」
先ほど、リノアをお願いしたばかりのことである。

「そこから撤退すればいいのね」

「一人でも出てくれば救出作戦が実行できる」

「ゼロにするなっこと？」

「お願いするよ」

本当に、お願いしたい。

特に凱旋門チームの方が、まだ逃れられそうな位置である。
突撃するスコールとアーヴァインには期待が出来ないから。

「伝えておくわ」

「これで切るけどいいかい？」

「大丈夫よ」

「それじゃ、成功を祈ってるよ」

「ありがと。」

でも、それはスコールに伝えてあげて」

判ったと伝えて、俺は念話をきる。

続けて、時計部屋にいるスクールに、同じく念話を試みる。

その俺を、リノアは静かに見守っていた。

「スクール」

「シオン」

「異常はない？」

「アーヴアインが緊張している」

あー。そうだよね。

彼にとっては、記憶に残ってるママ先生なんだよね、魔女は。

他のみんなには記憶はないけれど、彼だけに記憶が残ってる。

幼馴染、というか。兄弟みたいに育ったことも覚えてないんだ。

彼にとってはどれぐらい不安な状況なんだろうね。

とにかく、話を続ける。このことは俺が知ってちゃいけないことだ。

「緊張？」

「あがり症らしい」

「成程」

「どうすればいいと思う」

さて。原作のスコールはどうやって伝えていたっけ。

俺は、俺だったらどうするか。

「失敗してもいいと伝えれば？」

「そういうわけにもいかないだろう」

「突入の合図だと認識してもらえばいいじゃない」

確か、そんな感じでスコールは説得をしていたはずである。

「悪くないな」

「でしょ」

ん。やっぱりスコールもそれでいいと感じたようだ。

「試してみる」

「うん。」

「これで切るけど？」

「ああ」

「無事を祈ってるよ」

「感謝する」

そういつて念話をきる。取りあえず俺の仕事は終わりだ。

そういえば、キステイス先生には成功を祈ると伝えて。

スコールには無事を祈るといふ風に言葉を変えてしまった。

やれ、先生にはその言葉はスコールにといわれたのにな。

伝えそびれたその言葉、後悔しなくても済めばいいけど。

そんな風に縁起の悪いことを考えながら、俺たちは時間を待った。

2000。パレードが、凱旋門を通り抜けようとする時間を。

やがて、街中を回っていたパレードが凱旋門にやってくる。

時計を見ると1959、何とも進行係の腕を感じさせる時刻である。

パレードが凱旋門に入り、そして。凱旋門の鉄格子が下された。

13

あつという間に騒ぎが起こった。悲鳴がキインと鳴り響く。

響き渡る怒号に、銃声なんて聞こえない。失敗かも判りはしない。

ただ、リノアが俺の腕を掴んではぐれないようにしていた。

スコールたちの位置を確認すると、パレードの中にいた。

戦闘が開始されたかと思ひ、続いて凱旋門チームの場所を確認。

すると、どうやら移動中であるようだった。

凱旋門チームも、後少しで魔女までたどり着く。

そんなことを考えていると、肩を掴まれて揺らされた。

リノアである。当然だ、ここには、他に知り合いはいないはず。

「ねえ！一体どうするの?!」

「戦闘が始まった。」

一旦離れて、魔法で鉄格子を狙える場所まで下がろう」

思っていたよりも、混乱が酷い。

この状況では擬似魔法ですら撃てそうになかった。

「みんなは」

「戦闘中だろう」

「大丈夫なの?!」

「殺されはしないさ」

権力の誇示の為に、捕まるだろうからね。

それに、簡単に殺されるほど、弱い彼らでもないだろう。

「助けなくてもいいの?!」

「今はまだ任務中だ。」

負けが決まるまではそんなことは出来ない」

せめて、魔女の一撃が決まるまでは、手出しは要らない。

そこまでこないと、中のみんなも撤退には移ろうとしないだろう。

だから、まずはフレアを撃てる位置までさがらないと。

「でもー」

「お願いだから従ってくれ!」

つい苛立って怒鳴った俺は、気まづくなってそっぽを向いた。

リノアは納得したかどうかはともかく、一応は従うらしい。

肩を掴んでいた手を離し、俺の裾をちよこんと握る。

「……行こう」

「私、一人でも傷ついたりしてたら、あなたのこと、怨むから」

「俺だって。」

きつと俺が許せないだろうね」

そういつて喧騒から少しだけ離れる。

ちよつとだけ人から離れた高台で喧騒を見守っていると。

凱旋門の中に非常に大きな氷が生成されるのが見えた。

魔法の力だ。遠くからでも絶大と判る力量の、その一撃。

これで戦いは終わるはず。ならば今こそ俺たちの出番つてわけで！

杖を掲げ、集中しながら俺はリノアに指示を出す！

「リノア！」

「判ったよ！」

Seedにはあらずとも、魔法にはまだあらずとも。

圧倒的な魔力とジャンクション適性を持った少女がフレアを打ち出す。

惜しみなく打ち出されたフレアストーンが、氷と鉄格子を吹き飛ばす。

「流石」

「あとは、どうすればいいの?」

集中して、遠距離からブラインを打ち込み続ける俺に。

流石のリノアも疲れたのか、肩で息をしながら問いかけてくる。

とにかく、みんなの援護をしないといけないけれども。

「落ち着いたら、カーウエイ邸に逃げ込もう。」

逃げられたなら、みんな来るはずだ」

「逃げられるかな」

「信じようよ」

「……うん」

二人で、鉄格子の中に向かってブラインやスリプルを乱打し。

救助隊やら、消火隊やらが集まり始めた頃に、俺たちは退散した。

どうか、出来るだけ多くの人が逃げ出せていればいいけど。

そして、魔女暗殺作戦は当然の様に失敗に終わった。

逃げられたのは、セルフイとアーヴァインだけだった。

魔女の一撃がリノアによって阻止されたとき。

鉄格子が破壊されたことで、任務の続行が不可能になった。スコールはそう判断したらしい。妥当な判断である。

全員は逃げられない。そう、誰もが思っただらしい。

誰を逃がすかという段階になって、みんなが残りたがった。

その中で、スコールが選んだのはその二人だったのである。

理由はシンプル。何処まで時間を稼げるか、判らない中。

最大限に時間を稼げるように、武器のタイプで選んだらしい。

相対的に接近戦の苦手なセルフィとアーヴァインの二人を。

俺とリノアがカーウエイ邸についてから30分。

コートと帽子が戦闘中にボロボロになったアーヴァインが来た。

愛用のショットガンも、目立つから手放してきたらしい。

少しだけ落ち込んだ様子で、アーヴァインは無事帰ってきた。

「ただいま」

「？」

もしかして、アーヴァイン？」

「なんだいその言い方。」

コートと銃と帽子がないと見分けがつかないとか言わないよね？」

「見分けついたらじゃないか。

とにかく、無事でよかった」

それから少し、アーヴァインにリノアを任せ。

俺は外へと、偵察に出ることにした。

武器の類は一切持たず、丸腰で外に出て行ったのである。

その目的はたった一つ。情報を得た理由作りである。

ミサイル発射の情報を、得られるとしたらこのタイミングだった。

原作知識ではなく、ちゃんと得てくるには、今しかなかった。

とはいえ、そんな重大情報を簡単に仕入れられるはずはない。

周りの様子を見て、犯人が捕まったという情報を幾つか仕入れ。

そしてミサイルの情報は、流石に得ることは出来なかった。

アーヴァインが帰った1時間ほど後に、セルファイがきたらしい。

騒ぎの中に偵察にいった俺が帰ってくるまでの間に帰ってきたのだ。

彼女も、大体無事である。これで、最低限のメンバーは揃った。

「戻ってきたよ」

「シオン！よかった」

「セルファイか！」

逃げられたんだね」

「うん。」

みんなのお陰だよ！」

アーヴァインと違って、比較的ダメージの少なかったセルフィ。

一度町の外まで逃げてある程度の敵を蹴散らしてから帰ってきたらしい。

時間は掛かったが武器を失っておらず、落ち込んだ素振りはなかった。

「ところで、何か判った？」

偵察に行ってたんでしょ？」

「ああ。」

あんまりいい情報はない」

「聞かせてよ」

そういいながら、セルフィが真面目な顔で見てくる。

俺はその勢いに押されながらも、一応得てきた情報を伝える。

まずは、原作知識ではなく、ちゃんと得てきた情報である。

「判った。」

魔女強襲の犯人は捕まった」

「だろうね」

「犯人は5人、捕まったのは3人。

残り2人は現在も逃走中だつて」

「みんな捕まったのね」

リノアが溜息をつく。

俺に突きささる視線は中々に冷え切つたものだった。

負けないし。そんなのは当然判りきつたものなのだから。

「だろうな。」

それと彼らはD地区収容所に入れられるらしい」

「聞いたことあるよ。」

税金の無駄遣い、絶対に逃げられない鉄の監獄」

まあ、アレは完璧に税金の無駄遣いだとは言うけどね。

「そうだ。」

だが外の攻撃には弱い」

「助けに行くのね!」

リノアが意気込んだ。ありがたいね、この前向き精神。

しかし、もう一つ。こっちは俺が仕入れてない情報である。

というか、下手するとまだ決まってすらない情報だ。

「だがもう一つ悪い情報がある」

「なんなの？」

「ガーデンへの報復を決定したらしい。」

「ガルバディアはミサイルを撃ち込む気だ」

「ミサイル!?!」

悲鳴を上げるかのように、リノアは繰り返した。

残り二人は、判ったたといわんばかりの視線を返してくる。

セルファイが、静かに冷たい声で俺に情報を求めてきた。

「対象は？」

「恐らくだがガルバディアは外されるだろう。」

「魔女の本拠地にするという話だからね」

「阻止しなきゃ!」

うん、と俺はリノアに頷き返す。

「うん、目星はついてる」

「どういこと？」

「長距離ミサイルが打てる基地は2つ。」

「現在稼働している基地は1つだけだ」

チラリとみんなを見まわす。

リノアは意気込みを見せ、セルフィは案外冷静な顔をしている。それに比べ、アーヴァインはどこか不審を隠せない顔である。

「そこを狙えばいいのね」

「ああ。」

ついでにガーデンへの連絡を誰かにまかせられれば最高だ」

「この家の使用人に任せられるよー」

流石のお嬢様パワーである。この子本当に普通にお嬢様だな。

あつさり呼び鈴でメイドを呼び出すと、便箋を用意させた。

結構可愛らしいデザインなのが、俺にはあまり似合わないけども。

「以降、この4人を2班に分ける。」

スコールたちの救出とミサイル基地侵入の2班だ」

「私救出行くよー!」

「はいはい!」

私はミサイル基地行きます!」

リノアが救出、セルフィがミサイル基地か。

原作とタイミングは違うけど、上手くばらさってくれたな。

じゃあ後はアーヴァインにと視線を向けて。

そこで俺は、予想外に冷たい視線に迎え入れられる。

おっと、俺何かしたかなというレベルじゃなくて。

これは敵対一步手前とか、それぐらいの冷たい視線である。

「僕は救出に行くよ」

「ん。」

それはいいけど、何か問題でも？」

バランス的に、アーヴァインに救出に行つて欲しい。

そういう思いはあったので、救出に行くのは構わないけども。

D地区収容所は対魔力装置があるから、銃器が必要だし。

「ごめん。悪いけど、シオン。」

僕は君の事をあんまり信用してない」

「ええと」

あー、そうか。そうだよな。そりやそうなんだけど！

確かにアーヴァイン視点で言うと、俺の怪しさ大爆発だけど！

このタイミングで、いや、このタイミングしかないか。

「どうして、君はここにいるんだ？」

随分色んなことを知ってるじゃないか」

「……ごめん、なんのことだか」

その上、そういう言われ方したら恍けるしかないじゃないか。

怪しいのは認めるけども、知ってるとはいえないことばかりだ。しょうがないこととはいえ、調子に乗りすぎたかも知れない。

14

アーヴアインにとって、スコールたちは幼馴染だ。

それこそ、一時期までは兄弟のように育った関係のはずである。

そんな彼らから、まるで他人の様に扱われたらどう思うか。

その上、彼らはママ先生を殺そうと平気な顔で言ってくる。

まるで他人のような、そんな口ぶりで暗殺しようと気軽に言う。

記憶を保持しているアーヴアインにとって、現実にはホラーだ。

その理由を求めたときに、一番怪しいのは誰か。

普通に考えたら、リノアと俺かどっちかで、更に言えば俺だろう。

俺は、バラムガーデンからずっとみんなと一緒に来たのだ。

追い詰めた積もりはないが、アーヴアインは追い詰められてた。

その状態での救いは、誰かに何かをされてしまったということ。

その誰かは、俺であると、彼は言っているのである。

とはいえ。

俺にとっては何んなことは知ってることだけど。知らないはずのこと。

それこそ知っていたら犯人でしかありえないようなことばかりだ。

だからこそ、俺は恍惚続けることしか出来ない。

「なんのことが判らないけど。」

取りあえず、救出には行ってくれるんだよね」

「ああ、行くさ。」

君に任せたくはないからね」

口調は静かだけど、その声には絶対の俺を拒否する響きがある。

話についていけないのは、リノアとセルファイの二人だ。

……失礼。リノアだけ。セルファイは、どうやら理解している。

「シオンが怪しいのは仕方ないけどさ。」

取りあえず、話を続けさせてもらっていい？」

セルファイの口調にも、いつもと違って遊びがない。

トラビア・ガーデンも狙われるかもしれないのだ、そうもなろう。

アーヴァインは不承不承といった感じで小さく頷いた。

「それで、どうすれば救出できるの？」

「ジャンクションをしつつ外から強襲。」

出来るだけ混乱を長引かせれば大丈夫だと思う」

「うわ適当」

セルフィの感想も、俺は最もだと思う。

だけどこれ以上の説明がしようがないのだ、悔しいことに。

詳しい構造まで情報を手に入れられたわけではないから。

アーヴアインはいまだ不服そうにしているが、頷く。

どうせ、今の俺が何を言ったところで信用はされないだろう。

俺も、俺自身が怪しいことは承知の上で話している。

「ミサイル基地は？」

「大佐に頼んで、軍用車と軍服を貸してもらおう」

「正面から堂々侵入ってわけね」

こっちはシンプルに原作と同じ方針でクリアを目指す。

幸い、時間的には数日単位でまだ余裕があるはずである。

原作でリーダーだったセルフィがいるというのも、心強い。

「ばれないように行動しつつ、ミサイルの破壊か目標の変更。

基地の破壊まで出来ればいいんだけど」

「なんとかするよ」

本当に、セルフイが一緒にいてくれて心強いばかりである。

「終わったらどうするの？」

「バラムガーデンで落ち合おう。ガーデンが無理ならバラムのホテル。

それと……よし、書き終わった」

俺は手を止めて、封筒にしまう。

用意しておいたSeed公式書類用のシールをぺたりと張り付ける。

「仕事が早いね」

「文章を戻る間に考えてたからね」

「じゃあ私、頼んでくるよ」

「トラビアとバラム両方だからね！」

「判ってる！」

リノアが2通の手紙を持って、再度呼び鈴を鳴らした。

「いつから動くの？」

「早い方がいいな。」

「ここからは収容所には10時間はかかる。

ミサイル基地には8時間ってところか」

「じゃあ今からいこう！」

セルフイが即座に言ってきた。

今からは、それはそれでいいんだけど、疲れはないのだろうか。先ほどまで戦闘を、任務をしてきたばかりというのに。

「疲れてないの？」

「4時間くらい途中で眠らせてくれたら大丈夫！」

「頼もしいな。アーヴァインは？」

「似たようなもんかな」

……本当、俺と違ってみんなは頼りがいがあるというか。

基礎体力の時点で、俺はみんなに遅れをとつてると思うね。

だからこそ、こうやって頭脳労働でカバーする訳だけでも。

そして、リノアが戻ってきたので再度説明をする。

すると、彼女もきらきらした瞳で今すぐ行こうといい始めた。

どうやら、体力的にはまだ十分足りている様子である。

「今すぐ行こう！」

「大丈夫なの？」

う、とりノアは一瞬口ごもったが、直ぐにひらめいたらしい。

「メイドに車出してもらおう！」

「メイドも巻き込むのか？」

「2台で行って、途中で片方に移って帰ってもらおうの！」

思わずなるほど、といたくなくなるぐらいの案である。

この子お嬢様だけで地の頭はやっぱいいんじゃないかなあ。

そう思いたくなるほどに、思考自体は凄くしつかりしている。

さつそくセルファイが軍用車を。

リノアとアーヴァインが装備と車の手配をしに行った。

軍用車の準備は20分ほどのあっという間に終わった。

セルファイが言うには「お願いしただけだよ？」らしい、が。

その裏に、微かに薄ら寒いものを感じた。勿論追求はしない。

軍服に着替え、軍用車に乗りこむとセルファイが何かを渡してきた。

「なに？」

「軍の認識票。新規発行してもらったの」

おっと、この20分間にどれだけ無茶させてきたの。

そう聞きたくなるほどの、手はずの整い具合である。

参考までに聞いてみたいが、参考にしかならなそうなので辞めた。認識票のお陰で、町からの脱出は簡単に出来た。

セルフィは俺に運転を任せ、「ごめん」と断つてから横になった。

なお、俺の運転はド下手糞である。前に進むのが精一杯だ。

疲れていたのか、セルフィは4時間しても起きてこなかった。

荒野の中を軍用車で駆け抜ける。時折がたつくのはご愛嬌。

そんな嵐の中で輝きそうな体験も、5時間ほどすると飽きてくる。

少し休憩を取ろうと、車を止め。

リノアがメイドに用意してもらって置いていた食料を食べる。

日持ちが効く、レーションのようなものと。

今日中に食べてほしいものを別に用意してくださいっている。

なんというか、見習いたいほど気がきく人たちである。

サンドイツチと紅茶を頬張っていると、セルフィが起きてきた。

起こしてくれればよかったのに、と頬を膨らますセルフィに。

サンドイツチを押し付けると、嬉しそうに食べ始めた。

今度はシオンが休憩しててよと言うので、お言葉に甘えた。

とはいえ、俺は戦闘をしていたわけではない。運転もしてたし。

目がさえていたので、そんなに眠れそうな気分ではなかった。だから、こういう時のための必殺技スリプルを自らに使用。

魔力の調整をすれば、深くも浅くも眠れるのが便利である。

使いすぎると、普通の寝方を忘れるともつぱらの噂であるが。

「起きて、シオン」

「ん」

「もうすぐだよ」

「判った」

3時間ほどの睡眠で、俺の体力は相当回復していた。

出来そこないとは言えども、seedの訓練は受けてきているのだ。

体力は一般人よりはまだまだマシな方の積もりである。

「ねえ、シオン」

「何?」

セルファイが運転しながら声をかけてきた。何事だろうか。

「基地侵入のプランって何か決まってる?」

「いや。」

「侵入方法とやることしか考えてないよ」

基本はどたばたでなんとかかなると思ってる駄目人間である。

いや、ある程度何をどうするかは覚えているのだが。

それにしたって、確証はない程度の記憶しか持ってないわけで。

「基地破壊とミサイル破壊、目標変更だよね」

「ああ」

「実行は私単独でいいかな」

「……え？」

ちよつと、想定外な言葉が出てきた。それはどうなんだ。

「私一人じゃ君を守りきれない。」

プランがないのなら、撤退もその場で確定でしょ？

それなら、君には外で車両の確保をしていて欲しい」

「……成程」

あーうん。それはちよつと割りとありかも知れない。

どちらにせよ、戦闘をするつもりはないけれど。

作業速度より撤退の安全を考慮するというのは、多分ありだ。

もしも戦闘になったとしたら、俺は役立たずになるわけで。

うん、確かにそれは効率的な気がしてきた。

俺が情けないのさえ我慢すれば、かなり良い案だと思われる。

「通信をずっと繋げていてくれれば相談も可能でしょ？」

駄目かな？」

「いや、むしろかなり良い案だと思う。

君がいいならいいよ」

すると、セルフィはあからさまにほっとした顔をした。

む。なんか俺がついていくかと不安だったような素振り。

もしかしてだけど、ねえ。アーヴアインとおんなじで？

「もしかして、君も俺を疑ってたり？」

「さて、どうかなあ」

ミサイル基地への侵入は、特別問題もなく上手くいった。

軍服で軍用車にのり、認識票も持っている人間を疑うわけもない。

よく見たら認識票も、数年前に作られた日付のものだった。

偽造、偽造だよなあ。そんなことを思いながら。

入って駐車場に車を止めると、セルフィと最終確認をする。

念話の準備、接続完了。俺はこの場から動かないから繋いだまま。

「接続したよ」

「うん、ザワザワしてる」

「そつちから繋げてくれれば返事するから」

そう遠く離れなければ、ずっと繋いだままでもいられる。

流石に、俺自身が身動きするとなると不可能に近いけれど。

でも、今回は俺は乗ってきた車両の中に隠れているだけである。

「判ったよ」

「いつでも出せるように準備しておく」

「ありがとう。」

「いつてくるね」

そして、セルフィは緊張もなく、あっさりとして出て行った。

俺は運転席に座りながらセルフィの位置を追い続ける。

段々と奥の方へと入っていき、内部構造が複雑になっていく。

通信がないままに30分程が経ち、突然に基地から明かりが消えた。

何が起こったのか?、と慌てるとセルフィから通信が入った。

「やつほく」と明るい声が、G・Fを通して頭の中に響いた。

「セルフィ! 何をしたんだ?」

「電源ルームで主電源落としたの!」

「これでどこにでも入れるよ」

主電源を落とす。大事なのに、軽々というなあ。

でも、基地である以上、主要部は副電源が別にあるはずである。

まだまだ油断は出来ないが、とにかく順調のようではある。

「成程、順調みたいだね」

「うん!」

じゃあ通信を終わるね！」

「了解」

電源が落ちて、基地は混乱を初めていた。

発射準備を始める中で、電子機器が使えないのだ、当然である。現在、基地の中は非常電源により、最低限の機能しかなかった。

何より、朝の時間帯である。人が動き始める時間だ。

ところどころで、電源が入っていないことに気付き始める。

その原因を探し始めるのは、時間の問題ではないだろうか。

とはいえ、基地内で動くセルフイには、あわてた様子はない。

まあ、潜入任務であわててる奴なんて怪しすぎるだけだけでも。

そう思っていた矢先、格納庫前辺りから念話が入ってきた。

「シオン！」

「何があった？」

「コントロールパネルを発見したよ！」

「今なら操作も可能！」

ん、目的のもの発見って訳だね。

混乱中の今なら特に問題もなく操作可能ってことかな。

「セルフイナイス！」

判る限りで邪魔しちやえ！」

「今やってるの！」

目標変更は両方とも海に落としていい？」

俺は少し考える。

バラムガーデンが動くことや生徒の避難を考えると南はまずい。

基本的に、避難をしたらバラムに避難すると思われるから。

「ある程度の距離を持たせてなら！」

バラムガーデンのは北にやっつけてくれよ？」

「了解！」

そして通信を切らずに数分間。

セルフイの周りに近づく人影も、俺の知覚能力では見られない。

居住区がばたばたとしている中、セルフイが再度声を上げた。

「シオン！」

出来たよ！ これで大丈夫だよね？」

この後の指示をお願い！」

これでと聞かれても、具体的な操作の中身までは判らないが。

しかし、目標は弄つたのだ。俺は肯定の意をセルフィに示す。やれることはやってるのだ。これで駄目ならそれも仕方ない。

この後か。このまま逃げ出してもいいけど、念には念を、か？

本当だったらミサイル自体の破壊をしたところだけだ。

流石にそこまでやったら脱出自体が難しくなるに違いない。

そうなれば意味はないし、原作通り基地の爆破をするべきか。

基地内が混乱してる、朝の今ならそう難しくもないのではないか。

迷っているほどの時間はない。俺は早速伝えることにした。

「この基地には自爆機能があるはずだ。」

多分、管制室にあると思う」

「制圧して実行だね！」

「出来そうならお願いするよ」

無理っぽかったら別にそこまで危険を負う必要はない。

何せ、本来と違ってセルフィ一人。無理なものは無理である。

戦力を考慮したのか、少ししてからセルフィの声が聞こえた。

「行ってくるよー！」

「頑張ってくれ」

通信が切れた。

恐らく管制室は兵士がいるだろうし、戦闘になるだろう。

俺はいつでも発進できるようにエンジンを起こした。

位置合意的にも、出入り口を突破するのに不自由はない。

このままハンドルを維持してぶつちぎれば、逃げ出せるはず。

流石の俺でも、それぐらいは出来る。失敗はないだろう。

「管制室制圧完了！」

「どうすればいい？」

僅か数分で通信がきた。

「早いな！」

「戦闘はあったか？」

「あったけど、指揮官級と管制官数人だったから一瞬だよ！」

まあ、不意打ちでその人数ならセルフイなら余裕だろうか。

「それは良かった。」

「まずは指揮官からIDカードを奪ってくれ！」

「認証があるのね」

「多分な」

少ししてから、あつたよとセルファイから念話が入る。

そのまま操作に入ってくれるように、俺は伝える。

さて、無事に爆破できれば何よりなんだけど、どうかなあ。

セルファイが機器を弄り始めて数分。

基地内に警報がなり始めた。基地爆破の脱出案内だ。

どうやら操作完了らしい。そのまま念話を続ける。

「セルファイ」

「シオン、出来たよー」

「早速脱出してくれ。」

すぐに出れるようにしてある」

後は、セルファイを回収して、車をぶっ飛ばすだけである。

「ありがとう！」

後1分以内に外に行けるよ！」

「判った！」

こつちも動かす！」

車を動かし始める。目立たない程度に、そろりと出る。

出入り口に車先を向けると、斜め後ろの扉からセルファイが見えた。

念話ではなく、今度は肉声で、俺は叫び彼女に伝える。

「セルファイ！乗って！」

セルファイが走り寄って、飛び込むように助手席に入った。

アクセル全開！面倒なことはしらねえぜぶっ飛ばすぞオラア！

しがみつくようにハンドルを握り、俺は全力で足を伸ばす。

「行くよっ！」

アクセル全開で検問に突撃する。

警報が鳴る混乱の中、中からの突撃は予想してなかったのか。

色々なところにぶつかりながらも、簡単に突破することが出来た。

「やったあ！」

がたがたと揺れる中で、セルファイの喜ぶ声が聞こえる。

追跡は、どうやらない。あってもまだまだ後だろう。

直ぐには追いかけてこない、基地内はそんな様子であった。

10分程全力で逃走すると、遙か後方で基地は爆発した。

これで、俺がやれることは殆ど終わりって感じだろうか。

今更ながら、コレでよかったのかと不安が口について出る。

「……上手く、いったかな」

「いったよ〜！」

「みんな無事かな？」

「リノアとアーヴィンが助けてくれてるよ！」

セルフィは、そんな俺の弱音にも明るく声を掛けてくれた。

本当は、実行した彼女の方がもつと不安であるはずだろうに。

うん、駄目だ。俺の方こそ、明るく振舞わないと。

「……うん！」

じゃあ、バラムガーデンに行こうか！」

ミサイルの発射は阻止したにしろ、まだやることはある。

どちらにせよ、ガーデンは動かさなければならぬし。

それに今、ガーデンは学園長派とマスター派で混乱してるはず。

その中をレッツ力尽くでこり押しして、マスター派を排除。

そうしなければ、今後のガーデン同士の戦いに関わってくるわけで。

でなくとも。みんなとはガーデンで合流するという話である。

「まずはガルバディアだね」

「列車に乗らないとね」

荒野を車が進んでいく。時折、がたつきながら。

何だか口笛でも吹きたい気分になって、恥ずかしいので辞めた。渡り鳥でもなければ荒野で口笛など吹けない。色んな意味で。

そして、その後ろから一発のミサイルが放たれた。

なんで。どうして。基地は爆発したはずなのに。

そう思う俺に、横から小さく声が掛けられた。セルフイダ。

「ねえ。」

シオン、どうしてか、判る？」

「……もしかしたら。」

自爆範囲の中に、ミサイルが入ってなかったのかも」

そうだ。ミサイルを範囲に入れてない可能性は、ある。

原作では、確か爆破前にミサイルが発射されていたと思うけど。

いやしかし。爆破するなら発射装置も普通なら含めるはずだ。

そう思つて、ぐるぐるする俺の思考。

無理をしても、ミサイルそのものの破壊をするべきだったか。

後悔は、幾らしても足りない。そんな時に、眩きが聞こえた。

「トラビアだよね、あっち」

「……目標変更はしてるんだよね？」

「した、と思う」

そうか。あれは、今撃たれたのは、トラビア・ガーデンか。

バラム・ガーデンじゃないことに何処か安堵しつつ。

それでも、決してそれは救いじゃないとセルフイを見て思う。

トラビア・ガーデンに、手紙は送っているけれど。

目標変更もしているけれど、どうなるかは判ったもんじやない。

失敗したと嘆くより、目の前のセルフイを慰めないで。

そう思つて、大丈夫だよと慰めの言葉を言う俺に。

セルフイは少し冷たい目を返してきた。アーヴァインと同じ目だ。

その後直ぐに、元通りになる、が。今の目は気のせいじやない。

「——シオンが大丈夫つていうからには。

きつと大丈夫なんだろうね」

「うん、俺はそうだと思う」

その言葉の意味を、俺は特に深くは受け止めないことにした。

信用ならないと思われることがなんだ。やれることをやるだけだ。

たとえ、嘘でも適当でも、今は慰めの言葉をはくだけである。

「バラム・ガーデンに戻ろう。」

早くみんなと合流しなくちや」

「……そう、だね。」

いつまでも、二人でいてもしょうがないし」

その言葉は、まるで二人でいたくないと言っているようで。

ほんの少し、俺は傷つき。でもそれ以上にセルフイが傷ついていた。

俺たちは、沈黙の中ガルバディアを目指して車を走らせたのだった。

セルファイ・テイルミットの同行

シオンを信用しきれない。アーヴアインの気持ちがよく判る。

私は別に、シオンを疑ってるわけでも、疑いたいわけでもない。

でも、信用はしきれない。彼はどうしても、怪しいと思う。

都合がよすぎることをするよね、とは。ずっと思ってた。

それこそSeed試験の時から、ずっと。最初から思ってたんだ。

B班が電波塔に向かったときから、運が良いなって。

彼の行動は、何かを知ってるみたいにはっちり嵌る。

それは、まるで私たちの知らない何かが見えているような。

勿論、彼の知覚能力には、何か映っているんだらうけど。

彼の行動一つ一つを追うと、裏切ってるとは思えない。

だって、ちゃんと私たちの利に動いてるし、敵対はしてない。

だけど、ただ一言。まるで予定調和のようには見ええない。

感情の動きだって、そうだ。

サイファアの単独行動の時だって、ガーデンは大丈夫と言った。少しも不安そうな顔を見せずに、無事だよとゼルに言い切った。だから、私は疑ってはなないけど、シオンを信用しきれない。

アーヴァインほど、信用してないわけじゃないけど、それでもこの旅は、決して居心地のいい二人での旅ではなかった。

私たちはミサイル基地を爆破後。

ガルバディアに戻ると、そのままバラムに向かう列車に乗った。案外、ガルバディアは混乱しておらず、素直に乗れてしまった。シオンは情報統制や、魔女による洗脳が原因だろうと言った。

通り掛かる人からは元気を感じなかったから、納得がいった。

信用はしきれないけど、それでも頼りにはなる人だと思ってる。

シオンと2人きりになってから、だいたい50時間。

3日目に入ったところに、バラムガーデンについた。

その間、私たちの仲は、特に改善も悪化もしなかった。

バラム・ガーデン。

私にとつては、たった数日しか居なかった場所だけど。

もしかしたらこれからは、私の故郷になるかも知れない場所。

しかし、そこで待ち受けていたのは、平和とはいえない状況。みんなに、また会うことを祈りながら帰ってきた私を。

走り回る学生とモンスターたちが待ち受けていたのだった。

「なにこれ」

隣でシオンが物凄く冷たい声で呟いた。私もそう言いたい気分。

ガルバディアから、一生懸命にバラムガーデンに帰ってきたのに。

みんなはまるで宝探しでもしているみたいに走り回っていた。

いや。

生徒が「見つからないよー！」とか言っていることからすると。

本当に何かを探しているんだろう。一体何を探しているのか。

「おいお前たちー!」

誰も彼もが私たちに見向きもしない中で、いきなり声を掛けられた。

振り向くと教官がいた。勿論、見知った教官ではありえない。

私はここで授業を受けていないので、誰一人として顔を知らなかった。

「なんででしょうか」

「お前たちは何派か」

「……申し訳ありませんが事情が掴めません。」

今ガーデンに来たので、説明をしていただけると助かります」
「ガーデンの危機だ。」

マスターに忠誠を誓い、学園長を捕らえよ」

シオンが情報を引き出そうとして。

しかし、私には答えが端的すぎて理解が出来なかった。

「判りました。」

学園長を探し出します」

「そうか。」

「行け！」

だが、シオンには何が起こっているのか理解がいつたらしい。

どうやら、教官の言うことに従うようだ。よく判らないけれど。

信用できない人に、わからないまま従う気は、流石になかった。

その見知らぬ教官が遠ざかってから、私はシオンに聞いた。

「——ねえシオン。」

「一体どういうことなの？」

「推測だけど、ガルバディアの工作だね。」

暗殺の原因を学園長に求めて突き出させようとしたんだろう」

……随分、推測がうまいことよね。本当に。

アーヴァインが疑うのも判るよ。これだけ理解が早いのももの。単純に頭がいいだけでは、済まされない。そういうレベルだ。

しかし説明されれば理解も出来る。マスターと学園長の対立だ。

学園長は隠れて、学園長派という人たちに守られているんだらう。

さっきの教官はマスター派。つまり、ガルバディアに従っている。

「……従っていいの?」

「別に監視してるわけでもないから従わなくてもいいよ」

確かに。教官は離れて行ってしまった。

とはいえ、あの速度で理解して、その上さりと嘘をつくだなんて。

この人は自分が怪しまれる理由を、ちゃんと理解しているのか。

「それで、どうしよう。」

この状況、学園長側で収束させないといけないよね」

「取りあえず、嘘をつこう。」

ミサイルが打ち込まれるって放送を流せばいい」

……それ、嘘って言うにはあんまりにも趣味が悪いけど。

私にとっては、あんまり冗談でも聞きたくないような話である。

それで、取りあえず対立騒ぎは収束させるって訳だよな。

「みんな聞くかな」

「死ぬって言われたら逃げ出すよ。」

それにこの状況で全員を説得するのは無理だ」

「まずは騒ぎを鎮めないで、か」

混乱の中を突っ切って、ホールのエレベーターに乗り込む。

3階上がったが、学園長も生徒も誰も居なかった。

それもそうだ。何時もいる場所を探さないことは当然ないだろう。

恐らくここは何度も調べられて、居ないと判断されたのだろう。

私は放送しようとしたが、コントロールを奪われて動かなかった。

どうするかをシオンに相談しようとする、彼は溜め息をついていた。

なんだか、酷く億劫そうな表情である。どうしたのだろうか。

「どうしたの？」

「いや、頼りたくない人に頼ることになってウンザリしてるだけ」

理解が出来ず、漠然とした回答に疑問を浮かべた私。

シオンはちよつと困ったような笑いを浮かべた。

ああ、その表情だ。何もかも見透かしたようなその表情は、嫌いだ。

「学園長、いるのは知っています。」

ティンバー班のシオンです。報告があるので出てきてください」

シオンは、部屋中に響かせるような張りのある声で言った。

すると部屋の片隅、反対側の壁が揺らぎ、そこから学園長が現れる。

なぜ気がついたのか、は。流石に知覚能力つてことだね。

「驚きましたね。」

気付かれるとは思いませんでした」

「前来た時に隠し部屋に気付いていましたから」

「素晴らしい能力です」

「どうも」

呆気にと取られている私を置き去りに、あっさりと会話が始まる。

なんでそんなに普通に会話を始められるのか。私には疑問だ。

まずは、聞くべきことが一つ。

「なんで学園長がここに？」

「狙われたなら、裏をかかねばいけないでしょう？」

傭兵の元締めなのに、何も対策をしていないと思っていましたか？」

確かに、理屈はあっているのだが。どうもドヤ顔でむかつく。

そんなことを話している暇はありません、とシオンが割り込んだ。

そうだ、今までのことについて、話さなければいけないのだ。

「ミサイル、ですか」

「手紙は届きませんでしたか」

「この混乱です、無理はない」

「とにかく、対ガルバディア、対魔女戦です。」

「ガーデンを戦闘態勢に移行する必要があります」

「戦闘態勢にですか」

シオンの言葉に学園長が反応した。一体どうしたのか。

「ガーデンはシエルターとして作られていると聞いたことがあります」

「良く知っていますね。」

ですがどんな機能を持っているかは私も良くは知りませんよ」

学園長は机に座ると、戸を開けて何か小さなものを取り出した。

取り出したそれを机に置いて、私たちに見せる。古びた鍵だった。

これは一体と二つの視線に見つめられ、学園長は更に言葉を紡ぐ。

「あるとしたら地下のMD層です。」

あそこには、設立当時から手をつけていませんから」

「この鍵は？」

「エレベーターの操作板を開けられます。」

MD層にはそれを操作していくしかない」

ありがとうございます、とシオンが頭を下げた。

「ただ、モンスターが住み込んでいます。」

あなたが行くには危険かもしれない」

「セルファイだけに行けと？」

私だけ、か。シオンと一緒に行くよりはマシだろうけども。

「シユウたちに手伝わせてもいいですが、時間が足りみますか」

「シユウさん？」

「彼女たちが私を守ってくれています」

シオンが何かを考え始めた。

シユウは、試験の総司令官だったか。名前と顔は覚えている。

私だけでいかせるのか聞こうとしたが、その前に彼が口を開いた。

「いえ、もつと適任な人たちが来たようです」

「え？」

反射的に聞こうとした時、がらりと学園長室の扉が開かれた。

D地区收容所は堅牢だったが、案外大したことはなかった。

見た目は異質で、近寄り難いもので防衛機構も強固ではあったが。

中にいる人間は、ジャンクシオンもしてない兵士に過ぎない。

外で暴れまくっていると、中でも騒ぎが起き始めた。

スコールたちだと信じて戦っていると、突然建物が地面へと潜り始めた。

驚きながらも離れると、頭を少しだけ残して埋まりきってしまった。

そこからスコールたちが出てきて、なんとか僕たちは再会した。

結局、みんなは昔のことを覚えていないようだったけれど。

それでも、みんなはみんなだ。全員が無事のように嬉しかった。

だけど再会を喜ぶ暇もない。

僕たちはミサイルのことをスコールたちに伝えなければいけなかった。

シオンの情報であることには、不安が隠しきれなかったが。

僕たちは、全員で直ぐにバラムガーデンに戻るようになった。

収容所の軍用車に乗り込むときに、遙か遠くに火柱が上がった。それがミサイル基地の爆発したものと僕たちは何となく理解した。

セルファイたちが上手くやったのだと喜んだのもつかの間。

トラビアにミサイルが発射されて、そういう訳にもいかなかった。

バラムにも、撃たれるかもしれない。特にゼルが焦っていた。

僕はシオンが何かしたのかと思つたが、決め付けは出来ない。

とにかく、落ち合うと決めたバラムガーデンに向かうことになった。

バラム・ガーデンは、まだ無事であると信じて。

バラムガーデンに着くと、そこは混乱の真つ只中であつた。

学園長とオーナーのノグが争っているらしい。

そのことが、シオンと学園長を探して駆け回る中で判つた。

seedを中心にした学園長派は、大多数のノグ派に劣勢だつた。

班長は学園長派として動くことに決めた。

そうでなくても、マスター派、延いてはガルバディア派には入れない。

シユウという人なら学園長の居場所を把握しているらしいと知つた。

彼女に話をすると僕たちは着いてくる様に指示されたのだつた。

「スコール！」

「シオンか！」

シユウの居場所を探そうとして、知覚範囲を広げる。

すると、彼女は丁度学園長室に来ようとしているようだった。

そしてそれだけではない。更にG・Fの気配が着いてくる。

まさかとは思ったが、流石というかなんというか。

主人公の特性なのか最高のタイミングで現れた俺の心の親友。

無事であったことも含めて、こんなに嬉しいことはない。

でも、残念ながら再開を喜ぶような余裕はない。

現状の混乱を収め、早くガーデンを動かさないといけない。

どちらにしても、そう遠くないうちに事態は動くのだ。

ミサイルは飛んでこないにせよ、バラムは占領される。

そうなれば、ガーデンを動かさないと身動きがとれない。

ガルバディア・ガーデンから、一方的に攻め込まれることになる。

とはいえ、どこまでそれを説明するかという話だが。

「無事だったんだな、良かった！」

悪いけど、今からセルフイを連れてMD層に向かって欲しい」

「MD層？」

「ガーデンの地下だ。ガーデンの自衛機能がそこにある。

一刻も早く、ガルバディアへの対策を取る必要があるんだ」

嘘のような、本当のような。

そういうラインで物事を話すから、みんなから疑われるんだけど。

ほら、セルフイとアーヴアインの視線がまた冷たくなっている。

じゃあ、もう少し想像の範囲で収まる情報を公開するべきか。

「ミサイル発射が阻止されたなら。

次にくるのはガーデンへの直接攻撃だと推測される」

「MD層にはなにがあるんだ」

「ガーデンは元々シエルターとして作られたって話だから。

多分、防衛関係の設備が整ってるはずだよ」

ですよね、と学園長に視線を向けると。

恐らくはと不確かそうにだが、学園長は俺の意見を補佐した。

スコールは頷いて、他のみんなを軽く横目で見渡した。

「経緯はセルフイに？」

「ああ、道中聞いてくれ」

短い指示だが、スコールは俺の意図を汲み取ってくれた。

MD層はスコール、アーヴァイン、セルフィ、リノアの4人で侵入。

残りは、ガーデン上層で事態の収束に当たることになった。

俺は、予定通りミサイル発射との誤情報を流し始めた。

できる限りの生徒に避難勧告、バラムに逃げ出すように伝える。

バラムなら、ガーデンの動きに巻き込まれることがないだろう。

例え占領されたとしても、大きな影響はないと踏んでのことである。

数十分がたった時、バラムガーデンは大きな振動に包まれた。

絶望する人が逃げようとする中で、俺は成功したのだろうと安心した。

バラム・ガーデンは、機動要塞となったのである。かっこいいね。

ガーデンが動き出して、また混乱を始めた学園内。

スコールたちを探しながら、みんなと一緒に混乱を収めてまわる。

途中でスコールに再会し、ガーデンが動いているのだと伝えられた。

出来ていないと知っているが、制御は出来ているの？と聞く。

全く考えていなかったらしく、スコールは腕を組んで悩み始めた。

そうしていると放送がなり、スコールが学園長室に呼び出された。

今度は一人になった俺は、人捜しを再開した。

探しているのはニード、本編でガーデン操縦士となった同期のSeed。今後は彼の力も必要になってくる。そう思っただけのことである。

なぜ彼が操縦士となったのか。

それは案外単純なことである、機械全般を得意としていたからだだった。

彼は戦闘技術は平凡だけど、機械に天才的な勘を持っていたのだ。

目立たないというのが、本人が気にしていることではあるが。

大体にして、本人がそう思っているだけだった。ちゃんと目立ってる。

他の同期が目立ちすぎるだけで、彼は十分に優秀な学生であるのだ。

彼を見つけて、壊れたガーデンの機関を直し続けて数日が経った。

そのあいだにスコールがオーナーのノグを片付けてガーデンは独立。

白いseedの船がエルオーネを回収していたりしていたらしい。

MD層に潜り込んでいた俺たち修理班には全く関係のない話だった。

数日後、これ以上直すにはまともな工房が必要だ、と結論に至った。

まともな加工が出来る場所と、そもそもその材料が必要なのである。

まとめ役をしていた学園長とスコール、シユウに伝えることにした。

そも、ガーデンには残り人が残っていなかった。

学園長を探し回っていた一般の生徒たちは、放送後直ぐに脱出した。

マスター派の教員も、いつの間にか居なくなっていた。

ガーデンが動き始めた時点で残っていたのはごく少数。

各拠点を必死に防衛していたseedと学園長派の生徒。

それにカドワキ先生や門番のおじさんなど、生徒想いの大人だけだった。

そうになると、ガーデンの動向を決められる人間は限られてくる。

元々最高の立場だった学園長に、学園長派の指揮を執ったシユウ。

その彼らは、スクールに委員長の座を譲り渡していた。

俺は修理班をしてたら、いつの間にか物資の管理もしていた。

修理班と補給班の班長として、重要人物の一人として数えられていた。

多分誰か嫌な大人が、俺に無理やり押し付けただんだと思う。

俺を修理班の班長と呼んだのも、学園長が最初だった気がする。

なんだか、色々押し付けられているようで、若干腹立たしい。

いやいや自分からやっていることだから、と自分を慰めてみる。

「というわけで、これ以上修理はできません」

「そうですか」

修理がこれ以上出来ないと学園長室にいた学園長に伝える。

特に興味もないというか、ごく普通に領かれただけであった。

君たちで解決してくださいといわんばかりの投げやり感である。

「どこまで俺たちに任せる気で？」

「どこまでもですが」

くつそ野郎。なんだこいつ。許せねえぞ、爆発しねえかな。

アイデアの魔女の騎士の割りに、この人本当になんもやる気ねえな！

魔女の騎士だからこそ、何もやらないのかもしれないけども。

……本当、どこまでわざとなんだろう、この人。

Seedを作ったり、スコールたちを魔女暗殺作戦に出したりとかは。

本物の方のアイデアから聞いてのことだと思っただけ。

そこに俺を追加した辺りとかはよく判らないだね。

なんで俺をアイデアの家のみんなの中に参加させたんだろう。

考えれば考えるほどに、よくわかんなくなってきた俺である。

「どうかしましたか」

「……いえ？」

ただ、なんで俺をスコール班に入れたのかなと思ひまして」

「仲がよかったからです」

思わずそのまま口に出して聞いてしまった俺に、予想外の球は、まじすか。それホントでござるかー？これこれー？

そんな風に動揺しきる俺の内面である。表には勿論出さない。

戸惑う俺に、学園長は「ああ」と手を叩いて、言った。

「何か目的があると思つていたのですね。」

よくありませんよ、勝手に邪推してしまうのは」

「う、うつつ」

「初の任務で班長をするスコール。」

その精神的なケアを考えただけの人選ですよ、他意はありません」

あ、あれ。この人、そんな悪い人じゃないのかもしれない。

というか、これに関しては俺の空回りだったのだろうか。

そう思つて、まさか違うよねと学園長に視線で問いかけてみる。

「——スコールの親友である、と。」

そう、聞いていましたからね、それだけの理由です」

誰かから、俺とスコールのことを聞いていたというだけ。

そう言つた学園長は、少しだけ何かを懐かしんでるかの様で。

なんとなく、それ以上のことを聞くのはやめることにした。

「ところで最近はスコールと話していないようですね？」

「い、忙しかったもので」

「副班長なら、班長のケアも仕事のうちですよ」

暗殺任務から碌に話が出来ていないでしょう、と学園長は言う。

俺もそのことは気がついて、気にはなっていたんだけども。

副班長になった記憶はないけど、様子を見に行くとしたらどうか。

色々大変だったろうし、お昼ごはんでも一緒に食べるか。

そう時計を見ながら、俺はスコールの部屋へと向かい始めた。

17

「スコール、居るかい」

「シオン？」

「ああ」

「入ってくれ」

スコールの部屋。ノックをすると、返事が返ってきた。

言われるままに入ると、スコールはガンブレードの手入れをしていた。

……武器の手入れとか、いつからしてないだろう。まあいいか。

「やあ」

「どうした？」

手入れの手を止めて、俺を見てくるスコールに片手をあげ挨拶。

いやあ、あれだよ。俺だったら手入れそのまま続けるよね。

ちゃんと手を止めてくれる辺り、凄く律儀な人だなって思う。

「修理について知らせようと思って。」

学園長には伝えたけど、材料がなくてこれ以上は無理。

今現在だと無理やり止まるのが精いっぱいってところかな」

「そうか。」

「お疲れ様だな」

「劳いの言葉も、とても優しい響きである。」

「嫌な大人と話して荒んだ心が癒されるような心持ちである。」

「うん。」

「それで仕事も一区切りだし、君とお昼ごはん食べようかと思つて」

「そんな時間か」

「チラリと時計と見るスコール。」

「もしかして手入れに時間を忘れていたのか。マジメ過ぎるだろ。」

「健康管理を忘れがちな班長に、軽く苦言を呈すことにする。」

「スコール?」

「仕方ないだろう。中々時間が取れなかつたんだ」

「忙しかつたのも君がそれ大切にしているのも知ってるけど。」

「ほどほどにね」

「ホントにね。体調崩したら元も子もないんだからさ。」

一回体調崩すと癖になるし、その後が余計忙しくなるものだ。
定期的な睡眠と休憩は必須！これ本当に大切なことである。

「次からはな」

「こら」

「いいだろう。」

「それより、早く行かないか？」

「そういう俺に、スコールはなんと話を逸らそうとしてくる。」

話を誤魔化そうとするとは、スコールにしては頑張っているものだ。

まあ、正直へたくそだが努力を認めて乗ってあげようかな。

「そうだね。」

「行こうか、今ならまだ人も少ないだろうし」

「ああ」

俺とスコールは連れ立って食堂に向かった。

一緒に食事を取るなんて、一体何時振りのことだろうか。

そう懐かしくもないはずの記憶に、なんだか遠い憧れを感じる。

食堂に行つて、注文をする。今日の気分は焼き魚である。

食料は人数減少や、早期に対策でまだまだ余裕があつた。

FHに着くまでなら、普通の食堂運営が出来ると予想している。焼き魚定食を軽く平らげていると、人が段々と増えてきた。

埋まってくるテーブルに、知り合いが着たら相席かなと思つた頃。

丁度食堂に来たらしいリノアが、俺たち二人を見つけてきた。

「スコールとシオン！」

相席させてもらつていいかな？」

「どうぞどうぞで」

「ああ」

ちゃんと確認してからリノアは席に着いた。

この子も意外なぐらいにしつかりしていると、この数日で知つた。

やっぱりお嬢様として育てられただけのことはあるのだ。

「ありがと、結構人多いよねガーデンって。」

「これでも人が減つた方なんですよ？」

「ああ」

「前は中庭でパンとかおにぎりとか食べる人もいたからね。」

今は全員こつちで食べてるから」

「そっか、天気の良い日は外で食べたいもんね」

いただきます、と手を合わせて食べ始めるリノア。

俺も、自分の分を片づける。大盛りにしたのは失敗だった。

半分を超えたとき、スコールが余り箸が進んでいないのに気づいた。

「スコール、どうしたの？」

今日はお腹空いてなかった？」

「……いや」

じゃあ、どうしたのだろうか。

特に、嫌いなものが入っているということでもなさそうだし。

微妙に偏食気味だから、俺が多少気を使っていたんだけど。

「体調が悪いとか」

「傷が痛んだだけだ」

あーら。最近戦闘が多かったからねえ。

「傷？」

治療はしたんだよね」

「遅れたから後が残ったんだ」

あーそつか。余裕ぶっこいてると回復遅れるよねえ。

回復魔法も治療が遅れると、後まで残る傷になったりするし。

魔法とは言え、そこまで万能なものでもないから困り者である。

「大丈夫？」

「時々痛むだけだ」

ふうん、お大事にと。

本人が大丈夫なら大丈夫なんだろうと俺が話題を切ることにした。

あんまり気を使い過ぎるのも、逆に面倒くさく思わせてしまう。

リノアの食器がカチャリと音を立てて、俺はそつちを向いた。

すると、リノアの顔からは表情が消えていた。

顔色も、元々白い肌が薄く青色に染まったような、暗い色である。

「リノアもどうしたの」

「……………んの傷」

聞こえずに聞き返す俺に、リノアは強い口調でもう一度繰り返す。

「え？」

「拷問の、傷。」

「スコールが受けたの」

「え」

頭が真っ白になった。

そういえば、俺はD地区収容所でスコールが拷問を受けたこと。

そのことを俺は知っても聞いてもいた。判つてすらいた。

「そつ……か。拷問、か」

「そう」

「スコール、大丈夫なの？」

そう。判つていたのだ。俺は、あの時もずっと知つてたのだ。

「ああ、問題はない。」

受けてからケアルをかけるまで長かったから完治してないだけだ。

カドワキ先生も治ると言っている」

「良かった」

「良くないよ」

俺の言葉に追つて、冷たくリノアがつぶやいた。

そうだよな、良くないよな。本当は、ずっと判つてたんだ。

謝らなきや。俺は君が犠牲になるってわかつて、それを選んだ。

「そう、だよね」

「シオン」

「スコール、ごめん。あの時、俺助けられなかった。」

任務だつて思つて、邪魔しちやいけないやつて」

俺は調子に乗つていたんだ。

未来がわかつてゐるなら、原作通りに進ませるなら仕方ないつて。

D地区収容所に捕まれば、拷問を受けることは知つていたのに。

血の気がどんどん引いていく。何も上手く行つてない。

何が原作知識だ。ただ神様気取りで、上から目線なだけじゃないか。

吐き気すらする。俺の気持ち悪い調子に乗つた馬鹿さ加減に。

しかし、スコールは何のことか判らないといった顔である。

「いつの話だ」

「暗殺の時。

俺、みんなが捕まるの見てることしか出来なくて」

原作通りだから、それでいいやつて思つてたんだ。

「シオン」

「後で助ければいいやつて、思つてた。

ごめん。君が辛い思いすることになるのも判つてて、なのに」

判つてたのに。俺は何もしなかつたんだ。

俺は君の親友面して、何も判つていなかつたんだ。

君の事を、俺はよかれと思って流れに任せてしまったんだ。

「落ち着けシオン。」

あの時点でお前が介入するタイミングも要素もなかった。

救出も成功している。感謝こそすれど、謝まられる必要は全くない」

「でも」

違うんだ。俺は感謝されるようなことなんて一つもしてない。

俺はきつと、変えようと思っていたのなら変えられたのである。

俺は君を見捨てようとしていたんだ。原作知識の名の下に。

だけど、スコールは俺を許そうとする。

そりやそうだ。だってスコールは俺が、知っていたことを知らない。

君が何をされるかわかっていたことを、スコールは知らない。

「でもじゃない」

「だって」

「だってでもない」

「……」

「お願いだから、そんな顔をするな」

言葉にならない。俺が悪いのに、俺のせいじゃないという。

謝りたい。本当のことを全部話して、謝ってしまいたい。でも。信じられるわけがない。話せるわけがない。飲み込むしか、ない。

「シオン」

「……リノア」

リノアが声をかけてきた。その表情は、先ほどまでとは違う。

絶対零度の視線ではなく、俺を責めるような声色ではなく。

ただ優しくそうに、申し訳なさそうに、俺のことを思いやる。

「ごめん」

君が気にすると判ってて言っちゃった。本当にごめん」

「いや、俺のせいだし。」

ありがとう気がつかせてくれて」

本当に、リノアが言わなかったら俺はずっと気がつかなかった。

「そんなこと、ないよ。」

今みんながここに居るのは君のお陰だもん。

だから、ごめん」

「……うん」

ああ。俺はこの世界を甘く見ていた。軍隊もseedも甘く見ていた。

トラビアガーデンを救うためだと、俺はスコールを見捨てた。死なないし、大丈夫だろうと思っていた。原作通りだからと。

それなのに、親友に目の前で痛がられるだけで辛いものだなんて。本当に、俺は君の親友でいいのかな。

俺は君に許されてしまっているのかな。断罪はいらぬのかな。

俺はこの世界と、どうやって向き合っていけばよかったのかな。

後悔は先にはたたず。後に残るのは一体なんだったのだろう。

ガーデンの進行方向に、人口建造物が見えてきたと連絡がきた。フィッツシャーマンズ・ホライズンだろう、特定したのはゼル。

方角やら速度からを計算すると、ほぼ間違いないと言っていた。

あそこはエスタの技術者たちが独立して出来た町だ。

きつと修復素材もあるだろうとニードア息を荒くして言っていた。

若干きもいなくて思ったのは、ここだけの話である。

近接するのは明日の昼ごろ。

修理によつて止まれるようになったガーデンを直前で停止する。

そして、学園長をスクールが護衛して交渉を行う手筈である。

最初は、スクールを交渉にいかせると学園長が言い出した。

勿論、そんな責任逃れが認められるわけもない。絶対にない。

命令ですなどと言いつつ前に、シユウと二人で力尽くの説得をした。

そんなこんなで交渉事である。

引き渡すことが出来る物資と必要な物資を考え出す必要がある。

正直、こういうのは苦手だけでも、担当なのでしようがない。

……なんで苦手なのに担当してるんだらうか。

そんな素朴な疑問は、学園長と一緒に海の藻屑と変わればいい。

というか変えよう。あのおっさんを鮫かなにかの餌にしよう。

少なくとも必要なのは食料の補充とガーデンの修復素材だ。

見積もりだけだと案外高いものでもないけれども。

加工費やら何やらで、残念ながら足を見られてしまう可能性もある。

もし、無茶なことを言われてしまったら。

そのときは、Seedが戦闘集団というあたりを強調せざるを得ない。

恐喝じゃないよ。本当だよ。そうスコールには言っておいた。

「とはいえそんなに都合のいいものはないんだよな」

傭兵だけあつてガーデンは結構金を持つている。

しかし今後を考えると、そんなに湯水の如くだすわけにはいかない。

何せ、当分の間は依頼というまともな収入がないわけである。

正当な値段でできてくれると面倒くさくなくていいなあ。

そんな些細な願いぐらいは、許してもらいたいと思うぐらいには。

俺は流石に疲れていたのであった。大体悪い大人のせいだ。

無事にF・Hにぶつかることなくガーデンは停止した。

交渉の護衛として、スコールはセルフィとアーヴァインを指名。

俺を含めた、後のメンバーは学内に待機することになった。

一応警戒態勢を整えるように、とシユウに依頼だけをして。

俺は交渉後の、物資の搬入の手配だけを先にしておくことにした。

交渉の結果はともかく、物資の搬入は必要事項だからだ。

どんなに対価が高くなろうと、物資がないと何も出来ない。

ここからまともな移動も出来ないので、選択肢がそもそもないのだ。

後から慌てるよりはと、先に人員の手配をしておいた。

数時間たって、みんなは無事に戻ってきた。

学園長も無事である。いや、特に思うことはないんだけども。

何かあったらそれは問題だし、無事に戻ってきて何よりである。

交渉は問題なくいったらしい。食料は正當な値段での販売。

ガーデンの修復に至っては、人員の貸し出しまでやった挙句。

人件費抜きで、材料費だけでもいいらしい。正気だろうか。

「平和主義らしいですよ」と日和見主義のおっさんが言う。

暴力を振るう者にはさっさと出て行ってほしいそうです、と。

そういった学園長は異様に都合のいい契約書を見せてきた。

この人何したの？とスコールを見る。

すると、別に特にはなにもしていないとばかりに首を振った。

嘘でしょう。こんなの武力恐喝でもなければ無理でしょう。

「武力を持った集団と関り合いを持ちたくないらしい」

そういうスコールも、何とというか微妙な表情をしていた。

スコールがおかしくなかったというなら、そうなんだろうけど。

原作でもこんな都合のいい契約だったのかなと想いを馳せる。

「とにかく、後は任せましたよ」

「搬入と修復のための派遣引き受けを頼む」

「了解」

搬入の指示をキステイスとゼルに。

修復の受け入れをセルフィとアーヴァイン、修復をニードに任せて。

俺は物資計画やらの事務書類をサクサクと済ませて行く。

現状、俺以上の立場がスクールと学園長しかない。

その為必然的に、書類検閲の実際のトップは俺ということになる。なんて怖い状況だと慄きながら各部署と打ち合わせをしていく。

俺の統括になっている部署は事務・図書室・食堂・医務室。

修理班と補給班は事務の下の組織になっていて、俺の直下だ。

俺は実質、マスターの後釜をついた位置合いになっている。

残ってくれた事務方の皆さんには、本当にお世話になっている。

皆さんには以前の仕事を、優先度の高い順に実行をお願いした。

それでも毎日忙しいようなので、今後人員を増やす必要があるだろう。

バラムに避難しているはずの人たちが戻ってきてくれる。

そんな甘い幻想は叶えば良いねというレベル。現実は無理だろう。

今は、どうあがいても現状維持が精いっぱいだった。

図書室には当分新刊の補充は我慢してもらうことになった。

ガーデンが動けるようになって、バラムに行けるようになったら。

業者に連絡してしままでの分ごと割高で買い取ろうと思う。

食堂が一番気を使う。

もしもを思うと身体が震えるが、食堂のおばちゃんたちはプロである。

当分の食堂計画書を即座に持ってきて、直ぐに対応してくれた。

医務室には元々ある程度の在庫があった。

若干包帯が少なくなっていたので、今後を考えてかなりの量を買った。使わないならそれに越したことはない。カドワキ先生も同意見だった。そして、ガーデン修復後の話である。

細かく考えるのであれば、トラビアガーデンの無事を確認すること。

バラムに避難したはずの生徒たちを回収することなど、色々ある。

しかしそれよりも大事なものは、今後の魔女への対応であった。

F・Hに着いてから3日目、ガルバディア軍が来たそうだ。

駅長に対してエルオーネの身柄を要求、さもなくば街を焼き尽くす。

機動兵器を引き連れて、そういう脅しを掛けてきたということだ。

これは、F・Hに行っていたSeedによって難なく撃退されたが。

恐らく、他の街でも同様の要求をしているだろうと学園長が言う。

珍しく仕事をした学園長に、俺とシユウは若干ではなく驚いた。

バラム・ガーデンを守る為にも。

魔女の討伐をする必要があるだろうと、意見は直ぐに統一された。

その方針の上で今後を考えれば、戦力が足りない問題がある。

何より、ミサイル発射の誤情報でガーデンを降りた生徒が痛い。いや、確実に俺のせいなんだけど。それにしても痛い。

結構な割合の生徒が避難をしていたようで、正直大ダメージである。

それとは別に、バラム・ガーデン側の戦闘能力を持った集団。

そんなものは、現状、やはりトラビア・ガーデンしかありえない。

ただ、そちらも安否をまだ確認できていないのが問題である。

トラビア・ガーデンの安否確認を行い、人員を借りること。

そしてバラムに行って生徒を回収することが復興後の最初の目標だろう。

トラビア・ガーデンにおいては重火器を借りることも考慮したい。

ガーデン全体の任務として魔女討伐を発令。

総指揮はスコール・レオンハート。改めて、委員長を拝命である。

そもそも、指揮を取れる人材がそう多くもないので必然だった。

名目3択の実質1択で、学園長かシユウかスコール。

学園長は指揮能力がないのでお飾りとしての意味しかない。

シユウは生徒全体の統括をしているため、これ以上の担当は難しい。

思わずスコールを見てしまったことは俺の責任ではないはずだ。

別に一人で仕事をするわけではないだろう。

そうやってスコールがあっさり引き受けてくれたので、直ぐ決まった。

俺は、今までと同じくスコールの補佐をやっていくだけである。

確かに防衛の責任はシュウが、補給と事務は俺がやるのだ。

正直体制としては今までと何も変わらないよね。

そう、シュウがこぼしたのに俺は目を逸らすことしか出来なかった。

そして、学園長がガーデン全体に校内放送をする。

これからの任務は魔女討伐であること。

委員長はスコール、補給班は俺、生徒の統制はシュウが行うこと。

ガーデンの運営自体は今まで通り職員と一部のSeedが行うこと。

これからがseedの本当の戦いです、という言葉で放送は締めくくられた。

「コンサート?」

「そうコンサート!」

事務室で作業中のところ、セルフィに相談があるといわれ、着いていった先には、なにやらステージ的なものがある。

とはいっても、パイプ組みの割と簡単な造りのものだけ。

「ほら学園祭が出来なくなつたでしょ。」

だから」

そういえば、セルフィは学園祭の委員をしていたっけ。

更によえば原作でも、そんなイベントがあつたことを思い出す。何時の間に準備したのだろうか。俺の知らない間に。

とにかく、この騒ぎでこの人数で文化祭を開けはしない。

だけど、この状況だからこそ、気分だけでも明るくしたい。

だから、せめて俺たちでコンサートだけはやりたいという。

既にシユウには了解をとり、スコールにはサプライズ。ステージはF・Hの技師さんにお願ひしていたそうだ。

廃材で作ったらしいが、見た目はなかなかのものである。

確かりノアとスコールがちよつといい雰囲気になるのだったか。親友が照れる様を想像して、微かに微笑ましい気持ちになる。

セルフィは、残った俺に一応了解を取りに来たとのことだった。
「いいんじゃない?」

俺は何をすればいいの?」

「うーんとね、演奏は4人で出来る曲選んだから。」

私、アーヴァイン、ゼルとキステイスで十分なんだよね」

シオンは忙しそうだから、とセルフィは笑う。

んー、そこらへんは原作通りなのか。それともはぶられたのか。でも、折角やるのなら俺も何かさせてもらいたいんだけども。

「俺とリノアは?」

「うんとね」

聞き返した俺にセルフィは少し間を開けてから、

「実はリハーサルもやろうと思って。」

その時はスコールだけをお客さんにしようと思うのね」

「うん」

「だから、シオンには当日会場までスコールを連れてきて欲しいの」

……俺なのか。リノアじゃないのか。

なんとというか、配役的にそういうのはリノアだと思っていたが。

「嫌?」

「いや、別に嫌じゃないけど。」

リノアは?」

「リノアには会場でのお出迎えをお願いしてるの。」

リノアの方がそういうの得意かなって思ってる」

確かにそれは俺がやるとか似合わない。

リノアが連れてきたのに待ってるのが俺とか、嬉しくないだろう。

それならまだ、逆の役割の方がじっくり来るかもしれない。

「それで、お願いしていい?」

「いいよ。」

「それで、いつやる予定なの?」

「実は今日なんだよね。」

本番は明日なんだけど」

「早いなー!」と思わず突っ込む。え、なんでそれ俺知らないの。

本番やるってことは、もう既にある程度情報撒いたってことでしょ。

そこまで俺、仕事に集中していた記憶はないんだけどな。

だから練習も、もう終わってるのよ、とセルフィは笑う。

随分手際がいいことで。俺の仕事が変わって貰いたいぐらいだ。

ともかく、了承する。別に断る理由なんて一つもなかった。

「ありがと。」

それとね、話はそれだけじゃなくて」

「なに?」

もうこの際、何を言われても驚かない自信がある。

今日やることを内緒にされてた時点で、驚きポイント満点だ。

そう思ってた俺に、セルフィは両手を合わせてこういった。

「疑ってて、ごめん」

——それは流石に、想定はしていなかった。

疑われることは判っていたけど、謝られるとは思ってなかった。

そも、どうしてこう、謝るまでに至ったのかが判らない。

「えと。」

「なんで？」

上手く言葉にならない。けど、聞きたいのはどうしてか。

謝るってことは、俺を信用することに決めたのと、同じことだ。

今現在、セルフイを信用させることなんて出来てないと思う。

そう思っって口に出した曖昧な問いかけに、セルフイは。

「リノアからね。」

スコールの拷問の傷の話、聞いたの」

「……ああ」

あの食堂の話か。あれは、俺も動転してしまっただけだ。

変なことを口走らないという、最低限の理性だけは残ってた。

それで。その話が、一体どうかしたのだろうか。

「正直ね。今も信用はできないと思ってるの。」

キミ、色んなこと知ってるし、ちよっとおかしいもの」

「……うん」

それは、そうだ。

俺だって、随分都合のいい行動ばかりしている自覚はある。

幾ら理由をつけていたって、誤魔化しきれるはずもない。

でもね、リノアの話聞いて思ったの。セルフィは俺に告げる。「スコールを心配してるのは、ホントでしょ。」

私たちの足を引っ張ろうとしてるわけではないじゃない」

「その積もり、だよ」

「それに。」

「この数日間ガーデンの為に一生懸命になってるの、見てたよ」

だから、とセルフィは小さく区切った。

「信用は、まだしきれないけど。」

疑ってたことについては、謝らなきゃと思ったの」

「そんなの、別にいいのに」

「私の気の問題だよ。」

謝らないと、申し訳ないなって」

これからも、宜しくね。そういつて差し出されたのは右手。

果たして、俺はこの手を掴んで良いものなのかと、少し悩んで。

色々なものを振り切るように、俺はその手を掴んだ。

夕方頃。

シユウの作った防衛案を読み終わった頃に、セルフイは部屋に来た。「スコールを呼びにいつて」と微笑むセルフイに、俺は頷く。

二人揃って、スコールの部屋の前に行く。

セルフイはじゃあお願いねと言って、先に会場に向かった。

その後ろ姿を見送る。多少の時間差は必要だろうから。

改めて、ノックをしようと振り返ったとき。

ガラリと扉が開いて、部屋の中からスコールが出てきた。

いつもよりラフな私服で、少し力を抜いていたような感じである。

「シオン？」

「何か用か？」

「あ、うん。」

「ちよつと来て欲しいんだけど、何処か行くの？」

「だとすると、ちよつと予定が大幅に狂ってしまうんだけど。」

「しかし、スコールは首を振ってそうじゃない、と答える。」

「じゃあどういふこと、と促す俺に、静かな声でスコールが答える。」

「シオンの声が聞こえたから。」

それで、どこに行けばいいんだ？」

「着いてきてよ」

素直に後ろをついてきながら、仕事かと問いかけてくる。

違うよ、仕事じゃないから安心して、と笑いながら伝えると。

忙しかったのだろうか、雰囲気安らいだのがわかった。

こつちこつち、とゆつくりとした歩調で俺は案内する。

途中すれ違ったシユウがクスクス笑うのを、手を振り止める。

サプライズなんだから、会場までは内緒にしなきゃ。

ガーデンを出てF・Hの線路に出ると、会場が見えてきた。

ライトアップされた会場に、スコールは「あれか？」と呟いた。

どうやら、準備は出来ているようだ。みんな揃っている。

そうだよと俺も小さく言うのと、スコールの腕を掴んで走る。

いきなりだったのにも関わらず、スコールのバランスは崩れない。

追い越すことも振り払うこともなく、あっさりとついてきた。

そして、ステージ前についた俺たちを、四人が出迎える。

「ようっ！そ〜！」

今日はコンサートに来てくれてありがとう〜！」

「リハーサルだけどね〜」

セルフィの出迎えの言葉に、アーヴァインが茶々を入れる。

「私たち、学園祭代わりにコンサートをすることに決めました！」

今日のリハーサルはガーデンの若き指導者スコールとっ！

みんなの無事の再開を祝ってお送りしますっ！」

「セルフィプロデュースバンドの素敵演奏よ〜」

「一生懸命練習したので聞いてくれよ〜」

そういつてセルフィたち四人は光の中で、演奏を始めた。

明るいアイリッシュが、夕暮れの薄闇の中に響き渡る。

技術的には拙かったけれど、それでもすごく素敵に思えた。

「すごいな」

「でしょ。」

俺も今日知ったんだけど、みんな練習してたんだって」

スコールが呟く。

ステージの光に照らされた彼の横顔は、なんだかこう。

安らぎのようなものに満ちて、非常に穏やかな表情だった。

スコールの表情をみて、俺は心の底から安堵する。

Seed試験があつてから、こんな表情は久しぶりに見た気がする。

こんな表情ができるなら、きつと全てが上手くいくと思えた。

拷問を受けたり、委員長とされたり。

色々なことがあつて、心休まる時間なんてなかっただろう。

それが凄く嬉しくて、俺は、セルフイに凄く感謝した。

20

「ねえ、スコールは」

「ん？」

「スコールは大変じゃなかった？」

なんとなく。素直に聞いてみたかった。

俺の突然の質問に、スコールは少し考えて込んでから答えた。

「そう、だな。」

「ここ最近、忙しかったように思う」

「お疲れ様、だね」

本当に。なんでスコールだけこんな大変なのかな。

他のみんなが大変じゃないとはいわないけど、それでも。

なんでこんなに多くのものを背負わなきゃいけないんだろう。

スコールは少し口ごもってから、それでもないと答える。

それは、相槌ではなく、明確な意思がこめられた言葉に思え。

どうして、と視線で促すと、ふいとその目を逸らされた。

「守りたいものがたくさんあったから」

「守りたいもの？」

なんだろう。スコールが守りたいものって。

君にとって、大事なものができたのならよかったけども。

それを背負いこむことで、負担に思ってはいけない。

「ああ」

「聞いていい？」

「……言うなよ？」

「勿論」

コンサートのステージから少しだけ離れ。

声が届かないぐらいの距離を開けて、俺は彼に再度尋ねる。

何を聞かせてくれるのだろうか、少し期待を持ちながら。

「それで、守りたいものって？」

「……そうだな。」

まず一番は、ガーデンだ」

ガーデン。バラム・ガーデンのこと、と思つて良いよね。

「ガーデン、そのもの？」

「ああ。」

「ここは、俺にとって唯一の帰る場所、だと思おう。」

「無くなったら、俺はどこに帰ればいいのか判らない」

「そっか。ここは、君にとっての故郷足りえる場所なんだね。」

「ちゃんと、思い入れがあったことに少しだけでなく安堵する。」

「自分の場所と思えるところは必要だ。どんな所であつても。」

「そういう俺も、ガーデンが居場所であることは変わらない。」

「たとえ疑われても、危険な目にあつても、ここにいと決めたい。」

「だから、スコールも同じように思つていてくれて、正直嬉しい。」

「俺も、そっかよ」

「このガーデンにはそういうやつが結構いるはずだ。」

「だから俺は守りたかつた」

「そっか。」

「スコールは優しいね」

「いい子だなあ、本当に。」

「この子が孤高の人だと思われているのが、時折勿体無く感じる。」

ちゃんと話せば、どれだけいい奴かってことが判るというのに。

一曲目が終わって次の曲が始まった。

練習時間の都合上、3曲しか演奏できないと聞いている。

むしろ、この短期間でよくそれだけ準備したという話である。

「他には何が守りたかったの?」

「……………だ」

「え?」

「みんな、だ」

聞き取れず、聞き返した俺に。

耳を疑うような答えが返ってくる。みんなって、人のことだよね。

スコールは、不確定名“みんな”を大切に思っていたのか。

「みんなって、ガーデンのみんな?」

「それもある」

「リノアも含むよね」

「ああ」

それは、きっと。スコールの大切な人たちということだ。

誰とも深い関係になりたがらず、孤独であろうとしたスコールが。

他の誰かを、俺たちのことを大切だといっているのである。

レインを、ママ先生を、エルオーネを。

大切な人たち全てから置き去りにされて、殻に閉じこもった子が。それでも、大切な人たちを守りたい。そう口に出したのだ。

「……スコールの大切な人たち、だよね」

「……そうかも知れないな」

だから、いうなよとスコールは照れたように顔を逸らす。

誰にも言わないよ。こんなこと、俺の大事な宝物決定である。

あの閉じこもっていた子どもが、ここまで成長していた。

スコールがここまで心を開いてくれたこと。

微かに涙が出そうになって、それを笑って誤魔化して。

代わりに俺も、いつもなら言わないことを口に出すことにした。

「……俺も、スコールのこと。」

大切だと、守りたいと思ってるからね」

それこそ。危険を覚悟でこの道に踏み入るぐらいには。

隣に立つスコールは、ステージから目を逸らし俺をチラリと見て。

直ぐに目を逸らし、ステージの前へ歩いて行ってしまった。

「ちよつスコール！」

「コンサートに集中しよう」

呼びかける俺にも、振り返ってはくれない。

怒らせたわけじゃないだろうけど、呆れたのか照れたのか。

どうやら、これ以上は話すつもりがない様子であった。

2曲目が終わると、ステージにリノアが現れた。

ステージ裏の広場に簡単なお祝いの食事を用意してあるという。

その後、ちよつとした宴会が始まった。鬱屈晴らしだ。

ワインがあつたが、飲んだキステイスがスコールに絡んだり。

リノアが笑い上戸でそれをみて大爆笑していたり。

アーヴァインが泣き上戸で隅っこで愚痴りだしたりと騒がしい。

セルフィの合図で始めた、最後の締めの一曲は。

アルコールが入っていて、少しグダグダな演奏であつたけど。

それを、ただ上手なだけであるより好まないと、俺は思った。

そしてその曲の間にスコールとリノアが話を始めて。

曲が終わつても続いていたので、気を使って先に帰ることにした。

壊れたキステイスたちを引っぱって、ガーデンに戻る。

アルコールが入って楽しくなっているリノア。ちよつと困った、それでも嫌そうでない楽しそうな顔のスコール。これはきつと恋愛に発展する。そんな予感がするものだった。

コンサートは結果として大成功した。

もともと肩肘はった計画でもない、みんなが楽しめれば十分だ。

セルフィが頑張りもあり、かなりの盛り上がりを見せていた。

その次の日。

事務員さんたちと打ち合わせしていると、修復完了の報告が来た。

一週間もたたずに、これだけの建造物を直すとは恐れ入る。

報告に来たニーダに、ガーデン運転手を依頼する。

以前より、彼に任せるとスコールたちとは話がついていた。

ニーダは驚いていたが、確かに俺しかいないと直ぐ引き受けてくれた。

ガーデンが動くようになったからには、魔女討伐作戦開始である。

以前の打ち合わせと同じように、まずはバラムへ向かうことにした。

避難している生徒の回収と、それに合わせ物資を購入する為である。

ガーデンの最初の機動。

スコールの命令の元、通信士として選ばれたSeedが放送を行う。対振動体勢の準備や火元の点検を、順々と指示。一回目は慎重に。そして最後の放送が終わる。

ニードの操縦によって、ガーデンは少しずつ海を動き始めた。だんだんとスピードを上げて、海の上をホバリングしていく。目標はバラム。到着はおよそ5時間前後と推測されていた。バラムを目指して数時間。

あともう少しとなったときに、俺は操縦室に呼び出された。

ガルバディア・ガーデンが、先にバラムについていたらしい。

「あれも動けたんだねえ……」

知っていた俺としては、先回りされたことに腹立つばかりである。F・Hと同じようにエルオーネを探しているのか。

それともバラムガーデン生徒を回収させないようになっているのか。

「目標はエルオーネとガーデン生徒の両方、かな？」

「だろうな」

ま、どちらかということもないだろう。スコールも同意見らしい。

彼も呼び出されたらしく、何故かガンブレードを持ち出してきていた。

もしかして、自室で寝てたのかな？ 若干寝癖が残っている。

「あれって魔女が乗ってるんだよね？」

「本拠地にするという話だったな」

背中を嫌な汗が走る。流石に今現在で戦闘にはならないと思いたいが。

「見つけられてはないんだよね？」

「ええ、かなりの倍率の望遠鏡で確認しています。」

海上でどこから来るかも判らない相手を見つけられる距離ではありません」

警戒する *seed* が報告をしてから、バラムガーデンは静止させてある。

戦闘を始めたら、人数の差で蹴散らされるのは間違いないと断言できる。

さて、じゃあどうするかなんだけど。早速一手目から躓いたわけで。

「どうする？」

「どうしましょう？」

「うーん」

打つ手がない。先にトラビアに行くべきだろうか？

だが戦力把握的にも戦闘可能なバラムの生徒数は先に知っておきたい。

物資も含めて、後から調整するのは大変であるのだが、どうかな。

「学園長やシユウはどう思います?」

「防衛班としては現在の接触は拒否したいわ」

それは補給班としても単純に同意見である。

トラビアを先にすると補給や組織化で混乱するし、それは避けたい。

出来れば、先にバラムに到着しておきたいのはこっちも同じだが。

「私は勝てない戦いはして欲しくないですねえ。」

それ以外は専門外なので言えませんが」

判つてはいたけど、解決策はなかなかでない。

これは、トラビアに先に行くことの検討を始めた方がいいか。

「トラビアが無事かによるな」

「F・Hで確認できれば良かったんだけどね」

「孤島ではありませんが情報は入りませんかからね」

判らないことばかりでなかなか決まらない。

情報が足りないとはこんなに変なものなんだ、と今更思い知る。

コレに至っては、原作知識も何の役にも立ちしなかった。

「それにしてもガルバディアガーデンまで動くとはな」

「魔女との決戦はガーデン同士の戦争後になりそうだね」

「そうですねえ」

「そうねえ」

それを聞いた通信士が身震いをした。君もSeedだろうに。そんな未来予想図を描いていると、物見部屋からの通信がきた。目配せをして、早速繋げてもらう。代表は俺が答える。

「こちら操縦室です、どうぞ」

「ほ、報告です！」

「はい、なんでしよう」

「バラムよりガルバディアガーデンが移動を始めました！」

まだ不慣れな報告を受けて、俺たちはびきつと固まる。

まさか、気付かれた。そういう思いが部屋中を支配したのだ。

通信機に乗り出すように、シユウが口早に問いかける。

「方角は？」

まさかこつちに？」

「いえ、西に向かつております。

こちらに向かうようすはありません」

報告に高まっていた緊張が一気に収まる。

なんだよ、驚かせやがって。今すぐ戦争かと思つたじゃん。

「バラムの様子はどうですか？」

「現在ガルバディア籍の輸送艦が残っています」

「街の様子は判りますか？」

「いえ、距離が足りません」

ん、まあそうか。結構距離がギリギリだからなあ。

街の様子までは見られなくても仕方がない、といった所か。

ガーデンの警戒を続けるように言つて、通信を切らせる。

通信士が通信を切る。

どうします、と無言でスコール、学園長、シュウに目をやる。

といつても、答えはもう決まっているようなものだけでも。

「行くしかないわね」

「そうだな」

「だよね」

「任せましょう」

満場一致というには保留が一だけど、大体全員が同意見だ。

「ニーダ、お願いできますか？」

「了解」

静かに会議を聞いていたニーダが操縦桿を握りこみ。

ガーデンはゆつくりと動き始めた。微かな振動が身体を揺らす。

目標は占領されたバラム。果たして生徒たちは無事だろうか。

21

輸送艦に気付かれぬよう、遠回りをして死角となる場所に回る。

ニーダが着陸地点として選んだのは炎の洞窟近くの丘だった。

元の位置とは、大分離れた場所である。バラムからは見えない。

バラムにおける目標はバラムガーデン生徒の回収と物資補給。

そのためには、ガルバディア軍の輸送艦を追い払う必要があった。

近づかなければ物資の輸送もしようがないわけである。

輸送といえば、さて、ガルバディアも何を輸送しているのか。

バラムに運ぶものもないだろうし、その逆だと推測されるわけで。

生徒たちが捕まっていないことを、当事者の俺は祈るしかない。

輸送艦を追い払い、バラムの占領を解除する為に。

原作通り、ガーデンで最強の戦力であるスコール班を派遣する。

これは俺の提案ではなく、当然の流れであるといえた。

スコールはゼルとキステイスを連れて侵入を開始した。

バラム育ちのゼルがいた方が、何かと都合がいいはずである。潜入任務にも向いているし、何より安定して強い。

数時間ほど経ってから、ゼルが1人で帰ってきた。

避難した生徒たちは、バラム市民に受け入れられたらしい。

バラム政府は空き家などを提供し住居と生活を保障してくれた。

しかし3日前。ガルバディア・ガーデンが輸送艦を伴い、来襲。

ガルバディア軍司令官は街の破壊こそしないものの、街を封鎖した。

それと同時にバラム・ガーデンの生徒たちに降伏勧告をした。

降伏をし、ガルバディアの民となれば通常の国民と同様に扱おう。

その勧告に半数ぐらいの生徒が従い、輸送艦に乗り込んだ。

従わなかった半数も捕まったりすることなく、避難を続けている。

スコールたちは、輸送艦を侵攻するかどうかを悩んだらしい。

乗った生徒は初等部以下が多く戦力にはならないと判断。

戦争に巻き込まれないならその方がいい、と見逃すことにした。

そして風神・雷神を撃退して、輸送艦を撤退させた。

「つまり」

「専門部を中心に半数が戻ってくるんだね」

「そういうことだぜ」

全体的には、みんな無事ということだろうか。

何よりといって差し支えはないが、引つかかる所もなくはない。

引つかかるというか、何で、という部分なただけども。

ま、それは後から詳しく聞けばいい。まずするべきことは。

「ありがとう、お疲れ様」

「スコールがガーデンごと迎えに来て欲しいってさ」

「判った。」

ニーダ、移動の準備をお願いします」

ここで考えるよりも、色々なことを進めなければならない。

聞きたいことは、受け入れ作業と同時に進んでも問題ないだろう。

バラム・ガーデンがバラムに着くまで、時間は掛からなかった。

ガーデンを近づけると、町から人が近づいてきているのが見えた。

生徒の把握で入り口にシュウたちがいるが、まだ受け入れは出来ない。

そう思って生徒たちなら一度止めようと、ゼルを連れて先に降る。

来ていたのは代表でキステイスと、数名の生徒たちだった。

現在残った生徒たちに、ガーデンに移らせる用意を進めさせている。

その連絡で、先にガーデンに戻ってきたらしい。ありがたい。受け入れの手筈はシユウが担当していることを伝える。

キステイスは、準備出来次第行かせると、打ち合わせしに行つた。みんな仕事熱心で何よりである。そのやる気を分けて欲しかった。そして受け入れが始まつた。

元々緊急避難だつたからか、殆どが大した荷物をもつていない。着の身着のままといった状況での避難であつたらしかつた。

確認作業は、最初はID照合等も行われていたが。

人数が予想よりも多く、名前と所属を確認するだけで終わつた。

ちよつと不安だが、そもそも顔見知りの方が多い。大丈夫だろう。

大体1時間程で数百人の受け入れが行われ、大分騒がしくなつた。

受け入れた生徒が自室に戻り一息つく間、名簿を元に戦力を確認する。

組織化をし防衛案を練り、補給案を作り出さなくてはいけない。

ガーデン同士の戦いに向けて、俺たちは必死に分析をしていた。

受け入れが終了してから1時間。

生徒たちがある程度落ち着いてから、今度も校内放送が行われた。

まずは学園長による、前に行われた放送と同じものである。

これからの魔女討伐。

スコールとシユウと俺が実際の指揮を取っていくこと。

トラビアとの協力体制をこれからは取っていききたいということ。

そしてそれからスコールの演説が行われた。

これは seed の、俺たちの居場所であるガーデンを守るための戦い。

みんな出来れば協力をして欲しい、スコールはそうみんなに告げた。

スコールをよく知らない人にとっては、意外なものだったようだ。

確かに内面を知らない人は驚くかな、とちよつと優越感に浸る。

「トラビアガーデンは無事、か」

「ああ」

セルフィはゼルに伝えられた時、よかった、と叫んだらしい。

それもそうだ、彼女にとっては、あそこそが故郷なのである。

基地から放たれたミサイルを見て、顔色を失っていたのだから。

バラムから得ることが出来たミサイルの着弾結果について。

俺とセルフィが爆破したと思っていたミサイル基地。

あの後、直ぐに目覚めた司令官によって自爆を解除されたらしい。基地の区画で区切られたシステムで、入り口と居住区が爆破。

バラム・ガーデン分の発射装置も爆破後、解除できたようである。

その結果、トラビア・ガーデン分だけ残っていたとのことだ。

自爆が解除されると、激高した兵士たちが即座にミサイルを発射。

目標変更には気づかず、トラビアへのミサイルは海に落ちたらしい。

どちらにせよ、もうミサイル基地としては使えないという。

俺たちの任務はちよつと実行しきれていなかったけれど。

結果的には、期待通りの効果を発揮したというわけだ。

多くの人の命が助かったことに、素直によかったと思えた。

「じゃあ次の目的地はトラビアだね」

「そうだな」

頷くスコールに、俺は安堵のため息をつく。

これで今後の目標は固まったわけだし、俺の介入は成功した訳だ。

本番のガーデン同士の戦争に意識を向けて行かなければならない。

「んでスコール」

「なんだ？」

「バラム侵攻について疑問があるんだけど」

聞きたいことはいくつもあった。

まずは、原作知識と現実のすり合わせをしなければならぬし。

それ以外にも、納得いつていない部分は残っている。

「こちらにも報告がある」

「纏めてあるんだ？」

「学園長とシユウには済ませてきた」

そうか。そっちの二人にも伝えないといけないもんね。

報告があるならまずそちらを聞くべきだろう。

俺が聞きたいことが、その中に含まれているかもしれない。

「ゼルが報告したと思うが」

「生徒たちへの降伏勧告でしょ。」

「なんで初等部ばかり保護されてるの」

「ああ。」

「これは直接話をしようと思っていた」

そう、降伏勧告はよく判らなかつた。何かがおかしい。

司令官がそこまで Se ed 候補生たちに優しく振舞う理由が判らない。

それこそ、自国民として扱うなんて、破格ともいつていい。仮に、原作通りサイファーが司令官だとしても。

サイファーが考え付くというか、やりそうなことではないだろう。あの彼が、そんな直接的じゃない手段を取るとも思えない。

それに、初等部の子達を回収するだけで満足するのもおかしい。言葉通りに捉えれば、ガルバディアに利する行動ではないし。

それ以上に、それをスコールたちが見逃したのも、何処か変だ。何せ戦力にならない子供たちを保護してくれるというのだ。

普通に考えたら、俺たちにとっては都合のいいことである訳で。ガルバディア側に有利な展開にするには、意図が掴めない。

保護が嘘にしても、強制労働か人質か。どっちもうまみがない。強制労働はティンバーの市民連れてった方が早く、反抗も出来ない。

俺たちに対する人質なら、1000人前後引き取る必要はない。思い浮かぶのは使い捨ての兵士として利用することだけだ。

それなら初等部ではなく、もっと年齢の高い生徒を乗せるはず。それに、輸送艦に乗せるより、ガーデンに乗せた方が早い。

今一、効率的ではない行動であるのだ。その理由を聞きたい。

そう口にする俺に、スコールは小さく頷いた。

何か原因というか、筋道のある答えを彼は持つているようである。

「サイファアードだ。」

ガルバディア軍司令官をしているらしい」

それは、原作通りだ。魔女の騎士をやっているんだろう。

だが、初等部の学生を引き取ってくれるには理由が弱いけど。

「サイファアード……。」

正直彼が取る行動には思えないけど？」

「ああ。」

バラムの輸送艦は風神と雷神の発案らしい」

ああ、あの二人の発想なのか。道理で俺には意味不明なはずだ。

どうもあの二人とは波長があわない。悪い奴らではないけども。

「風神と雷神か。」

バラムで撃退したってゼルから聞いたけど」

「ガーデンなき後の傭兵部隊の一員として育てると言っていた」

バラム・ガーデンを潰した後のSeed候補生と、そういうことか。

どっちにしてもこの世界にジャンクションは必要だからね。

そういう用途という名目で、助けてあげようとしたってことね。

「成程、大体のことは判った。」

確かにあの2人なら、特に心配することはなかったんだな」

「そういうことだ」

ガルバディアに周っていても、心はバラム・ガーデン寄りと。

というかあの二人の場合はただのサイファー派というべきだろう。

この戦争についても、そこまで深く考えてはなさそうである。

しかし、それでもありがたいとは思う。助かるのは違いない。

納得した俺が了解したと伝えようと、スコールは退室していった。

慣れない演説なんかしたものだからか、どうも疲れていたらしい。

まあ休めば治るだろう、と。

疑問と心配が一通り解決した俺は、次の仕事に取り掛かり始める。

やれることは沢山あった。必要とされるうちは頑張らなければ。

バラムにおける補給は一日がかりとなった。

予想以上に多い人間が戻ってきたから、それに合わせた物資。

具体的に言うとは、ほぼ食料を補給するのに時間がかかった。

今後のことを考えれば、武器、特に重火器の類も必要。

それほどバラムに重火器が蓄蔵されているわけではないけれど。

必要最低限の数を確保すると、あつという間に一日が過ぎた。

その間にシユウたちが生徒の組織化を進めていった。

基本的な目標とは、ガーデンを無力化して魔女を討伐すること。

言うのは簡単だが、当然これを実行するのは非常に難しい。

敵戦力はガルバディア・ガーデンの生徒とガルバディア軍。

ジャンクシヨンがない敵は、個人戦闘能力が格段に下がる分。

飛行機械や重火器を使った俺たちには出来ない攻め方をしてくる。

数で劣ることが間違いない以上、防衛では負けてしまう。

そもそもSeed自体が防衛に向けた訓練をしてきてはいない訳で。だからと言ってこつちから攻めるには、手数が足りない。

電撃作戦を実行するにしてもメインになるのはSeed。

彼らは僅か40人しかいないし、同時に守りの要でもあるのだ。

正攻法では、まともに戦ってすらいられない自信がある。

そうなると思つ手筋は決まってくる。戦力の誘導しかあるまい。

ガチガチに防衛している場所と、そうでない場所を明確化。

そうでない場所に敵戦力が集中するのを誘導する。

その地点にSeedを集中して、敵侵攻部隊を殲滅するのみである。

防衛を甘くするのは、入り口、中庭、運動場の3か所。

そこですまは、Seedの放つG・Fによって敵の突撃を阻止。

突っ込んで敵を混乱させて、後は重火器による一斉攻撃。

ま、メインで担当してるのはシユウである。

補給班の俺は、ちよいちよい口出しはするが、メインではない。

経験が豊富な彼女の方が、作戦展開は遥かに上手だろう。

敵実行部隊が一区切り着いたら、スコール班が突入。

魔女の討伐を目指す。その案内にはアーヴァインが参加する。

……アーヴァインか。まだ俺は信頼されてないみたいだけでも。

まあ、全体的には原作でやってたことと、ほぼ同じである。

原作では正面切った防衛戦をやっていて、非常に大変そうだったが。

楽が出来るように計画していけば、なんとかなるだろうと思う。

また、トラビア・ガーデンで協力を確保出来たら。

トラビアの生徒には、主に重火器を使ってもらおうと思っている。

バラムには重火器を使える子や狙撃手が少ない、とシユウが言っていた。

火器に関しては、シユウが要求したものを素直に集めた。

そこは、俺の担当ではないので、特に考える必要はない。

しかし俺がしなくてはならない仕事はまだまだ沢山あると思われた。

まず当たり前だが食料の確保。

それから医療物資や魔法生成用の各種アイテムが必要なのは間違いない。

トラビアの生徒が増えるなら、それに対応していく必要があるのだ。

また、ガーデン内に緊急用の物資を配置しておかなければならない。

ケアル系統の入ったストックストーンや、ロープなど救助用品。

戦争時の補給ラインも考えて行く必要がある。人手は足りていない。

「トラビアの協力が得られるといいんだけど」

俺の眩きは、誰の返事もなく空中に響いて消える。

何をするに当たっても、現人数では防衛線を築くのが限度である。物資よりも何よりも、人手。現在はそれが一番の課題であった。

バラムで補給が完了すると、今度はトラビアに向けて発進した。

今度は推定8時間、ニーダにはちよつと辛いだろうが我慢してもらおう。

お願いするときに、苦情はシユウに言うようにいつておいた。

そもそも生徒の配置とかはシユウが担当者なのである。

幾ら修理班であろうと俺の管轄ではないのだ。多分きつと本当に。

シユウに責任を押し付ける。ニーダからは特に文句は出なかった。

トラビアでの交渉は、もちろん学園長が行うことになった。

護衛はトラビア出身のセルフィにメンバーの選出ごとお願いした。

手を振りセルフィを見送って数時間、学園長たちは帰ってきた。

「え、うそ」

「冗談でしよう?」

「嘘じゃありませんよ」

「ホントウだつてば〜!」

学園長たちの報告に、俺とシユウは戸惑いを隠しきれない。

トラビアに協力を要請しに行ったのに、歓迎されてしまったのだ。予定よりも、多くの人数と物資をただで借りられることになった。なんの冗談という話である。そこまで都合がいいと夢みたいだ。

「今度はどんなことを？」

「セルフイを人質に取ったのね？」

「違いますよ。」

シオンとセルフイのお陰です」

……俺？

「俺は今回何もしていないのですけど」

「トラビアに手紙を送ったのは誰ですか？」

あー、そういえば、そんなことをしたこともあるような気がする。

いや、でも。結局ミサイルは撃たれたのであるし、当たりもしてないし。

特に俺の力で助けられたという訳ではないような気がするが。

「そういえば手紙を送っていましたね、確か。」

バラムだと効果がなかったのを忘れていましたよ」

「ミサイルが海に落ちる前に届いたらいいですよ。」

手紙に合わせて避難をしていたらしく、被害は全くないようです。

君とセルフイに大変感謝していらっしやいましたよ」

「私なんて英雄扱いされちゃったんだから」

英雄扱いって。まあそりゃそうかもしれないけども。

一人で基地に忍び込んで、任務成功すれば英雄とも呼ばれよう。

それはともかく。今回の反応は、感謝を含めてということ？

「そうとつても構わないでしょう」

非常にうれしいことである。

俺の行動によって人を助けることが出来、それを感謝されたのだから。

破格のお礼に罪悪感があるが、受け取らないなんて選択肢はない。

学園長によると、要求に合わせた学生を選抜してくれるそうだ。

明日の昼ごろまでには、受け入れ作業も開始できるということである。

物資に関しては、今からでも交渉を始める準備があるらしい。

「ですので、後はお任せします。

担当の方と連絡を取るといいでしょう。」

「そう、ですか。

それでは俺はトラビアに行つてこようと思います」

「私が案内するよっ！」

そして俺はセルフイの案内の下。

補給班班長としての役割を果たすことに専念するのであった。

忙しいったらありやしないよね。本当に。

トラビアから受け入れた生徒はおよそ200人。

その殆どが、重火器ないし銃器の操作に長けている生徒である。

後は救護や機械操作の技能を持った生徒が若干名といった所。

ジャンクシヨンの経験はなくとも、後方支援には十分である。

またそれに合わせて火器を大量に貸し入れた。

俺は引き取り作業をしただけであるが、それでも大量にあつた。

トラビア生徒の居住区として。

ガルバディアに保護された生徒たちが住んでいた部屋を充てる。

荷物は別に確保したので、戻ってきてても混乱はないと思いたい。

シユウは、今も生徒の組織化と防衛案のを行っている。

今回入ってきたトラビア生徒の多くは、後方支援として配備。

トラビア生徒の上級生をまとめ役に、配置されることになった。

そうやって、着実に戦争への準備が整っていく中。

物資の搬入が一区切りをついたところに、俺の部屋に珍客である。

リノア・ハーティリー。彼女が執務室に現れたのであった。

23

夜になりかかった頃、執務室のドアが控え目に叩かれた。

「どうぞ」と一声言うのと、ゆつくりとドアは開かれた。

リノア、である。それも一人。一体どうしたのであろうか。

「シオン、今大丈夫？」

「リノア？」

どうしたのこんな時間に一人で」

「ちよつと、話があつて」

珍しいというか。今まで二人で話したことつてあまりない。

それこそ、ティンバーで二人で逃げたのが最初で最後じゃないか。

様子からすると、結構深刻な話みたいだけど、何があつた。

「取りあえず、中入つて。」

仕事は一区切りついてるから、何かあつたのなら話してよ」

「う、ん……」

現れたリノアはどうやら凄く落ち込んでいるようだった。

しかし、俺のところにくるのは、なんでなんだろうか。

俺とリノアでは、スコール関係ぐらいいしか共通の話題はないが。

それにしてもここまで沈んでいるのはおかしいと思う。

今の彼女はいつもの笑顔ではなく、心底疲れたような顔をしていた。

そのリノアは、俺の促しに言葉を選びながら口を開いたのだった。

「あの、ね？」

さっき私、スコールたちがトラビアに行くの付いてったんだ」

「トラビア・ガーデンに？」

スコールたちというと。

普通に考えたらパーティのみんなだろうか。多分間違っではないか。

頷いたリノアは、またゆっくりとした口調で語り始める。

「うん、アーヴアインがみんなに話があるって。

それで、私は呼ばれてなかったんだけど、付いて行ったの」

トラビアで、アーヴアイン。ああママ先生についてのお話か。

正直、ないかと思っていただけであってよかったと思う。

みんなの中に、俺が入っていないのが少々気になるけど。

「どんな話だったの？」

「私には、よくわからなかったんだけど……。」

みんなが実は同じ孤児院出身だったんだって」

「孤児院？」

イデアの家だね。俺は知らない振りをして、更に話を促す。

「うん。」

記憶障害っていうので、忘れちゃってたらしいんだけど」

「うん」

「それで、その先生の名前が、イデアって言うんだって」

「魔女と同じ名前だね」

言いにくそうに搾り出すリノアに、俺は淡々と言葉を繋ぐ。

「うん。」

旦那さんの名前はシドさんで、ガーデンとSeedの発案者なんだって」

「うん」

「うんって……知ってたの？」

さて。どう答えるか。嘘を言っても余計怪しまれるし。

本当らしく、嘘じゃないあたりを言っておくのが肝要だろうか。

複雑にしすぎないほうが最もらしく聞こえるものだしね。

「ちよつと昔、ガーデンの歴史を調べたことがあつてね。

魔女イデアと学園長の関係と、孤児院をやったことは知ってるよ」

「……なんで言わなかったの？」

「みんなが忘れてるみたいだったから」

その方が、誰も悲しい思いをしなくても済むでしょう？と続ける。

その言葉に、リノアは俺から一步離れる。

引いたのじゃない。足を纏れさせて、後ろに下がっただけである。

「……忘れてたら、言わないの？」

「言わなかったね。

多分、それが学園長の望みだと思ってるものだからね」

倒すときに、余計な感情は持たせたくないと思つたんだろう。

それは優しいようで、残酷なだけの行動だと思っただろう。

どちらにせよ、思い出すならともかく、俺から伝えることではない。

「それで、落ち込んでるのはどうして？」

みんなの先生が魔女だったことがショックだったから？」

「うん。

「それもあるけど、私が、一番シヨック受けたのは……」
リノアは口ごもった。

「どうやら言葉を選ぼうとしているらしい。」

「ううんとか、えつととかを数度繰り返してから漸く口を開いた。」

「……みんながそれでもアイデアと戦おうとしていること」

「……」

「私、聞いていた時はびっくりして何も言えなかつただけ……」

「大切な先生なんですよ？　大切なお母さんなんですよ？」

「だろぅね」

「それは、俺も否定はしない。けど続く言葉に準備をする。」

「なんで、みんな平気で戦おうとするのかな」

「平気じゃないでしょ」

「平気なわけないだろうよ。」

「大切な人、母親相手に剣も銃も向けられる人間なんて、そうはいない。」

「特にちゃんとした母親をしてきていた人ならなおさらだ。」

「でも、戦わなくていい手段とか、あるじゃない？」

「えらい先生が、どうにかする手段を考えるかもしれないし」

オダイン博士か。

あの人がそんな都合のいい方法を考えてくれる人だとも思えないが。しかし、リノアは更に話を続ける。俺が口を挟む間もないほどに。

「私、こういう時、思うの。」

みんなのテンポと、私のテンポがずれているって」

「テンポ？」

「うん。呼吸、っていうか考え方みたいなもの。」

みんなのテンポが、だんだん早くなっていった。

私も頑張って追いつこうとして、でもみんなはもっと早くなっていった」

少しだけ、リノアの言っていることも判る気がする。

置いていかれることが怖いのだ。価値観の違いが、常識の違いが。

慣れようとするほどに、もう慣れてるみんなが遠く見えてくる。

「……」

「私、みんなに追い付けないことが不安で、怖い。」

私より先の場所で、みんなが倒れてるんじゃないかって思っちゃう」

「……俺だってそうだよ」

耐えきれなくなって口をはさんだ。そりやそうだ。

本職の傭兵と行動派とはいえ、お嬢様では考え方は違うだろう。それでも君は戦うことを決めたんだろう？俺と同じでさ。

「リノアは、いいじゃないか。一緒に戦えるんだからさ。」

みんなが倒れていても、後から追いついたリノアが助ければいい」
「シオン？」

「俺はそうじゃない。みんなを助けることなんて出来ない。」

俺に出来るのは、倒れて行くみんなの背中を見ているだけだ」

ああ。

これじゃただ八つ当たりをしているだけにしかないじゃないか。

伝えたいのはこんなことじゃない。もっと本質的なことである。

「——誰だって。」

誰だって、一方向しか向くことは出来ないんだ」

「え？」

「前を向いて戦ってる間に、後ろの仲間が襲われているかもしれない。」

でも、それでも戦っている内は振り返ることが出来ないんだ」

だけど、戦わないと。前から敵は向かってくるんだ。

前から向かってくる敵と立ち向かわないと、他の誰かが危険になる。

後ろは気にしている余裕はない。無事と信じることしか出来ない。
「みんなは前を向いて戦ってる。」

俺は、みんなの後ろを守るために戦ってる」

「……」

「大切なものを守りたいだけなんだよ。」

俺たちは、戦うことしかそのやり方を知らないんだ」

リノアは、黙って聞いていた。

俯きがちに、手を握り締めて俺の話をただ静かに聴いていた。

「だから、スコールたちを信じてあげて。」

彼らは強い。負けない。もし負けても、君が助ければいい」

「……私か？」

「君だって、大事な誰かを守りたいだろ。」

君は、君のやり方でみんなを守ればいいんだ。

それこそ、後ろからついていくなら。

戦うみんなの、直ぐ後ろを守ってあげればいいだけの話である。

それはテンポが違う、リノアにしか出来ないことである。

リノアに言い聞かせるのと同じぐらいに、俺にも言い聞かせる。

これが俺の戦い方だ。武器をもって戦うだけが戦いではない。そう思っただけじゃダメ。やっつけられない。挫けそうになるのだ。でも。」

「そうやって戦うのだから、大切な先生じゃない」

「リノアはポツリとつぶやいた。」

「だからこそだよ。」

「大切な人が大切な人を傷つけるのなんて嫌だろ」

「だから、止めなくちゃ。そう言った俺のことをリノアは見た。」

「……止める」

「そう、止めるため」

「大切な人だからこそ、その人に悪いことなんてさせられない。」

「止めてあげなくちゃいけないんだと、俺はそう思う。」

「たとえ、それで相手を傷つけることになったとしても。」

「会話が途切れ、沈黙が執務室の中を満たしていく。」

「だけど、それは決してそれまでの緊張感に満ちたものではなかった。」

「リノアは薄く呼吸を繰り返して反芻しているようだった。」

「——よしっ！」

突然リノアは、大声を出してから深呼吸を始めた。

少し驚きながらも、俺はそれを見守る。この様子なら大丈夫かな。

リノアは少ししてから俺の方を振り返り、明るく笑って見せた。

「シオン、ありがとね？」

すつごく楽になったよ」

「それはよかった」

うん。元気になったのなら何よりなことである。

「うん、私が落ち込んでちゃだめだよね？」

大変なのはみんななんだから、私は元気でいないと！」

「そうだね。」

無理をすることは無いと思うけど、心がけは立派だと思う」

いや、本当に。無理だけはしちゃいけないけれど。

空元気でも元気は元気というじゃないか。まさにその通りだ。

心配と応援を同時にする俺に、リノアはガッツポーズをして見せた。

「うん、頑張るよ！」

「こうしちゃ居られない、みんなを元気づけてくる！」

「頑張ってる」

「じゃあね！」

今日は本当にありがとう！」

リノアは来た時とは打って変わって騒がしく退室していった。

ガーデンの夜は更けて行く。戦いまで、段々と近づいていく。

これからの戦いに向けて、嫌が応にも緊張は高まっていくのだった。

24

トラビアでの補給が済むと、いよいよ本格的な戦争準備が始める。防衛地区における重火器の配備やバリケードの確保、武器の分配。接触時、ガルバディア軍が飛行してくるのを打ち落とす狙撃班。飛んでくるのなら打ち落とすというシユウの案である。

実際に打ち落とせなくても、少しの間一方的に攻撃出来るわけだ。上手くいくかは知らないけれど、やらない理由がなかった。

トラビア・ガーデンとの打ち合わせの中で。

トラビア・ガーデンを、バラム同様に動かすという案が出てきた。

下層部を調べてみると確かにそれ用と思われる機関が存在していた。だが、結論としては動かさなくなった。

理由は、単純。欠点に対して、利点がそこまでないからだ。

まずは、利点。

トラビアガーデンが襲われて、全滅する可能性が格段に低くなる。

移動できるということは、接触を避けられるということであるのだ。

Seedがおらず、そうでなくてもかなりの生徒を借りている。

ガルバディア軍に対して、防衛する戦力があるかも怪しい程である。

それから逃げれるというのは、確かな利点であるように思えた。

また、ガーデン同士の戦争の際に2対1という好状況に出来る。

戦争は数であるという言葉のように、上手く運ばば使えるだろう。

たとえ戦力として不足していても、あるだけで大きな違いだ。

しかし。

この利点はトラビアガーデンが満足に動くという前提にあるものである。

機関は存在したが、修理をしなければいけないものであった。

また、2対1を利点にするにはガーデン自体に攻撃力が必要だ。

ただのシエルターであるガーデンにそんなものがあるわけではない。

ガーデン級の建造物に対して有効な火器など、作らなければならない。

修理に、開発。そこまでしている余裕があるわけではない。

結果として、トラビア・ガーデンの近くでバラム・ガーデンが護衛。

ガルバディア・ガーデンを確認したら、バラム・ガーデンで接触。

トラビアにたどり着く前に戦争を始めるしかないという結論に至った。

それまでは複数交代制で待機をするというわけだ。

またシウウが忙しそうだった。ぜひみんなの為に頑張つて欲しい。

トラビアでの補給が終わつてから4日後のことである。

海上に、ガルバディア・ガーデンが見えたという報告があつた。

遂に来た。ガーデン全体に、緊張が走つたのが見えた気がした。

スコールによる戦争前最後の放送が流される。

攻撃隊と防衛隊への指示や、幼等部の学生の教室待機、激励の言葉。

俺はそれをスコールの後ろで見っていた。遂にここまで来たのだ。

防衛はシウウ主導によるSeed及び学生の出番。

Seedが各防衛地点の指揮をして、ガルバディア軍を撃退することになる。

重火器やG・Fが上手く働いてくれることを祈るだけだ。

第一陣が落ち着いたら、スコール班がガルバディアガーデンに侵入する。

侵入はスコール・ゼル・セルフィ・アーヴァイン・リノア・キステイスの6名。

俺が入っていないのは、戦力面と指揮官不足の都合であつた。

スコール班は、彼らは第一陣の間は各所で最高の戦力として働き。

その後トラビアに借りた飛行機械で、魔女に直接戦闘を仕掛けに行く。

忙しいけれど、やつてもらうしか勝つ手段は用意できていない。

俺の担当は補給班の維持と通信。

補給班の内6名が各防衛地点に存在し、俺の通信をひたすら待っている。定期的な通信と、緊急の通信をその場のSeedに伝えることが目的だ。戦闘中に通信に気が付くのは難しいから、当然の結論だと思う。

補給班には、各部の物資の状況の把握と、再分配を任せてある。

俺の知覚能力でそれぞれの戦況、物資の状況を把握し走り回ってもらおう。その点、俺の能力は、補給班の班長としてはいい感じに回っていた。

「スコール、近づくぞー！」

「あぁー！」

ニーダが操縦桿を前面に押し出す。

モニターがガルバディア・ガーデンでいっぱいになり、振動が走る。

接触したのだ。スコールはそれを確認すると、即座に走り出した。

放送を始めた通信士を確認してから、持ち場の1階ホールへと向かった。

第一陣の飛行部隊は狙撃を掻い潜り、殆どがガーデンに到着した。

とはいえ2割程は地面に叩きつけられ、赤い花を咲かしているようだ。

この戦争での一番目の犠牲者が彼らであることは間違いない。とはいえ、敵方の犠牲者を悼むような余裕は、流石に今はない。

ちよつとだけ複雑な気持ちになりつつ、俺は補給用の情報確保に勤しむ。出来れば、味方側にこそ犠牲者は出て欲しくないと素直に思う。

現在は上手くいっているようだ。特に大きな動きは見せてない。

大まかな把握しかできないが、重火器もG・Fも上手く働いている。

しかし、バラム側にも少しずつだが被害が出ているようだ。

通信担当から、ポーシヨンの補給を早めに始める連絡が多かった。

俺たちのもくろみ通り、侵攻は入り口と中庭、運動場に集中していた。

その他の場所も多少は襲われているが、何とか均衡を保っているらしい。

このまま膠着しつつ、余裕を持って対処していけばなんとかなるだろう。

これは大丈夫だと思ひ始めたとき、放送で俺は操縦室に呼び出された。

「スコール！何が起こったの？」

「第一陣が途切れたらしい」

そこにはスコールたちが全員揃っていた。

全員無事である。ほつとしながらも、その言葉を聞いて息を呑む。

つまり、その時が来たのである。魔女討伐作戦の、本番が。

「……行くんだよね」

「もちろんだ。」

ガーデンはお前とシユウに任せる」

「……うん。」

気をつけてね」

何かを言おうとして、それでも上手く言葉にならなかった。

樂觀的な言葉も悲観的な心配も、どちらもそぐわないと思えた。

原作知識という邪魔なものが、俺の素直な言葉を阻害する。

何もしらなければ、素直に頑張つてといえたのだろうか。

それともみんなを心配して、無事に戻ってきてと言えたのか。

どちらにせよ。俺の口からそれらの言葉は出てこなかった。

スコールは軽く口端を歪めると、走り出して行った。

それにみんなが順番に続いていく。俺に一人一人視線を向けながら。

信じることしか出来ない。そういう空しさが全身を襲い掛かる。

俺はスコールたちの位置を追いながら、ニーダに指示をする。

「ニーダ。」

俺が合図したらガーデンから距離を取って」

「判った。

けど、いいのか？」

離れば、当然進入してきたスコールたちに戦力は集中する。

でも、みんななら大丈夫。彼らが負けることなんて想像もできない。

それが信頼なのか、それとも違うものなのかは、判らないけれど。

「みんななら大丈夫だよ。

それに戦力の殆どを出してるみたいだから」

「そうか。

お前の判断を信じるよ」

スコールたちがバラム・ガーデンから離れて行く。

知覚範囲を広げてそれを確認すると、ニードに離れるように言った。

飛行機械ならギリギリ届く距離まで、ガーデンを下がらせる。

モニターで飛行機械がまた飛んでくるのを確認してから。

俺は、また持ち場の一階ホールへと戻った。

第一陣の後処理と、第二陣の戦闘。まだまだ戦いは終わってない。

主戦力だったスコールたちがいなくなつて。

ガーデンが離れたことで敵数は減つたが、戦力比は大きく動かない。

スコールたちがやり遂げるまでの時間を、守り抜かなければやがて、ガルバディア軍の兵士たちは記憶を失ったかのように。その場で立ちすくみ、辺りをきよろきよろし始めたという連絡が入った。魔女の洗脳が切れたのだ。スコールたちが魔女を倒したのだ。俺は降伏を呼び掛けるように指示するため、操縦室に上がった。

戦争は終わった。

魔女イデアはスコールに打ちとられ、代償にリノアは意識を失った。

リノアは魔女となったのだ。同時にアルティミシアを引き継いだ。

リノアはどうなったのかと尋ねるスコールに首を振る。

倒した時にドロローが行われたということから、継承はほぼ確実だ。

恐らく今は、魔女の力に適合するために、睡眠をとっているのだろう。

こう、魔女の力を目の前にすると。

解析して、元の世界に帰るための手段を模索したくなるものだが。

流石に、自分の力では追いつかなさそうなので、やめておく。

そもそももう元の世界に帰りたいかと聞かれると微妙なラインだ。

ここまで関わっておいて、はいもう終わりといわれても、困る。

せめて物語の最後までは見届けておきたい。そう考えている。

ともかく。戦争の後処理とかが色々と残っている。

シド学園長と魔女イデアは、イデアの家へと帰りたいと言いつ出した。俺たちはそれを良い事に2人とも死んだと発表することに決めた。

二人を亡き者にしたい訳ではないが、責任の問題がある。

戦争の中で二人とも亡くなった、そういうことの方がシンプルだ。

俺たちは、学園長と魔女イデアをかくまうことに決めたのだ。

そして、スクールたちはイデア先生たちを送っていった。

ガーデンは、高速上陸艇、実地試験で使った船を持っている。

それに乗って、二人をイデアの家まで送りに行っただのである。

スクールたちが留守にしているその間。

俺とシユウはその間、ガルバディア・ガーデンの処理を行っていた。

何せみんなの記憶が曖昧なのだ。任せようにも誰も居なかった。

とりあえずは、ガルバディア軍と生徒たちの無力化である。

ジャンクションをしていない分、無力化は武器を奪うだけでよい。

殆どが降伏していた分、それ程手間が掛かりはしなくて済んだ。

続いて、両方の死傷者の治療である。

この世界では回復魔法と蘇生魔法もあるので意外と死人は少ない。

治療が間に合わなかった人のみが、命を取り戻すことが出来なかった。

そうしているうちにスコールたちは帰ってきていたらしい。

学園長とイデアから聞いたのだろう、色々なことを放送していた。

魔女イデアに未来の魔女アルティミシアが憑依していたこと。

魔女アルティミシアの目的が、エルオーネを確保すること。

その為に、今までの戦争は起こったこと、そんなことである。

騒動になるかとも思ったが、誰もが戦争で疲れ切っていたらしい。

全くと言っていいほど騒ぎにはならず、そのまま受け入れられた。

ガルバディア・ガーデンはカーウェイ大佐に保護してもらったことにした。

そしてエルオーネが乗っている白いSeedの船の搜索が始まった。

白いseedたちがセントラにいる可能性が高い。

そうスコールが学園長に聞いていたため、あっさりと見つかった。

スコールたちが交渉に向かい、エルオーネを連れず帰ってきた。

「エスタだ。」

エスタにエルオーネがいる」

「探していくの？」

スコールは返事をしなかった。

俺も特に問い詰めはせず、F・Hに向かうようにニーダに伝えた。

了解と、ニーダは振り向きすらせずにガーデンを動かし始める。

「いいのか？」

「よくない」

「じゃあ」

なんでという言葉を言わせる前に、俺は言葉を重ねる。

「他にエスタに行きたいって依頼をした人がいる。

護衛重要度は最高レベル。スコール班に護衛を頼みたいってさ」

「誰だ？」

「誰だも何だもない。」

この時点で、最優先の護衛対象なんて僅かにも残っていない。

「エスタの魔女封印技術が目的の人。」

この時点でエスタに行きたがる人の心当たりは？」

「……あの人か」

今となつては、名前を出すわけにはいかない人。

その人が依頼をできてきているのだ。具体的には先代の魔女である。

ま、本人もスコールも、現役の魔女だと思ってるだろうけれど。

「その依頼のついでだったら仕方ないよね。」

ついでに処理があるから俺は付いていけないよ」

「……すまない」

謝るスコールに手を振る。そんなことをされることはしてない。

「さっさと終わらせて帰ってきてよね。」

任務内容はキステイスが知ってるからそつちに聞いて」

「ああ、助かる」

スコールを向けない。色んなことが顔に出てしまう気がする。

「……リノアをよろしくね。」

俺が頼むことでもないんだろうけど」

「任せろ」

そしてスコールは退室していった。

みんなが無事でいてくれれば、それだけで俺たちは十分なのに。

どうしてこの世界はそんなに簡単には進んでくれないのだろうか。

スコールたち7人がF・Hで降りると、後は大量にやることがあった。

ガルバディアとの関係修復。トラビアガーデンに生徒を戻すこと。

ガルバディアに奪われた生徒から、戻りたい生徒を回収するのも一つ。そして最終的には元のバラムに戻ることに。それが何より大切だ。

それを全てやっていては、凄く時間がかかるだろう。

スコールたちが戻って来るまでに、全てが終わるとは思えない。

しかし、俺はスコールたちが戻ってくるまで待つつもりはなかった。

ある一点、俺があつちに行こうとしてもおかしくないタイミングがある。

その時点までに、以降の足掛けとなることをしておかなければ。

まだまだまだまだ忙しい。俺の手は二本しかないのだけでもなあ。

とりあえず一番最初に行うべきことは人材確保である。

目標はF・Hで隠居していた元ガルバディアガーデン学園長ドドンナ。

Seedを数人借り出して、捕まえてガーデンへと引っ張りこむ。

魔女に追い出された形で学園長を辞めた彼は学園長として最適だ。

シユウに見張らせておけば完璧な仕事をするに違いない。

傀儡だが、彼がガルバディアの学園長に戻る日まではお願ひした。

また、せっかく仕事がないんだからと白いseedも回収してみた。

イデアの遺志を継ぎ、エルオーネを助けるのは君たちしかいないとか説得。

シユウに任せてこれからはseed本隊に組み込んでもらうことにした。

また、Seedにティンバーやガルバディアの様子を偵察を依頼する。大統領も魔女も軍司令官もいなくなり、一体どうなっているのだろうか。カーウエイ大佐が上手く指導してくれているとこちらも助かるのだが。続けてトラビアについてトラビア生徒を引き渡す。

これで元々の生徒たちが戻ってきてても居場所がないということはない。

補給もしておく。貸しがあるなら利用してしまふ今の立場である。

バラムに戻り、ニーダの休憩のために丸一日ガーデンを止める。

その間にガルバディア、ティンバーに派遣していたseedが戻ってきた。

仕事早いようで大変結構である。流石のベテラン組であった。

ティンバーは森のフクロウ構成員を中心に自治を取り戻し始めた。

治安も経済も特に問題はないようだ。これで独立完成である。

それに対してガルバディアは混乱の真つただ中。大混乱である。

開発独裁をしていた大統領。

その後釜になった魔女がいなくなったことで指導者がいない。

そんな中で見事に権力を掴み始めているのがカーウエイ大佐である。

もともと軍事政権であったガルバディアの軍の実質最高権力者。

魔女によりその権力を奪われていたが、派閥ごと取り返したらしい。

押し付けたガーデンやバラム生徒も上手く保護してくれているようだ。じゃあということでバラムガーデンはカーウエイ大佐の統治を支持。

このまま上手くまとまってくれればいいなあと思つて数日間。

バラム生徒の回収を考える内に、待ち望んでいた現象が起きたのだった。バラムの観測部がエスタに月の涙が起こつたことを観測したらしい。

一体どうなったのか、どれくらいの被害なのか。

そしてスコールたちは無事なのかを確認した方がいい、とシユウに提案。

受け入れられて、誰を派遣するのかという段階で真つ先に俺が手を挙げた。顔を真つ青にしてお願いだから勘弁してというシユウに、俺は反論する。

エスタに対して交渉をするだけの人材が、他にどこの誰が居るのか？

スコールたちの無事を確認する上で、イデアを見て問題ない人物はだれか？行かないという選択肢や、俺の職務はどうするのかという反対が出た。

月の涙がこちらまで影響が出たらどうするつもりなのか？

一体どのようなことが起こつたのかを確認しないと今後の対応が取れない。

また、俺の職務は補給と修復だけであり、一応その任務は完了している。

ガーデンの本業に戻ろうとしている以上、それは職員と学園長の仕事である。

そのためのドドンナ学園長である。とつても仕事が出来るおじさんだ。

護衛はどうするのか？という質問には白いseedを使うと答えた。

まだseed本隊に組み込んでいない。特別任務には丁度いいはずである。

エスタにエルオーネがいる以上、彼らが行きたがっているのは明白であった。

かくして、俺は白いseedを連れてエスタに向かうことになったのである。

魔女記念館に封印されたリノアを助けた俺たちは、イデアの家に行った。

リノアが行きたいと望み、他に行く場所もなかったからだ。

やってしまったことに目を向けるには、少し時間も必要だった。

俺とリノアは再開の約束をした。

いつ、何が起こっても。自分がどこにいるのか判らなくなったとしても。

俺たちはここで待っていると決めた。お互いに会えるまでずっと。

そうしている間に、ラグナロクにエスタから無線が入ったらしい。

普通なら無視しているところだが、その大統領補佐官はキロスと名乗った。

あのキロスと同じ人物かを確かめるために、俺たちはエスタに向かった。

大統領官邸。

待っていたのは、キロスとウオードだと思われる細身な男と巨漢であった。

間違いないと思えるぐらいには、特徴が良く似ていた。同一人物だろう。

そして壮年の男が一人いた。見間違えるはずもない。

何度も俺は体験した。幾ら年齢が違っていても、直ぐ判ってしまった。その男がラグナ・レウアールであるということが。

ラグナが説明をしようとするのをキロスが押しとどめ。

俺たちから質問するように促した。知りたいことが沢山あるだろう、と。

そして俺たちは、何故呼ばれたかという根本の疑問を投げかけたのだった。

物陰で待ち構えていた俺が、期待通りの質問に身を晒すことにした。

「それについては俺が説明するよ」

「シオン?!」

予想通りの反応だ。

誰も俺がここに来ているなんて想像すらもしていなかっただろう。

全員の裏をかけたようで、目を見開く姿を見ることが出来た。

「久しぶりスコール。」

大体20日ぶりぐらいかな？」

「なんでここに居るんだ?!」

思い返せば長くなる。ここまでを思い出しながら、俺は答え始める。

月の涙が起こったということは、エスタは危険な訳であった。

モンスターがうろついて、俺が一人で出歩くことはできない。

そんな中を、白いSeedの護衛を受けて、俺一人お散歩気分である。

ああ、実際にはバステ振りまきで仕事はしたんですけどね。

ゾンビーレイズの安定感はずばりである。レイズが勿体無い以外。

こうでもしないと活躍できないのが、俺の限界なのであるけども。

まあそれはともかく。

無事にエスタにたどり着き、入国審査官にガーデンの使者と告げた。

一応書いてきた大統領ラグナ宛のお手紙も、お出しさせていただいた。

内容は素直に、月の涙が起こったようですが大丈夫ですか。

特にスコールとかスコールとかエルオーネとか無事ですかという話。

これを読んでくれたら大統領も会ってはくれるだろうと踏んで。

そういうことで、国賓とまでいかずともそれなりの扱いを受ける。

中々よい部屋にご案内されて、待つようお願いされる次第。

白いSeedたちも同様に扱われているようで、一安心であった。

さて。

月の涙が起きたということは、スコールたちは宇宙かラグナロク。

現在はエスタにはいないことが推測される訳であるが。

まあ、考えても仕方がないだろうと俺は寛ぎモードに入った。

ベッドに身体を投げ出して、だーらーだーらーしていた。

久しぶりに仕事が続いていないことに、もう身体が緩んでしまった。

そうしているうちに、大統領が会ってくれと連絡が来た。

わざわざ伝えに来てくれた、大統領高官キロスさんにお礼を言う。

いやあ、流石にあれだけ目立つ特徴があると、直ぐ判るね。

そして呼ばれた先にいたのは、大統領とオダイン博士であつた。

その二人から、ルナティック・パンドラの一件と月の涙。

スコールたちが魔女記念館で起こした騒動の一連の話を聞く。

そして、これからスコールたちに依頼をするのだと聞かされる。

愛と友情と、勇気の大作戦。その概要を俺は聞かされる。

スコールたちがもう少しで来るといふところで、大統領は口を開けた。

「因みに、君はスコールの友達なんだよねえ？」

「そうですね。」

「一応親友ぐらいには仲がよいほうかと」

腕を組んでうんうん、と頷く大統領。

そのジエスチャーは、スクールよりもリノアに似ている類である。

「その君に質問なんだけど。」

あいつつてどんな奴だった？」

「どっちとしての質問ですか」

父親か、大統領か。それによって答えは変わると思うんだけど。

そういう意味で聞いた言葉に、大統領はガシガシと頭を搔いてみせる。答えて聞かなくても父親の方だと判ったので、心の中でため息をつく。

「……いい奴ですよ。」

人思いで、ちよつと無愛想で、でも優しい子です」

「そっか。それはよかった」

「自慢の親友ですよ、俺にとつては」

スクールにとつての俺がどうかは、判らないけれども。

勿論、俺もそうでありたいとは常に願っているけどもね、現実はね。

中々上手くないかないものである。色々な事情をふくめても。

「因みに、あのリノアつて子は」

「スクールの彼女一歩手前の女の子ですよ」

そっかそっか〜と喜ぶ姿は、ただの若く見えるお父さんだった。

その後、スコールたちがラグナロクでエスタに到着するまで。似たような他愛のない話で、お互いに盛り上がるのであった。そして、スコールたちがこの場にきて、話を始めたのである。

「——というわけで、俺はここにいるんだ」

「つまり。月の涙が観測されたから。」

俺たちの安否の確認ついでに来た、と」

その通りだ、と俺は頷く。流星スコール、完璧な理解である。

「それは、判った。」

「じゃあ何故ここに居る」

「大統領官邸にいる理由は、月の涙の説明を受けるため。」

君たちもここに呼ぶと聞いたからね、同席させてもらったんだ」

「そうか」

うん。納得いただけただけようで大変幸いなことである。

ま、実際には最後まで見届けようとする為に、ここに来たのだが。別に俺に何ができるといいうわけでもないしね。申し訳ないけど。

「——信じられない」

しかし。納得出来てない人が、一人。鋭い眼光で俺を射抜いた。

アーヴアインだ。誰よりも俺を疑わざるを得ない立場にいた彼である。

その彼が、ここに至って遂に、俺の真偽を問いかけるにいたった。

「何が安全の確認、だ。」

「何が同席させてもらった、だ」

「アーヴアイン」

「スコール、聞いてくれ。」

「シオンはずっと何かを隠し続けている」

「おっと。それを言われたら俺は反論のしようがないじゃないか。」

「というか、普通に動揺してる俺には、反論が思い浮かばないのだけど。」

「疑われるのはともかく、まさか直接来られるとは思ってなかった。」

「随分、都合がいいよな。」

「ミサイル発射も、今回きたタイミングも。何を知ってるんだ。」

「……ごめん、何のこと？」

「せめて、恍ける。答えられないと黙っていたら認めるようなものだ。」

「そして他の誰かに助けを、と思って。みんなに視線を向けて、気付いた。」

「全員が俺を見てる。スコールを含めた全員が、俺の答えを待っていた。」

「俺が、何を知ってるって？」

何を知ってたらおかしいのか教えてよ」

「知りたいのなら教えてあげるよ」

カツカツと。

アーヴアインの履いているブーツの音が、沈黙の部屋に鳴り響く。俺の前で止まったアーヴアインは、俺の耳元で囁くように言った。

「ミサイル発射のこと。」

あれが決まったの、暗殺作戦の次の日なんだって」

……ミスってた。

純粹に、俺は必要だからと思ってやったことが決定的にずれてた。

他にやりようが思い浮かばなかったからこそ、後悔が尽きない。

「なんで知ってたんだろうなあ。」

なんでシオンはさも、確定事項のように話したんだろうなあ」

そうだ。俺はあの時確定事項として、あのことを話してる。

だから推測という答えは使えない。先に釘をさされてしまった。

いや、しかし。だからといって、言い逃れる方法は。

「ずっと思ってたんだ。」

もしかしたら、君は全部知ってたんじゃないかって」

「何を、全部だい？」

「さあ。」

君が答えてくれたら判るんじゃないかな」

そういつて、アーヴアインは俺にその愛銃を向けてきた。

至近距離で押し当てられた銃口は、確実に俺を殺す力を持つてる。

その硬さは、彼の意思の強さと同じ。答えなければ撃つ気だ。

「答えなよ。」

君は、何を知ってるんだい？」

俺は、何を知っていたというのだろう。

近くにいた人の思いにも気付かず、何を知ったつもりだったんだろう。

助けを求めても、その視線に答える仲間はずも居なかった。

27

「なんてね」

アーヴアインは、愛銃をくるくると回してホルダーにしまった。

残されたのは、は？という感じの俺と、みんなの安堵した顔である。

目の前の彼はくるりと反転し、頭の後ろで両手を組んだ。

「信じてはないけどさ。」

今更裏切り者もなにもないよねえ」

「疑ってはなかった、の？」

俺の問いかけに、アーヴアインは疑ってるよおと軽い声で言った。

じゃあ、どうして。今の問いかけに俺は何かを答えそうになっていた。

俺に背中を向けるアーヴアインは、ちらりと俺を一瞥すると。

「でも、その段階は過ぎてるよ。」

何かを知ってるけど、裏切り者ではない」

「それって」

「そう。」

「アタシと同じだよね」

セルフィだ。俺はセルフィに、同じことを言われてるんだ。

信じられないけど、裏切り者じゃない。そう思ってる。

それと同じことを、今。一番怪しむ立場の人が、俺に言ったのだ。

「みんなね、不思議には思ってるんだ。」

シオンの言うことって、どうしてか本当になるの」

「だが」

「裏切り者だったら、ここまで一緒にきてないよな」

「本当よね」

リノアが、スコールが、ゼルが。キステイスがその後が続く。

「本当に裏切り者だったなら。」

「討伐作戦が成功してないじゃない」

「何時だって裏切るタイミングはあった、そうだろ？」

だから、とセルフィとアーヴァインは言った。

「話してくれるの、みんな待ってるから。」

「せめてこの戦いが終わったら、話してくれよ？」

俺はその言葉に、ただ頷くことしかできなかった。

疑われて、信用されてないと思っただけだったんだ。

みんなはそれをも乗り越えて、俺を待っていてくれたのである。

「じゃあ、改めて質問に答えるよ。」

君たちに、エスタ大統領ラグナさんから依頼があります」

俺は先に聞いておいたアルティミシア討伐作戦の説明を始めた。

曰く、アルティミシアは時間圧縮を目的として、魔女に乗り移る。

時間圧縮には、エルオーネの力によって過去の魔女に移ることが必要。

そのため、イデアIIアルティミシアはエルオーネを求めていた。

未来の魔女アルティミシアを倒すためには。

その時間圧縮というステージに上らなければいけないのである。

その為には、逆にエルオーネの力を使わせることが必要なのだ。

「まあ詳しい説明は専門家に説明してもらおうね」

「専門家？」

「オダイン博士。」

作戦はおいでも、他に質問があるんじゃない？

大統領が答えてくれるって言っているわけだし聞いておいたら？」

俺がそう言うのと、スコールたちは色々と質問を始めた。

エルオーネのこと。レインのこと。ラグナ自身のことについて。

俺は画面越しにしか見たことのない、親子の再開をただ見つめていた。

ラグナはそうだと知っているだろうけど、スコールは知らないだろう。

この戦いが終わったら、きつと話合ってくれればいいんだけど。

俺はスコールが幸せになってくれることを心から祈っているから。

そして、作戦について質問が移ると。

オダイン博士は求められるまま、上機嫌に解説をしていく。

解説が終わり、スコールたちがラグナノクに乗り込もうとした時だ。

「ん？」

「おまえ変でおじゃる！」

「はい？」

オダイン博士が、いきなり人を変だと話しかけてきたのである。

人を変呼ばわり出来る程、まともな外見でも内面でもないだろう。

この人に比べたら、俺は非常に全うな人間であると自負できる。

「G・Fの反応がするでおじやる！」

このオダインの検知器が鳴り響いているのでおじやる！」

「……いや。」

ジャンクシオンはしてるから、G・Fの反応があるのは普通ですが」

普通だよ。みんなと同じで、俺からも同じ反応が出るはずだ。

いや、完全に同じかと聞かれれば、それも違うだろうけれども。

何せ適合率は完全に違うから、それで反応したのかも知れない。

「違うのでおじやる！」

お主自身から新種のG・Fの反応がするでおじやる」

なんだそれ？スコールたちも立ち止まってこちらを見ている。

「検査をすのでおじやる！」

これはエルオーネ並みの不思議があるでおじやる」

「検査つて」

個人的に、あんまり病院や検査といった類は好きじゃない。

正確にはするのは好きだが、されるのは微妙である。

こう、知識欲は自分で満たしてこそ楽しいものであるからだ。

「痛くはしないのでおじやる。」

ただ魔力パターンを調べたりするでおじやる」

「はあ。」

それぐらいならいいですけど」

「さっそく行くのでおじやる！」

俺はオダイン博士に引つ張られて何処かに連れて行かれそうになった。

同情的な目つきで見てるスクールたちに、頑張れと手を振ると。

ただ引つ張られるのをやめて、俺は素直に着いて行くことにした。

俺がこちらに来た目的。

スクールたちが時間圧縮をする前に出会っておくことは完了した。

一目でも会っておきたい俺の自己満足は、取りあえず満たされた。

そんな風に思いながらもオダイン研究所でされるがままに検査を受けた。

採血されたり魔力検査されたりジャンクション検査されたり。

健康診断なのか検査なのかわからないまま流されて、俺は呼び出された。

「おまえの精神自体が弱いG・Fなのでおじやる」

「精神、が？」

「そうでおじやる。」

何故かは知らないでおじやるが、おまえには精神がないのでおじやる」

何か凄くひどいことを言われていないだろうか。

「精神がないって……」

なら今喋っている俺は一体？」

「おまえがG・Fなのでおじやる。」

人の精神自体がG・Fになるとは、これはまた面白いのでおじやる」

あー、うん、ちよつと心当たりがあるというか。

「その上おまえからは微弱でおじやるが。」

エルオーネに似た反応もあるでおじやる」

「エルオーネに？」

「そうでおじやる、恐らくエルオーネに似た能力。」

それによってG・Fがジャンクションしたことが原因でおじやるな」

俺自身がG・Fで、俺が入りこんだ……。

当て嵌まる事象が、まるつとあるのだが、これはなんとというか。

そう考えている俺を見て、博士はおおつと声をあげて驚いた。

「思い当たる要素があるのでおじやるな?!」

話すでおじやる！即刻隅々まで語りつくすのでおじやる！」

「ええと。」

俺12歳の時に事故にあつて、記憶喪失になつてゐるんです。もしかしたらそれかなと。そういつて、俺は言葉を止める。

「間違いないのでおじやる！」

人間の体にジャンクシヨンした弱いG・F！

それが身体を動かしている、これは本当に面白いのでおじやる！」

「つてことは、俺は人間じゃないんですか？」

なんか凄いシヨックである。

確かに、ジャンクシヨンが関係しているとは思つていたのだが。

俺自身がG・Fといわれると、なんとというか変な感覚だった。

「身体は人間で、精神はG・Fでおじやる。」

おまえが人間かどうかは、答えるのが難しいのでおじやるな」

「そう、ですか」

「そうでおじやる！」

また何か判つたら教えるから、少し休憩しておじやる」

言われるままに俺は研究室を出て、休憩所のソファに座る。

人間じゃないと言われるとちよつと来るものがある。

『この世界の』と限定ならともかく、人間ではないのは厳しい。

あれ？

ということとは俺の精神、というか人間の精神は。

その人間に入っていない限りはG・Fみたいなものなのか。

G・Fは意識を持ったエネルギー体、所謂精霊の類である。

ただ、人間はどうかなのか。身体という依り代がない人間だったら。

幽霊状態だったら、それはG・Fと同じということかも知れない。

そういうえば原作の最終決戦で。

アルティミシアがG・Fに逆ジャンクションしていた記憶がある。

なんとなく、そういうものなのかと納得も出来る気がする。

しかし、それでは一つだけ納得のいかないことがある。

人の精神がG・Fであるなら、俺の適合率はどうして低いのか。

同じような事例で、適合率が高い事例を俺は知っているのだ。

G・Fを付けた人間をジャンクションする。

状況としては、ラグナさんの言う妖精さんと大きくは変わらない。

しかし、適合率では大きな差をつけられていることが推測される。

それにG・Fの俺以外にもないとすると。

元々の“シオン・グレイル”は一体どうなってしまったのだろう。

状況的に、シオンがエルオーネに似た力を持っていたのだろうか。

……ん？

そういえば、オダイン博士が気になることを言っていた。

俺から、エルオーネに似た反応が、微弱だがする、と――。

そう疑問を思い起こした、そのとき。

世界が揺れるのを感じた。ぐわりと、景色そのものが崩れる。

時間圧縮が始まったのだろうか、遂にそのときがきたのだった。

重力が無くなる。地面と空の境界線がなくなる。

景色が飛んでいく。遠近感がなくなり、世界が溶け出していく。

そして、全ての記憶が泡となる。時間の流れが崩れていく。

時間圧縮と驚く間もなく、身体が不意に空へと投げ出されていた。

混乱しながら周りを見渡すと、世界が上下を反転している。

俺の身体は地面から離れて吸い込まれるように空へと落ちていく。

記憶の泡でいっぱいになった星空に、俺は引つ張られていった。

寒々しい星空に浮かんだ泡たちが、俺の横を通り過ぎていく。

泡たちが動いているのか動いていないのかすらわからない。

時々ぶつかりそうになる泡は、俺の知らないスクールたちを写していた。

そのまま、俺の身体は避けきれそうもない泡の一団に向かっていく。

これはぶつかったらどうなるんだろう？と恐怖を感じ。

とはいえ今の俺には避けられるような身体の自由なんてない。

ついにやってきた直撃の瞬間に、俺は目を閉じていた。
ぼしゅん。

待っていたのはなんだか気の抜けた音とふわふわした感触であった。
は？と思いつつも目を開くと、今度は空を地面に向かって落ちていた。
落ちているとは言っても、ゆっくりなスピードで加速もしていない。
このまま行くのなら、地面に着地もできそうだ。風の抵抗も感じない
さつきまでのスピードで地面についていたらどうなっていたらうか。
ふわふわと落ちて行く俺には、

おなじくふわふわと浮かんでいる泡に目を向ける余裕があつた。

そこにあつた泡たちは、間違いなく俺の記憶であるといえた。
ガーデンの書類を片づけている俺。

これはきつと凄く最近の記憶だろうな。

ああ、あの書類はトラビア生徒を返したときの補給案である。

喧騒の中しかめっ面をしている俺。

これはガーデンの一階ホールか。

ガーデン戦争のとき通信しかしてなかったからな。眉間に皺がある。
リノアと話している俺。

執務室にリノアが1人で来たのはあの時だけだな。

みんなの邪魔しちやだめだと一生懸命なんだよね、リノアって。

F・Hでのコンサート。

俺がスコールを案内している姿が見えた。

キステイスの酔い方が面白かったんだ。スコールに絡んでさ。

セルフィを乗せて荒野を車で駆け抜けている俺。

これは、ミサイル基地の時か。

よく上手くいったよ、セルフィの頑張りは本当に感謝するしかない。

ここまで来て、俺は昔へと旅を続けていると気がついた。

遡っていく記憶は、一体どこを終着点とたどり着くのだろうか。

ここに来てからの記憶が終わったら、その後は？

魔女暗殺計画。大統領誘拐計画。seed認定パーティ。

ドールでの実地試験。今年度のクラス発表。

始めて受けたキステイス先生の授業。遠巻きにみたゼルの大惨事。

始めて専門部の授業を受けた日。専門部に昇級した日。

スコールを構い、見守り続けていたあの日々が。

俺の目の前を通り過ぎて行く。懐かしさと恥ずかしさで一杯だ。

そして、初めて会話をした、あの食堂の記憶が通り過ぎていった。俺の記憶からスコールが消え去った。

続いて映るのは、魔術師と呼ばれていた数年間の記憶たち。

俺が地味な学生としてスコールたちに近づかなかったあの頃。

初ジャンクシヨンの日。魔術の授業を始めて受けた日。

違う常識に慣れられない俺。こっちに來て始めての友達が出来たこと。

そして、始めての授業。段々と最後まで時間を遡っていく。

もう少しで。もう少しで終わると思うと涙が出てくる。

俺の5年間はこんなに短かい、あつという間に振り返られる。

さらスコールと出会ってからは、まだ二年しか経っていないのだ。

俺の部屋に案内されたあの日。カドワキ先生の医務室。

そしてこの世界での最初の記憶、目覚めたその瞬間を終えると。

俺が知らない最後の記憶、この世界に來た瞬間が。始まらなかった。

ぼしゆん。気づいたら足元に泡が来ていたらしい。

また間抜けな音を立てて俺は泡の中に入り込む。今度は夕方の空だ。

落ちる速度はさつきまでと変わらない。ゆっくりとしたままだ。

ふと。

俺は誰かの気配を感じた。

辺りを見回してみるが、泡以外には特になにもありはしない。

だけど、気のせいと言い切るには無理がある感覚だった。

俺の身体全身に走る違和感は、身についた危機察知の警報を鳴らす。警戒しながら俺は更に落ちて行く。

周りの泡が何を写しているのか、興味を持って覗くと案の定だった。俺自身の記憶である。シオンではなく、一介の大学生であった俺の。流れていく記憶たち。

俺が生まれてから、そして大学生に上がるまでの優しい記憶たち。

もう手の届かなくなってしまった過去に、俺は手を伸ばす。

そうしても、泡がぼしゆんと消えるだけ。

決してもう戻れない記憶。せめてその残骸をこの手で抱きしめた。

なんでこんなことになったのだろう、と少しの寂しさと共に。

その記憶たちは時間通りに流れていった。

生まれて、育って、そして大学にあがって。

俺の覚えているところで記憶は途切れる。最後まで行かない。

俺の持っている俺の記憶はこれで終わりである。

いつからシオンになったのか。

待ち受ける記憶を早く見たいと思った瞬間、足元に突然泡が生まれた。3度目の泡の先は夜だった。

だが、それ以上に俺は耐えがたい全身の違和感を感じていた。頭の中がぞわぞわする。身体中がぞわぞわする。

思わず身体を抱き込んで、辺りを見回す。

今度は一体何が起こるんだよ。

これからどんどんこの違和感がひどくなつてくとかいいうなよな。

そう思いながら、周りの泡をにらみ着ける。

すると、そこには俺の知らないはずのものが映っていた。

見たことのない2人が、小さな少年を連れながら買い物をしていた。

場所は、日本ではない。これは見たことのある場所だけど。

「ティンバーの駅前、か？」

違う。重要なのは場所じゃない。これが一体誰なのか。

見たことがないけど、見覚えのある黒髪の男性と、茶髪の女性。

そして父親らしき男性に抱えられている茶髪の少年。

全身の違和感が更に強くなってくる。

まるで叫びだしているかのように、俺の身体はうずき続けている。ええい、違う。今はそんなことに気を取られている場合か。

幾つかの幸せそうな家庭の記憶が流れた。

家族でピクニックにいったこと。お誕生日パーティーをしたこと。

学校に入る手続きをしたこと。学校鞆を買いに行つたこと。

そんな記憶が流れて、俺は嫌な予感を隠せなかった。

俺が知っているあの人なら、この後は。次の記憶では1人だった。

まだ小さな少年に、テロだよと教えるのはガルバディアの兵士。

彼の両親を奪つたそれは、少年にも大きな傷跡を残していた。

そして少年は孤児院に預けられた。

孤児院はおなじような境遇の子どももしいなかった。

空虚なまま数年が過ぎた。友達も出来たし学校にも通つた。

だけど決して埋まらない何か、ずっとそこにあり続けた。

そして、だんだんと傾いて行く孤児院の経営。

先生たちは子どもたちには必死に隠していたけど、みんな知つてた。

毎日の食事はギリギリまで変わらず、ついに少し粗末になった。

ごめんね、という院長先生が自費も出していたのを知っていた。

だから「俺」たちはガーデンに入ることを決めただ。

場面が変わった。整備された町並みの中を車がかけて行く。

時間帯は深夜、間違いなく日本の風景であった。

俺はこの風景を知っていた。俺の大学のすぐ近くの道。

酒に酔った俺は独り暮らしの友達と、その家に行こうとしていた。

ふらふらとしている俺たちは周りから見ても危なっかしい。

恥ずかしいなど思っている俺たちと、遠くから車の音が聞こえてきた。

あ。

もしかしてこれは。

凄く陳腐な予感。まさかこんな詰らない理由だったりしないよな。

見ていると、案の定トラックの運転手はうつらうつらとしていた。

ああ気づけ。俺でもいい友達の誰かでもいい。このままじゃ死ぬぞ。

トラックの運転手は深い眠りに落ちたのか、更に身体を落とした。

その分握っていたハンドルは回され、道路から外れようとしていた。

あああ。気づいてくれ。本当にお願いだから。

俺はみんなが死んでしまうような光景なんてみたくない。

俺はこんな最後なら知りたくなかった。

その時。俺はどうやら何かに気づいたらしい。

俺の記憶であるからか。

まるでスローモーションのようにゆっくりと動き始めた。

ふらふらになっていくみんなを突き飛ばし、俺は地面に倒れる。

ゆっくりと近づいてくるトラック。

酒によったままの俺は、目を閉じて——音がした。

あは。

やるじゃん俺。

最高じゃん俺。

なんだよ。

俺は俺の期待を裏切らなかつた。俺は俺の望みをかなえてくれた。

あつははは。やつぱり俺は死んでいたんだ。

ずっとそうじゃないかと思っていた。

こんなありがちな終わり方で。

こんなありがちな死にかたで。

満足している俺が面白くて仕方がない。

ああ、きつと「違和感」も見ているんだろ？

おまえずっと気づかれないようにしていたみたいだけど、無理だぜ。だって俺たちは一つなんだもん。流石にここまで見たら気付くよ。なあ、おまえの最期も見せてくれよ。俺だけじゃなくてさ。

場面がまた変わった。

大陸横断鉄道の車室だ。

今よりも少し新しいだろう車内は、凄惨な赤色で染まっていた。

“シオン”はおびえて逃げようとして、何かに足を取られて転んだ。

ああ小さな腕だ。唯でさえ短いそれは、途中でちぎれて無くなっている。

多分一桁の子どものものだろう。彼には弟分であるかもしれない。

ひっと喉から空気を洩らした“シオン”。

立ち上がることもできない、その後ろから迫る灰色のモンスター。

なんだったか、俺には名前を思い出せないような雑魚。

今の俺ならジャンクシオン無しでも1体ぐらいなら倒せるだろう。

スコールたちなら武器だけで10匹や20匹無傷で全滅させそうだ。

その程度の存在。その程度の雑魚。だけど彼にとっては脅威だった。

何も力を持たない“シオン”。狩られるだけの存在。

いや違った。何も力を持たないわけではなかった。

“シオン”は叫び続けた。こっちにくるな！こないでよ！

もちろん聞き届けられるような、そんなわけもなかった。

殴り飛ばされてふっ飛ばされる“シオン”。

彼は泣きながら願いつ続けた。

どうか安全な場所に。どうかぼくにこいつを倒す力を。

彼にとつて幸運なのか不幸なのかは判らないが、彼には力があつた。

彼に同化した俺にはよくわかる。彼の能力はエルオーネの劣化品。

他者を他者へジャンクシオンさせるエルオーネの力の似て非なるもの。

彼女の力は時間を超えて過去に飛ばすことが出来るものだった。

“シオン”の能力は違った。自分に誰かをジャンクシオンさせる能力。

それも時間を超えることは出来なかった。

ただこの彼の最期の一瞬だけはそうではなかった。

同じ時間どころか、同じ世界ですらない何処か。

そんな場所から来た誰かをジャンクシオンして彼の身体は生き延びた。

そう。彼は死んでしまったのに、彼の身体は生き延びた。

気が付いた瞬間。

俺の意識は鮮明になった。

知覚能力はより鋭敏に、邪魔な壁がなくなったように感じる。

出来るかと思つて念じてみたら、落ちるのがとまった。

まるでG・Fのような空中浮遊。上下左右動きたいように動けた。

普段からこれなら、不自由もないのにと俺は思った。

邪魔な身体がなければ、G・Fつて、俺はこうなのかな。

やつぱり俺はこの世界では人間ではなかったのだ。

それに人の身体を勝手に動かしているなんて、俺の趣味じゃない。

なあシオン。

俺、おまえに身体返してやろうと思つただけどさ。

おまえは死んでるから、この身体を使うことつて出来ないよな。

でも俺もこの身体で生きるつもりはあんまりないんだよね。

なにせ満足しちやつたからさ。もうこれでいいかなと思つたんだ。

だけど、折角だから有効活用させてもらつていいかい？

反対は、どこからも聞こえなかった。

よし。

最期だ、行こうぜ相棒。最後の目標を果たしにさ。

俺の意識はスコールたちを追って、未来に駆けだした。

俺がたどり着いたのは廃墟だった。

砂浜で、少し先には大きな城とそれに繋がっている大きな鎖があった。

あれがアルティミシアの城か、つてことはここはイデアの家？

そんな風に首をかき上げていると、物音が聞こえたので振り返った。

「また君か！」

アーヴァインである。今度はなんと頭を抱えている。

「……シオン?!

なんであなたがここにいるの?」

「いや、まて、おまえ本当にシオンか?」

「なんだか雰囲気っていうか、気配が変だぞ?」

「じゃあ魔女の手先みたいなの?」

「遂に裏切ったの?」

「どうやら、俺はみんなよりも先にここにきていたらしい。」

「みんなが勝手なことをいうのに、俺はちよつと笑ってしまった。」

「シオン、か？」

「ああ、俺だよ。」

ちよつと事情があつて、着いてきちやつた」

「事情？」

スコールである。そのスコールも、俺かと判別しにくいらしい。

流石に今の俺はシオンと断言するにはちよつと難しい様だ。

確かに時間圧縮で身体がない分、今の俺はシオンよりも「俺」に。

人間よりもG・Fに近いのかもしれない。

今の俺は、まさしく俺の幽霊。何せ身体もなく生きてもない。

事情を説明するのは難しいし、折角だし見てもらおうと思う。

意識を集中させると、俺の記憶の泡が手のひらに浮かんだ。

俺はオダイソ博士との会話をみんなに見てもらふことにしたのだ。

「それは？」

「俺の記憶。」

折角だし、見てもらった方が早いと思つて」

「……どうやっているんだ？」

ふふふ、と俺は笑つて見せた。その説明ごと、見てもらふ。

泡をみんなに放り投げる。

みんな泡を通り過ぎていよう、なんの驚きもなく受け入れてくれた。少し経って、泡が消える。みんなが記憶を見終わったのだろうか。

小さく広がる沈黙に、少しだけ受け入れられない恐怖を感じ。

怖がりか全身へと至る前に、俺はわざとらしく軽い声をあげてみせる。

「ね、こういうことだよ」

「……G・Fなの？」

「うん、特に時間圧縮を受けてからは本格的にね。」

今の俺なら、いつもより探索も念話も精度高いよ」

戦闘能力はいつものままでけど。

そうやって笑うと、スコールたちは複雑な表情をしてみせた。

「そんな顔しないでよ。」

俺だって困ってるんだから」

「困るっ？」

どうして、といわんばかりのみんなに俺は苦笑してみせる。

「いや、そりゃそうでしょ。」

人間じゃないって言われちゃったしね。

特に今はそれも納得行くぐらいの力がある」

「人間だ」

「違うよ」

「違うない、おまえは人間だ」

スコールが繰り返し言ってくる。

人間かもしれない、けど。

わざわざそう言ってくるのなら、こちらから否定する要素もない。

「そう、かもね。」

でもここに来たのは事情があつて」

「どういうことだ？」

「俺はG・Fみたいなものなんだよ。」

G・Fはどっちかというと魔女よりの存在。

別に精神干渉はないみたいだから、敵に回ることはないけどね」

これは本当のことだ。

そもそもG・Fは、世界を作った魔女によって作られたものである。

だから、どっちかといわずとも人より魔女の影響を強く受ける。

「何が言いたい」

「つまり俺は下手すると帰れなくなるんだ。

魔女の力に引つ張られて、戻れなくなる可能性がちよつとだけある」
幾ら俺でも、ここに囚われてしまうのは、嫌である。

永久にここにいるのも嫌だし、何よりそれでは目標を果たせない。
だから、出来れば引つ張って欲ってくれる誰かと一緒にいたい。

そう、ちよつと遠慮がちに俺のお願いを言ってみる。

戦力とか裏切りだとか、色々あるから拒否されることもありうるか。
そう思っていた俺に、スコールは。

「そうか」

の一言だけ行って先に進もうとしてしまう。

みんなも普通に着いて行こうとするので、むしろ俺がおどろいた。

「ちよ、ちよつと待とうよー」

「なんだ」

スコールが無愛想に振り向く。

なんだじゃないよ。なんでそのまま受け入れようとするんだよ。

裏切りとかそういうリスクは考えたりはしないのかよ。

「いや、戦力的に邪魔だ、とか。」

信用ならないとかそういうったあれはないの?!

顔を見合わせるアーヴアインたち4人。

スコールとリノアは、訳が判らないとばかりにこつちをみている。

「いや、だつて、ねえ?」

「両方とも今更な気がするよな」

「ホントだよね」

「戦力も信じられないのも、そういう段階じゃないわよね」

先から順に、アーヴアイン、ゼル、セルフイ、キステイス。

なんか凄いやわれ方をされている。いやいや、みんな酷くない?

今までの俺の行動がアレ過ぎるのか。そんなことは、どうだろう。

「ちよつと!」

なんだよその言い方は!」

「いや、だつて完璧に今更だよ?」

「君たちは俺を信用してなかったの?!」

「判ってなかったの?!」

酷い。

シヨックを受ける俺に、更に顔を見合わせるみんな。

いや、何を不思議そうにみたいな顔をされても本当に困る。

「あれだけ怪しいのにな？」

「自覚なかったんだ……」

「いつ裏切るか冷や冷やしてたのに」

「むしろG・Fだったと聞いて一安心だよ」

だってその方が、今までの行動に納得がいくしねー。

そんなことを真顔で言われては、流石の俺にも立場というものが。

気を取り直して、俺はまだ悲劇の主人公ムーブをする。

「……それに、俺、人間じゃないし」

「人間だ」

「私も魔女だよ？」

「2人とも人間だ」

なんかスクールたちが遠まわしにいちやついている。

あ、なんかちよつとだけ苛ついてきた。

こう、もうちよつとでいいから俺に気を使って欲しい。全員。

「……着いて行ってもいいの？」

「最初からそう言っている」

「裏切るかもよ?」

「問題ない」

「足手まといだよ?」

「探索で働け」

「本当に、いいの?」

「時間をもつたないだろう」

なんか、スコールは本当にどうでもよさげである。

なんだよ、俺が緊張してお願いしているとみんな冷たい。

まあいいのなら、いいか。これも俺への信頼ということだろう。

「……よろしくね」

「ああ」

スコールがそっぽを向きながら返事をした。

最終話

アルティミシア城は仕掛けでいっぱい遊園地である。

Seedの使う戦闘技能に対してそれぞれ封印が掛っており。

封印を守る護衛獣を倒さないと、その能力が使えない。

それぞれ仕掛けの中に隠れていて、倒すには仕掛けを解く必要がある。

だが、今の俺には仕掛けなんてものの数ではなかった。

記憶の中からゲームの記憶を見られるし、そもそも探索で十分だ。

今の強化された通信能力ならどこからでも一方的に通信できる。

戦闘能力に特化した前線のみんなに護衛されながら誘導していく。

スコール、リノア、ゼルの班。

アーヴァイン、セルファイ、キステイス、俺の2班に分かれて突入。

まずはホールのアンドロ・スフィンクスをスコール隊で撃破。

続けてスコール隊にそのまま進んでもらいシャンデリアを落下させる。

雷耐性をジャンクションしてもらい、トライエッジを撃破。

レバーを抑え、シャンデリアの先のコキュートスをセルフイ班で倒す。その間俺は入り口で隠れていることにした。戦えはしないからね。

セルフイ班に俺を回収してもらい、スコール班とともに奥に進む。

大広間の奥、中庭の噴水で宝物庫のカギを手に入れ、スコール班が進む。4つの棺を調べ、その先にいたカトブレパスを撃破する。

スコール班に続けてホール右側の画廊に行ってもらう。

大きな絵のタイトルは「庭園に眠る使者」が答え、戦闘が始まる。

ドルメン・アリニユメンを撃破。残るはあと3体。

セルフイ班で武器庫のカギを回収し、水門に向かう。

武器庫・牢獄でガルガンチュアとウルフラマイターを撃破する。

俺はの間スコール班と一緒にいた。

全員で中庭に戻り、時計塔を登る。

途中の振り子の先に敵がいることを伝え、セルフイ班に行ってもらう。

炎耐性ジャンクションで安全にティアマトを蹴散らした。

全ての護衛獣を撃破し、アルティミシアの居室へとたどり着いた。

俺は力不足であることと、意識を取られる可能性。

ドローされてG・Fにされる可能性を考慮して外で待つことにした。

俺の手の届かない戦いが、部屋の中で行われているのが判る。

時空が少しずれてるだろうか、部屋の中の音は聞こえてこない。

どれだけの規模の戦いをしようか、外には影響が出てこなかった。

だけど俺はスコールたちを信頼してる

負けるとか、そんなのが似合う彼らじゃない。そんなのあり得ない。

ただもしも、もしも中から戦いの気配が消えたとか。

そんな時だけ、フェニックスの尾を持って中へと突撃しよう。

そうすればきつとまたみんな戦えるようになるから。

でも。そんなことは必要がなかったらしい。

やがて、世界は白に包まれ、アルティミシア城は崩壊を始める。

時間圧縮の逆戻し、時間の再展開である。俺たちは勝つたのだ。

また溶けてしまった時間の中。

みんなが元の場所に、元の時間に必死に帰ろうとしていた。

鋭敏になった俺の感覚は、意識をするだけでみることが出来た。

そしてスコールだけが場所を気づけていない。

スコールが帰りがかった場所。求め続けていた場所。

スコールが足踏みを続けていた、あの時にいつてしまった。

世界で最高の素質を持った最高の魔女イデア。

最期の魔女はイデアに力を継承するためにあの場所に現れた。

そしてスコールによってママ先生は seed を知り、ガーデンを知る。

悲劇の運命はその時に始まり、魔女の運命はここに終わる。

そしてスコールは帰り始めた。

みんなを呼んで、走り始めた。

どこに行けばいいのかを、始めて人に問いかけた。

俺はみんなに呼び掛けた。

みんな、聞こえていますか？

スコールがどこに行けばいいのかを迷っています。

どうか、みんなで呼び掛けてあげて欲しいんだ。

そしてリノア。

この世界において、君の力は唯一の目印になる。

俺に少しの時間だけでいいから貸してくれないか？

みんなが行くべき場所へ。

スコールが向かう場所を指し示すことが出来るのは俺だけだから。

だから、今ひと時だけその力を。俺の目的を達成する為に。

「聞こえてるよっ！」

スコールを呼べばいいんだねっ！」

セルフィのうれしそうな声が聞こえる。

「任せろよ！」

声のでかさには自信あるぜ！」

ゼルの声が大きく響き渡る。

「どの方向にいるのかしら？」

せめて方向が判ればいいんだけど」

キステイスの疑問が凜と響いた。

「うーん。

場所とかがある場所じゃないよね？」

アーヴァインの声がそれにこたえる。

「私の力がみんなの目印になるのならっ！」

シオン！

みんなを、スコールを助けてあげて！」

そして、リノアの声が聞こえた。

……ああ。

俺はこんないい人たちを置いて行こうとしてるのか。でも、きつとこれが一番いいはずだ。

俺はもう、あの身体に戻って生きて行くつもりなんてないから。身体に流れてくる魔女の力。

圧倒的な量の情報に、俺は消えてしまいそうになる。

だけど、今はちよつとだけ我慢する。後少しで終わるから。

みんなの居るべき時間に光を作る。どこに居たつて見える光を。

「スコール。見えている?」

「……おまえは誰だ?」

G・Fの記憶障害つてやつ?

こんなときに起こるなんて、本当に間が悪いよね。まあいいよ。

君の帰る場所はその光の場所。見えてる?

「光?」

見えてないの?

「言われれば、見える気がする」

そつちだよ。きつとみんなの呼ぶ声も聞こえてくるから。

「みんな?」

もう、そこからなの？いいから走って行きなさい。

「わかった」

素直でよろしい。

俺は立ち止まってスコールたちの後ろ姿を見つめる。

ああ、みんなの声が聞こえたみたいだ。

不思議そうな顔をしていたスコールも段々スピードが上がる。

既に光の下にはスコール以外の全員が集まっていた。

このまま時間圧縮が終われば、きっと無事に帰れるのだろう。

魔女の力で、もう終わりがけた時間圧縮をもう少しだけ引き延ばす。

そうして俺は俺の行くべき場所に飛ぶ。この中に居る魔女は俺だけだ。

だからなのか俺の目的地、時間のひずみには直ぐにたどり着いた。

俺はこのまま消え、魔女の力を世界から亡くそうと考えていた。

シオンは身体にもどることは出来ず。

俺はあの身体で生き続けるつもりはない。

それならば、魔女とともにここで消えてしまうのが一番だと思ったのだ。

その為にアルティミシア城へと向かい、みんなの手助けをしたのだ。

この時間圧縮の中で、リノアから魔女の力を継承するその為に。

そして声に導かれたスコールが光にたどり着く。再開を喜び合う。光の元で、俺が居ないことにみんなはすぐ気付いた。

「ねえ、どうしてシオンは居ないの?」

「そうだよ!」

どこに行っちゃったの?」

「今更迷うなんてことはねえよなあ?」

ああ、どうか気づかれずに消えてしまえたらよかったのに。

「ねえ、シオン?」

どこに行っちゃったのよ」

「さっさと帰ってパーティしようよ」

「……まさかつ!」

スコールが何かに気づいてしまったみたいだ。

だとしても、ここは俺の世界に近い。

気づかれたとしても、スコールたちにはもう何も出来ないはず。

「魔女の力に引きずられたんじゃないか?!」

「そんなこと!」

さっきは普通に通信までしていたのよ?!」

「私だって魔女の力貸しちやっただから！」

スコールたちが勘違いをしてきている。

俺は俺の意思で消えようとしているのだ。

悲しんでくれることは嬉しいが、引きずらないでほしいなあ。

そう思つて俺はさっさと時間圧縮を終わらせようとした。

少しずつ、少しずつ。端っこから順番に世界は元の形に戻つていく。

彼らの世界へ繋がるように、元の流れに戻りますように、と。

「——時間圧縮がつ！」

「ねえシオンは？」

シオンはどうなっちゃうの！」

「おい、帰つて来いって！」

一人だけ居ないとかそんなの嫌だぜ！」

「そっだよ！」

君が居ないとガーデンがどうしようもなくなっちゃうよ！」

「聞こえているんでしよう答えなさい！」

シオン・グレイル?!」

「シオン！」

答えてくれ！」

アーヴアインが。リノアが。ゼルが。

セルファイが。キステイスが。スコールが、俺の名前を呼び続ける。戻って来いと、その声を叫ぶようにして張り上げる。

元の形に戻り始めた時間。それとともに形が出来てくる風景。

俺は集中してみんなの姿を記憶にとどめる。

たとえ消えるとしても、天国にまで持っていけるかもしれないから。風景とともに、みんなの姿が消えて行く。

元の世界にだんだん戻って行っているのだと、今の俺には判った。

もう直ぐだ。もう直ぐこの時空の歪みの中に俺は閉じ込められる。

最初はアーヴアインが。続いてゼルが。

キステイスが。セルファイが。

そして、リノアが消えようとするとき、リノアは叫んだ。

「スコール！」

もう少しだけ、もう少しだけ時間をあげる！

だから、シオンを！」

「リノア！」

リノアは消えた。

彼女には、少しだけ魔女の力の片鱗が残っていたのだろうか。

それと同時にスコールの姿が戻る。俺の心はまだ続く。

白い世界の中でたった一人になったスコールが叫ぶ。

「シオン！」

聞こえているんだろう、シオン?!

どうしてみんなそんなに俺が聞こえることを前提で話すのかな？

「おまえが人間でないとか、そんなことはどうでもいい！」

俺はお前が居てくれないと困るんだ！」

スコールが今まで見たこともないような顔で。

聞いたこともないような音量で叫んでいる。

「俺は、おまえにいろんなことを教えてもらった。

俺はシオンに沢山のことをしてもらった。

沢山の借りがあるんだ、まだ居なくなつて欲しくない！」

そういうえば、俺がseedになると決めたのはスコールの為だったつけ。

あの時は可哀想な男の子に見えたけど、今は君の方が年上に見えるね。

身体は同い年だし、精神は年上のはずだけど。大きくなったよね。

「お願いだ！戻ってきてくれよ、シオン！」

なんで居なくなっちゃうんだよ?！」

今のスコールは子どものように見えた。

きつとエルオーネが居なくなつた時も同じように叫んだのだろうな。

子どものように、置いていかれたと泣いて悲しがつたのだろう。

「なあ！」

本当にお願いだよ！

おまえにはまだまだ教えてもらいたいことがあるんだ！

俺一人じゃ何も判らない。

俺一人じゃ何も決められない。

俺は一人では生きていけないんだ！」

スコールにはリノアがいるし、他のみんなもいるだろう？

みんなを頼ればいいんだよ、君は立派に世界を救えたはずなんだ。

ほら、君の姿がまた薄れてきている。もう時間切れだよ。

俺にとつても、君にとつても。

「おまえも！」

おまえも俺をおいていくのか！

俺を置き去りにして何処かにいってしまおうのか！」

ああ。

そういえば俺は、スコールが一番嫌うことをしようとしているのか。

最初はレインに。そしてエルオーネに。アイデアに。リノアに。

大切な人たちに。スコールは置いて行かれ続けているんだった。

どうしよう。

俺はスコールを悲しませるつもりなんてなかったんだけど。

ちよつと旅に出るぐらいで、トラウマを刺激するつもりはなかった。

これは、困ったな。俺もスコールを悲しませたいとは思わない。

スコールを置き去りにするつもりなんてなかったのに。

いつそ、俺の記憶だけを消してしまっただけかせるべきだろうか。

ついにスコールは消えてしまった。俺に残された時間も少ない。

ああ、このままスコールを置き去りにしちゃうのか？

それとも魔女の力ごと元の世界に戻るのか？それは出来ない相談だ。

——手伝ってあげようか。

え、と何処からか掛けられた声に辺りを見渡す。

勿論何もいなかった。居るはずがない。もうここは俺だけのはず。

今この世界に居られる存在なんて、殆どいないはずなのだ。

——ね、帰りたくないでしょ？

やっぱり声がする。

本当に魔女の力の影響がG・Fの俺に出てきたのか？

そんなことはない。俺には、俺には一つだけ心当たりがあった。

——ぼくがもって行ってあげてもいいよ。

ああ。どうしようこの声。

高くて、小さな少年みたいな声。

俺はこの声に聞き覚えがあった。

——楽しかったから、そのお礼だよ。

その声と同時に俺は弾き飛ばされた。

俺が作り上げたはずの光に向かって凄いスピードで飛んでいる。

必死になって振り返ると、そこには12歳ほどの茶髪の少年がいた。

俺に向かって手を振っている。俺はその手に振り返す。

——バイバイ、おにいちゃん。

ああ。

悪いな。

俺おまえの身体、もらっちゃうよ。おまえの人生貰っちゃうよ。

——大丈夫。

——ぼくもおにいちやんの家族、もらうから。

そうか。あんなんで良ければもらってやってくれ。

意外といい人たちばかりで、自慢の家族だったんだ。

魔女の力を持ったおまえが入るなら、事故にあった俺も助かるだろう。

どうか、よろしくしてやってくれ。

——任せて

そして俺は光の中に吸い込まれてしまった。

気が付いたら、俺はラグナロクのブリッジに居た。

始めて乗るけど、記憶の中でみたことあったし。

なによりスコールたちも全員揃っていたから、一目で判った。

ああ、みんながすつごく驚いた顔をしている。俺も驚いているよ。

助かるなんて、またみんなに会えるだなんて思っていなかったから。まあ、いいや。

みんなが声にならないようなので、俺が先に言わせてもらおうかな。俺はコホンと、喉の調子を確認すると、最後の一言を呟いた。

「みんな、遅くなったけど——」

ただいま。